岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第614集

銭倉遺跡・要害遺跡発掘調査報告書

ぜにくら　ようがい

経営体育成基盤整備事業南下幅北部地区関連遺跡発掘調査

２０１３

岩手県県南広域振興局農政部農村整備室

（公財）岩手県文化振興事業団

銭倉遺跡・要害遺跡発掘調査報告書

経営体育成基盤整備事業南下幅北部地区関連遺跡発掘調査

序

岩手県には旧石器時代から連綿と続く数多くの遺跡が残されております。先人達が創造してきたこれらの貴重な文化遺産を保存し、後世に伝えていくことは、私達県民に課せられた責務であるといえましょう。一方、広大な面積を有し、その大部分が山地である本県にあっては地域開発による社会資本の充実も県民の切実な願いであります。

このような埋蔵文化財の保護、保存と開発との調和は今日的な課題であり、当岩手県文化振興事業団は埋蔵文化財センターの創設以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもと、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、記録保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、経営体育成基盤整備事業南下幅北部地区に関連して平成23年度に発掘調査を行った岩手県奥州市胆沢区南都田に所在する銭倉遺跡および要害遺跡の調査結果をまとめたものであります。

発掘調査によって、この地域に古代および近世の遺構や遺物が見つかっており、長きにわたって断続的に生活に利用されていた場所であることが判りました。

この報告書が広く活用され、斯学の研究のみならず、埋蔵文化財行政に対する理解の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、これまでの発掘調査及び報告書作成に御援助・御協力を賜りました岩手県県南広域振興局農政部農村整備室をはじめとする関係各位に衷心より感謝申し上げます。

平成25年３月

公益財団法人　岩手県文化振興事業団
理事長　　池　田　克　典

例　　言

1　本報告書は岩手県奥州市胆沢区南都田字銭倉24-2他に所在する銭倉遺跡および、奥州市胆沢区南都田字本木地内に所在する要害遺跡の発掘調査の結果を収録したものである。

2　本遺跡の調査は、経営体育成基盤整備事業に関わる事前の緊急発掘調査である。調査は岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課と岩手県県南広域振興局農政部農村整備室との協議を経て、（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが委託を受け、受託事業として実施した。

　なお、費用負担は岩手県教育委員会が岩手県県南広域振興局農政部農村整備室に農家負担分を補助している。

3　本遺跡の調査成果は、すでに『平成23年度発掘調査報告書』（岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第603集）において発表しているが、内容については本書が優先する。

4　岩手県遺跡登録台帳に登録されている銭倉遺跡・要害遺跡の遺跡番号と遺跡略号は次の通りである。

銭倉遺跡　　遺跡番号　ＮＥ15－2215／遺跡略号　ＺＫ－11

要害遺跡　　遺跡番号　ＮＥ15－2256／遺跡略号　ＹＧ－11

5　野外調査の面積・期間・担当者は次の通りである。

銭倉遺跡　　1,167㎡／平成23年４月26日～５月31日／溜 浩二郎・米田寛

要害遺跡　　1,500㎡／平成23年５月12日～６月22日／　　〃

6　室内整理の期間・担当者は次の通りである。

銭倉遺跡　　平成23年11月１日～12月28日／溜 浩二郎

要害遺跡　　平成24年２月１日～３月31日／　〃

7　要害遺跡の分析鑑定は次の機関に依頼した。

　石材鑑定：花崗岩協会、放射性炭素年代測定：株式会社加速器分析研究所

8　基準点測量は、株式会社南部測量設計に委託した。

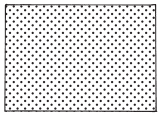
9　野外調査・室内整理にあたって次の方々の御協力・御指導をいただいた（敬称略）。

　奥州市教育委員会

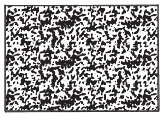
10　本報告書の編集については、溜浩二郎が行った。第Ⅰ章「調査に至る経過」は岩手県県南広域振興局農政部農村整備室に原稿を依頼し、執筆していただいたものである。

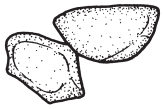
11. 本遺跡の調査で得られた一切の資料、出土遺物・撮影写真・遺構実測図・遺物実測図などは岩手県立埋蔵文化財センターにおいて保管している。

〔遺構〕

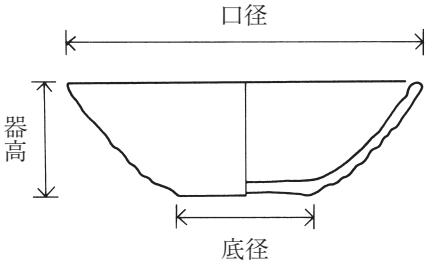

焼土

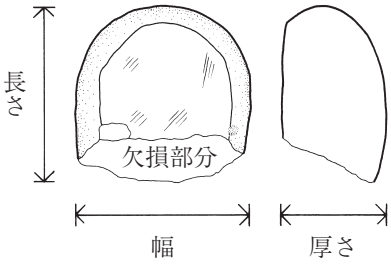
柱痕


炭化物・材

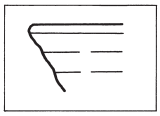

礫

〔遺物〕

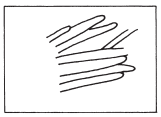


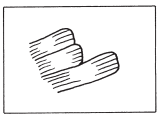


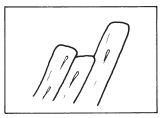
須恵器


ロクロナデ

黒色処理


ミガキ


ヘラナデ


ヘラケズリ

凡例図

目　　次

Ⅰ　調査に至る経過……1

Ⅱ　遺跡周辺の地理的環境
1　遺 跡 の 位 置 ……1
2　地 理 的 環 境 ……1
3　歴 史 的 環 境 ……3

Ⅲ　銭　倉　遺　跡
1　立　　地……11
2　概　　要……11
3　調査の経過と調査方法……11
4　室内整理の手順と方法……13
5　基　本　土　層 ……16
6　検出した遺構 ……16
7　出　土　遺　物 ……19
8　ま　と　め……26

Ⅳ　要　害　遺　跡
1　立　　地……27
2　概　　要……27
3　調査の経過と調査方法……27
4　室内整理の手順と方法……29
5　基　本　土　層 ……30
6　検出遺構と出土遺物 ……31
7　遺構外出土遺物 ……54
8　ま　と　め……65

附編　自然科学分析……67
要害遺跡における放射性炭素年代（AMS測定）……67
報 告 書 抄 録……112

表　目　次

第１表　周辺遺跡一覧……10
銭倉遺跡
第２表　柱穴状土坑一覧表……19
要害遺跡
第３表　新旧遺構名対応表……30
第４表　柱穴状土坑一覧表……52
第５表　土器観察表……62・63
第６表　石器観察表……63
第７表　陶器観察表……64
第８表　瓦観察表……64
第９表　出土土器重量一覧表……64

図版目次

第１図　遺跡位置図……２
第２図　地形分類図……４
第３図　銭倉遺跡周辺の地形と調査範囲……５
第４図　要害遺跡周辺の地形と調査範囲……５
第５図　周辺の遺跡分布図……９
銭倉遺跡
第６図　グリッド配置図……12
第７図　遺構配置図（Ｂ区）……14
第８図　遺構配置図（Ｃ区）……15
第９図　基本土層……16
第10図　出土遺物……19
第11図　１・２号土坑……20
第12図　１・２号溝跡、１号性格不明遺構……21
第13図　柱穴状土坑（１）……22
第14図　柱穴状土坑（２）……23
第15図　柱穴状土坑（３）……24
第16図　柱穴状土坑（４）……25
第17図　柱穴状土坑（５）……26
要害遺跡
第18図　遺構配置図……28
第19図　基本土層……30
第20図　１号住居跡（１）……31
第21図　１号住居跡（２）……32
第22図　２号住居跡（１）……33
第23図　２号住居跡（２）……34
第24図　２号住居跡（３）……35
第25図　３号住居跡（１）……36
第26図　３号住居跡（２）……37
第27図　４号住居跡（１）……38
第28図　４号住居跡（２）……39
第29図　１号住居状遺構……40
第30図　２号住居状遺構……42
第31図　３号住居状遺構……43
第32図　１～５号土坑……47
第33図　６～９号土坑……48
第34図　１号溝跡……49
第35図　柱穴状土坑（１）……50
第36図　柱穴状土坑（２）……51
第37図　柱穴状土坑（３）……52
第38図　１号性格不明遺構……53
第39図　遺構内出土遺物１……55
第40図　遺構内出土遺物２……56
第41図　遺構内出土遺物３……57
第42図　遺構内出土遺物４……58
第43図　遺構内出土遺物５……59
第44図　遺構内出土遺物６……60
第45図　遺構内出土遺物７、
　　遺構外出土遺物……61

写真図版目次

銭倉遺跡
写真図版１　航空写真……73
写真図版２　調査前風景、基本土層……74
写真図版３　１・２号土坑、１・２号溝跡……75
写真図版４　柱穴状土坑（１）……76
写真図版５　柱穴状土坑（２）……77
写真図版６　柱穴状土坑（３）……78
写真図版７　柱穴状土坑（４）……79
写真図版８　柱穴状土坑（５）、１号性格不明遺構、出土遺物……80
要害遺跡
写真図版９　航空写真……81
写真図版10　１号住居跡（１）……82
写真図版11　１号住居跡（２）……83
写真図版12　１号住居跡（３）、２号住居跡（１）……84
写真図版13　２号住居跡（２）……85
写真図版14　２号住居跡（３）……86
写真図版15　２号住居跡（４）……87
写真図版16　２号住居跡（５）……88
写真図版17　２号住居跡（６）……89
写真図版18　２号住居跡（７）、３号住居跡（１）……90
写真図版19　３号住居跡（２）……91
写真図版20　３号住居跡（３）……92
写真図版21　４号住居跡（１）……93
写真図版22　４号住居跡（２）……94
写真図版23　１号住居状遺構……95
写真図版24　２号住居状遺構……96
写真図版25　３号住居状遺構（１）……97
写真図版26　３号住居状遺構（２）、１号土坑……98
写真図版27　２～５号土坑……99
写真図版28　６～９号土坑……100
写真図版29　４～９号土坑……101
写真図版30　１号溝跡……102
写真図版31　Ｐ１～５……103
写真図版32　Ｐ６～10……104
写真図版33　Ｐ５～８・11～17……105
写真図版34　１号性格不明遺構、調査区……106
写真図版35　遺構内出土遺物１……107
写真図版36　遺構内出土遺物２……108
写真図版37　遺構内出土遺物３……109
写真図版38　遺構内出土遺物４……110
写真図版39　遺構内出土遺物５、遺構外出土遺物……111

Ⅰ　調査に至る経過

銭倉遺跡と要害遺跡は、「経営体育成基盤整備事業南下幅北部地区」のほ場整備に伴い、その事業区域内に存在することから発掘調査を実施することとなったものである。

本地区は奥州市胆沢区中心部より北東約４㎞に位置し、現況は小区画・不整形な水田で、かつ幅員狭小な農道となっていることから、作業効率が悪く、また用排水兼用の土側溝水路のため、用水不足や排水不良となっており、維持管理に支障を来しているところである。

このため、本事業地区においては、大区画ほ場整備を実施することで、農作業の効率化、生産コストの削減、生産性の向上等を図り、農地集積による安定した経営体および担い手農家の育成を目的として、事業着手したものである。

当事業の施工に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、県南広域振興局農政部農村整備室から平成20年11月13日付け県南広農整第149-1号「経営体育成基盤整備事業南下幅北部地区における埋蔵文化財の試掘調査について（依頼）」により岩手県教育委員会に対して試掘調査の依頼を行った。

依頼を受けた岩手県教育委員会は平成20年12月15日から平成21年４月14日にかけて試掘調査を実施し、工事に着手するには当該遺跡の発掘調査が必要となる旨を、平成21年６月25日付け教生第447号「経営体育成基盤整備事業（南下幅北部地区）における埋蔵文化財の試掘調査について（回答）」により回答してきた。

この回答を受け、当農村整備室は平成23年９月８日付け県南広農整第134-4号「埋蔵文化財試掘調査結果による工法変更協議について」により、盛土工法による保存箇所と発掘調査による記録保存箇所について協議を行った。

その結果を踏まえて当農村整備室は、岩手県教育委員会の調整を受けて、公益財団法人岩手県文化振興事業団との間で委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。

（岩手県県南広域振興局農政部農村整備室）

Ⅱ　遺跡周辺の地理的環境

１　遺 跡 の 位 置

銭倉遺跡、要害遺跡は、奥州市胆沢区南都田に所在する。JR東北本線水沢駅から西方４～５㎞の胆沢扇状地の低位段丘面上に位置する。その位置は国土地理院発行の地形図1/50,000「水沢」NJ－54－14－14図幅に含まれており、北緯39度８分17秒～39度７分35秒、東経141度５分０秒～141度５分25秒付近〔世界測地系〕である。遺跡の南側には、扇状地から北上川に向かって東西に流れる胆沢川とほぼ並行して国道397号線が走り、要害遺跡は国指定史跡の角塚古墳とこれを挟んで北側に隣接する。また、銭倉遺跡の東側には平成21年度に当埋蔵文化財センターにより調査が行われた堰田遺跡、机地遺跡が位置している。両遺跡とも調査前現況では、大部分が水田で、そのほか畑地・農道となっている。

２　地 理 的 環 境

第１図　遺跡位置図

銭倉遺跡・要害遺跡は、岩手県奥州市胆沢区南都田字銭倉・字本木に所在する。奥州市は平成18年２月20日の市町村合併により、水沢市・江刺市・前沢町・胆沢町・衣川村の５市町村を集め新設された名称である。遺跡の所在する胆沢区（旧胆沢町）は岩手県南の内陸部に位置し、西側の奥羽山脈と東側の北上山地に挟まれた南北に長い北上盆地にある。この盆地は南流する北上川によって盛岡以北を上流域、盛岡～前沢間を中流域、前沢以南を下流域と３区域に区分されている。胆沢区はこの中流域南端に位置し、北は金ヶ崎町、東は水沢区、南は衣川区と境を接している。

北上川は岩手県内に南北に延びる北上低地帯を南流し、宮城県石巻市で太平洋に注ぐ全長249km、流域面積10,150㎡の東北地方有数の河川である。流路は低地帯の東側に偏り、また北上川に注ぐ支流のうち大きな河川の殆どが奥羽山脈に源をもつことから、扇状地や段丘の発達は奥羽山脈に接する西側で良好である。これらの扇状地は北上川の支流で開析され、発達した河岸段丘や扇状地、河岸平野および起伏量の小さい丘陵地が互いに入り組む構造となっている（第２図）。

本遺跡の所在する胆沢区においてもこの傾向はそのまま現れるが、南流する北上川によって分断される東部と西部では対照的な様相を示している。東部地域は北上山地が近くに迫る丘陵地帯を呈し、標高90m以上の浸食面と標高50 ～ 90mの段丘面が認められ、多くの小支谷によって分断されている。一方、西部地域は胆沢区の若柳、市野々を扇頂部とする広大な胆沢扇状地の東部に位置する。この扇状地は大きく高位・中位・低位の段丘に区分され、さらにその中で細分されている。胆沢川南岸の高位段丘面（一首坂段丘）から、中位段丘面（胆沢段丘：比高上位から順に上野原、横道、堀切、福原に４細分）、低位段丘面（水沢段丘：水沢高位段丘と水沢低位段丘に細分）へと続く。低位段丘面は、高・中位段丘を取り巻くように北と南、扇端部に広がっている。すなわち、低位段丘面の堆積物は胆沢川から前沢区にまで広がっており、北上低地帯にまで及んでいる。銭倉遺跡と要害遺跡は、この低位段丘面に位置する。

３　歴 史 的 環 境

（１）奥 州 市 の 遺 跡

平成23年３月現在、岩手県教育委員会が作成した『岩手県遺跡情報検索システム（県南広域振興局管内）』によれば、奥州市では1030箇所の遺跡が登録されている。内訳は水沢区320遺跡、江刺区289遺跡、胆沢区175遺跡、前沢区143遺跡、衣川区103遺跡である。

（２）胆 沢 区 の 遺 跡

銭倉遺跡・要害遺跡は胆沢区の北東部に位置し、水沢区の西側と金ヶ崎町南端付近に隣接している。以下遺跡のある胆沢区を中心に周辺の遺跡について概要を述べる。

旧石器時代

旧石器時代の遺跡は胆沢扇状地に分布している。胆沢扇状地の中位段丘面には下嵐江Ⅰ・Ⅱ遺跡、上萩森遺跡、岩洞堤遺跡、二の台長根遺跡など、石器集中部が確認された遺跡が複数ある。時期別では後期旧石器時代前半期の石器群は、上萩森遺跡、二の台長根遺跡で確認され、台形石器と打面残置のナイフ形石器が出土している。一方、後期旧石器時代後半期の石器群としては、いわゆる「真正の石刃技法」を保有していることが特徴のひとつであり、岩洞堤遺跡が該当する。

水沢段丘低位
福原段丘
水沢段丘高位
西根段丘
水沢段丘低位
銭倉遺跡
要害遺跡
大歩段丘
水沢段丘高位
水沢段丘低位
福原段丘
西根段丘
堀切段丘
横道段丘
上野原段丘
西根段丘
一首坂段丘高位
水沢段丘高位
(1:50,000　北上・水沢を50%縮尺)

第２図　地形分類図

第３図　銭倉遺跡周辺の地形と調査範囲

第４図　要害遺跡周辺の地形と調査範囲

縄文時代・弥生時代

縄文時代の遺跡は胆沢区内で125ヵ所登録され、このうち他の時期と複合する遺跡が33ヵ所ある。全体として前期～中期の遺跡が多い。南都田地区とその周辺では、漆町遺跡（34）から早期中葉の貝殻文系土器が出土しているほか、芦の随遺跡では前期～中期の集落跡が発掘調査されている。小十文字遺跡（50）からは早期後半から前期初頭の土器が出土している。弥生時代では清水下遺跡（33）、漆町遺跡など水沢低位段丘面上にも遺跡の形成が見られる。また、角塚古墳（30）、牡丹野遺跡（46）でも弥生土器が出土している。

古代

奥州市内は非常に多くの古代遺跡の発掘調査が行われている。

古墳時代では国指定史跡の角塚古墳が５世紀中頃に造営されている。また、いわゆる末期古墳に位置づけられる蝦夷塚古墳（６）、糀谷田古墳（43）鶴田古墳群、見分森古墳（53）が存在する。さらに、角塚古墳の東方には石田Ⅰ・Ⅱ遺跡（27）、北方には中半入遺跡（７）などで、大規模な集落が見つかっており、古墳造営に関与したムラと考えられる。

奈良時代では、漆町遺跡、二本木遺跡（32）、要害遺跡（29）、机地遺跡（24）、塚田遺跡（31）石田Ⅰ・Ⅱ遺跡、作屋敷遺跡（36）、堤遺跡（39）、小十文字遺跡などがある。

平安時代の遺跡は古代城柵である胆沢城跡をはじめ多くの遺跡がある。中半入遺跡、机地遺跡、沢田遺跡（26）、宇南田遺跡（28）、尼坂遺跡（49）、牡丹野遺跡、作屋敷遺跡、川端遺跡（38）、堤遺跡などがある。南都田地区の遺跡では作屋敷遺跡と堤遺跡、石田Ⅰ・Ⅱ遺跡、要害遺跡、沢田遺跡などから須恵器甕が出土している。これら須恵器甕の中には器面の発泡が顕著な個体も散見されるため、須恵器窯が遺跡周辺に存在したことの間接的な証拠である。国分遺跡（48）の南に位置する独立丘陵に見分森公園が存在し、その範囲にある見分森遺跡では穴窯と須恵器窯が発掘調査によって確認されている（伊藤・佐久間1990）。見分森遺跡は南都田地区平安時代遺跡への須恵器供給源であった可能性が考えられる。

ほかに、要害遺跡、堤遺跡からは瓦片、沢田遺跡からは９～10世紀代の灰釉陶器、緑釉陶器、12世紀代の白磁四耳壺の底部破片やかわらけが出土していることが特筆される。

中世・近世

銭倉遺跡・要害遺跡が所在する胆沢区内で登録されている中・近世遺跡は15ヵ所ある。広岡館跡（飯坂館）（47）、小山方八丁館、若柳要害館、香取根館などがある。中世前期は確認されている遺跡が少なく、中世末から遺跡数が増加する。銭倉遺跡（22）もそのひとつであり、近世初頭以降の伊達藩領内における発展と遺跡数の増加は連動していると考えられる。

最近の発掘調査で、中世の資料は、国分遺跡で16世紀末の陶磁器、隣接する牡丹野遺跡で12世紀の常滑窯産陶器、川端遺跡の西方にある作屋敷遺跡で15世紀の連弁文青磁椀片と16～17世紀の瀬戸・美濃系陶器碗片が出土している。牡丹野遺跡の12世紀陶器は河川跡から出土している。

近世発掘調査例としては、同じく牡丹野遺跡で肥前産陶器、尼坂遺跡で18世紀の大堀相馬産陶器碗が出土している。

（３）周 辺 の 遺 跡

銭倉遺跡、要害遺跡のある奥州市胆沢区南都地区は歴史的に散居を特徴とする胆沢町にあって、数

少ない住宅などの密集地の一つであり、このため圃場整備や宅地造成などの開発に関わって過去に発掘調査が行われた遺跡が多い。いずれも遺跡の一部のみの調査であるが、該期および隣接する遺跡の調査成果は以下のとおりである。

26　沢田遺跡（胆沢区南都田字沢田43～46番地）
調査期間・・・昭和61年11月13日～同年12月26日　　調査面積・・・3,968㎡
検出遺構・・・竪穴住居跡６棟。　出土遺物・・・土師器、須恵器
時　　期・・・奈良・平安時代

28　宇南田遺跡（胆沢区南都田字宇南田）
調査期間・・・昭和60年10月24日～同年12月13日　　調査面積・・・1,800㎡。
検出遺構・・・竪穴住居跡２棟、柱穴。
出土遺物・・・土師器坏・甕・高台坏、須恵器坏・甕
時　　期・・・平安時代。

29　要害遺跡（胆沢区南都田字本木159）
調査期間・・・平成６年７月26日～同年９月９日　　調査面積・・・869㎡。
検出遺構・・・竪穴住居状遺構３基、溝状遺構１基ほか。
出土遺物・・・土師器、須恵器、縄文土器。
時　　期・・・縄文・奈良・平安時代

30　角塚古墳（胆沢区南都田字塚田）
調査期間・・・平成10年８月17日～同年10月15日、平成11年８月１日～同年10月５日、平成12年８月17～同年10月20日　　調査面積・・・516.8㎡。
検出遺構・・・前方後円墳、葺石、周湟。
出土遺物・・・埴輪、土師器、須恵器、陶器、縄文土器。
時　　期・・・古墳時代。

31　塚田遺跡（胆沢区南都田字塚田）
調査期間・・・昭和59年　　調査面積・・・1,000㎡。
検出遺構・・・溝、柱穴群、集積礫群。
出土遺物・・・土師器坏・甕、古銭。
時　　期・・・奈良時代。

32　二本木遺跡（胆沢区南都田字清水下）
調査期間・・・昭和58年６月～９月　　調査面積・・・1,250㎡。
検出遺構・・・竪穴住居跡８棟、土坑３基、柱穴列１基、溝跡11条。
出土遺物・・・土師器、須恵器。
時　　期・・・奈良時代。

34　漆町遺跡（胆沢区南都田字漆町）
調査期間・・・昭和51年10月20日～同年12月21日
検出遺構・・・竪穴住居跡６棟、掘立柱建物跡１棟、門柱跡、竪穴状遺構、性格不明遺構。
出土遺物・・・縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、石器。
時　　期・・・縄文・弥生・奈良・平安時代。

41　浅野遺跡（胆沢区南都田字浅野）
調査期間・・・昭和60年３月～同年５月
検出遺構・・・竪穴住居跡２棟、溝跡６条、土坑２基、柱穴。
出土遺物・・・縄文土器、土師器、須恵器、石器、石製品
時　　期・・・縄文・平安時代。

49　尼坂遺跡第１次調査（胆沢区南都田字林福野）
調査期間・・・昭和56年11月12日～同年12月９日
検出遺構・・・竪穴住居跡５棟、土坑、溝跡。
出土遺物・・・土師器、須恵器、刀子、紡錘車、砥石。
時　　期・・・平安時代。　＊第２～４次調査では縄文時代の遺構・遺物が見つかっている。

50　小十文字遺跡（胆沢区南都田字小十文字）
調査期間・・・昭和53年11月１日～同年12月１日、昭和54年５月22日～８月６日
調査面積・・・16,000㎡。
検出遺構・・・竪穴住居跡12棟、土坑７基、墓壙２基、鍛冶跡。
出土遺物・・・縄文土器、土師器、須恵器、灰釉陶器、羽口、鉄滓、石器、石製品。
時　　期・・・縄文・奈良・平安時代。

引用・参考文献

佐々木いく子　1995『要害遺跡』胆沢町埋蔵文化財調査報告書第26集　胆沢町教育委員会
鈴木明美　1988『沢田遺跡』胆沢町埋蔵文化財調査報告書第18集　胆沢町教育委員会
星雅之・田中美穂　2010「尼坂遺跡・牡丹野遺跡・作屋敷遺跡発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財第569集
胆沢町教育委員会　2005「地名・屋号が物語る胆沢の歴史と自然」『胆沢町郷土資料館第13回企画展』胆沢町
胆沢町史刊行会　1997『胆沢町史Ⅳ　近世編１』胆沢町
大上和良・吉田充　1984「北上川中流域・胆沢扇状地における火山灰層序」『岩手大学工学部研究報告』137
斎藤享冶　1978「岩手県胆沢川流域における段丘形成」『地理学評論』51
宍倉圭介・安倍庄吉　1991『国分・芦の随遺跡』胆沢町埋蔵文化財調査報告書第21集　胆沢町教育委員会

第５図　周辺の遺跡分布図

第１表　周辺遺跡一覧

No.	遺跡名	種　別	時　代	遺物・遺構	所在地
1	細越城	城館跡	中世	堀、土塁、平場	金ヶ崎町永栄茶畑
2	中井	散布地	平安	須恵器	胆沢区南都田字中井
3	河原田	散布地	平安	土師器	胆沢区南都田字猪川
4	寺屋敷	散布地	平安	土師器	胆沢区南都田字五松林
5	新屋敷	散布地	平安	土師器	胆沢区南都田字猪川
6	蝦夷塚古墳	古墳	奈良	土師器、須恵器、マウンド	胆沢区南都田字駒堂
7	中半入	集落・古墳	平安	土師器、須恵器、弥生土器	水沢区佐倉河字中半入
8	半入豪族屋敷	環濠屋敷	中・近世	濠	水沢区佐倉河字中半入
9	兵法田	散布地	縄文・平安	土師器、須恵器、石組炉	水沢区佐倉河字西田中
10	中ノ目	散布地	平安	土師器	水沢区佐倉河字中ノ目
11	太田Ⅰ	集落跡	平安	土師器、須恵器	水沢区佐倉河字太田
12	玉ノ木Ⅰ	散布地	平安	土師器	水沢区佐倉河字玉ノ木
13	太田Ⅱ	散布地	平安	土師器、須恵器	水沢区佐倉河字太田
14	玉の木Ⅱ	散布地	平安	土師器、須恵器	水沢区佐倉河字玉ノ木
15	太田Ⅲ	散布地	平安	土師器	水沢区佐倉河字太田
16	小姓堂	散布地	平安	土師器	胆沢区南都田字駒堂
17	外記Ⅱ	散布地	縄文・平安	縄文土器、土師器	胆沢区南都田字外記
18	石畑	散布地	平安	土師器	水沢区佐倉河字石畑
19	外記Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器	胆沢区南都田字外記
20	曽根田 (常楽寺館)	散布地・城館跡	平安	土師器	水沢区佐倉河字曾根田
21	高谷宿	散布地	平安	土師器	水沢区字高谷宿
22	銭倉	散布地	奈良・平安・近世	土師器、近世陶器	胆沢区南都田字銭倉
23	堰田	散布地	平安	土師器	胆沢区南都田字堰田
24	机地	散布地	奈良・平安	土師器	胆沢区南都田字机地
25	机地館 (盛興館)	城館跡	中世	水堀	胆沢区南都田字郷田
26	沢田	集落跡・古墳	古墳・平安～近世	ガラス玉、琥珀玉、人骨、土師器、須恵器、墨書土器、鉄鏃、白磁、灰釉陶器、緑釉陶器、古瀬戸、近世陶磁器、円墳	胆沢区南都田字沢田
27	石田Ⅰ・Ⅱ	集落跡	古代	土師器、須恵器、石包丁、磨製石斧、鞴羽口、琥珀	胆沢区南都田字石田
28	宇南田	集落跡	平安	土師器	胆沢区南都田字宇南田
29	要害 (止々井館)	集落跡・城館跡	奈良・平安・近世	土師器、須恵器、土塁	胆沢区南都田字本木
30	角塚古墳	古墳	古墳時代	埴輪	胆沢区南都田字塚田
31	塚田	散布地	平安	土師器、須恵器	胆沢区南都田字塚田
32	二本木	集落跡	奈良・平安	土師器、須恵器、暗文土器、竪穴住居跡、溝跡、柱穴列	胆沢区南都田字清水下
33	清水下	散布地	弥生・平安	弥生土器、縄文早期土器片、石包丁、土師器	胆沢区南都田字漆町～塚田
34	漆町	集落跡	縄文・奈良・平安	縄文早期土器片、土師器、須恵器、竪穴住居跡	胆沢区南都田字漆町
35	新里館 (若柳方八丁)	城館跡	平安	土師器、須恵器、堀	胆沢区若柳字島塚
36	作屋敷	祭祀跡・集落跡	古代	土師合甕、土師器、須恵器	胆沢区南都田字作屋敷、独光
37	四ツ柱	散布地	不明	溝跡、柱穴	胆沢区南都田字四ツ柱
38	川端	散布地	平安	土師器、土坑、溝跡	胆沢区南都田字大道
39	堤	散布地	奈良・平安	土師器、須恵器、竪穴住居跡	胆沢区南都田字四ッ柱
40	浅野前	集落跡	縄文・古代	縄文土器 (前・中期)、土師器、須恵器	胆沢区南都田字浅野
41	浅野	散布地	縄文・古代	縄文土器 (前・中期)、土師器、須恵器、土偶、弥生土器	胆沢区南都田字浅野
42	片子沢	散布地	縄文・古代	縄文土器、土師器、須恵器、フレーク	胆沢区南都田字片子沢
43	糀谷田	散布地	縄文・古代	縄文土器 (前期)、土師器	胆沢区南都田字糀谷田
44	合野	散布地	縄文・古代	縄文土器 (前・晩期)、石鏃	胆沢区南都田字濁川
45	袖谷地Ⅱ	散布地	平安	土師器、須恵器	水沢区字袖谷地
46	牡丹野	散布地	縄文・古代	縄文土器、土師器、須恵器	胆沢区南都田字国分
47	広岡館 (飯坂館)	城館跡	中世	二重堀、土塁	胆沢区南都田字国分
48	国分	散布地	古代・中世～平安	縄文土器、土師器、須恵器、石鏃、石斧	胆沢区南都田字国分
49	尼坂	散布地・集落跡	縄文・古代	縄文土器 (早・前期)、石器、装飾具、土師器	胆沢区南都田字尼坂
50	小十文字	集落跡	縄文・奈良・平安	縄文土器（前期）、土師器、須恵器、灰釉陶器、鉄製鍬先、竪穴住居跡、野鍛冶跡	胆沢区南都田字小十文字
51	石行	散布地	縄文・古代	土師器、須恵器	胆沢区南都田字石行
52	森下	散布地	縄文・古代	土師器	胆沢区南都田字森下
53	見分森	生産跡	平安	土師器、須恵器	水沢区字見分森
54	森Ⅰ	散布地	平安	土師器	胆沢区小山字森
55	森Ⅱ	散布地	平安	土師器	胆沢区小山字上長根
56	南蛸の手	散布地	縄文	縄文土器	胆沢区小山字蛸の手

Ⅲ　銭　倉　遺　跡

１　立　　地

銭倉遺跡は岩手県奥州市胆沢区南都田字銭倉24-2他に所在する。胆沢扇状地内の水沢低位段丘に立地し、標高は78～80mで、調査前の状況は農道・水田・畑地である。

調査区を含む周辺一帯は過去の圃場整備事業により、大規模な造成が行われており、本来遺構が確認される層（Ⅱ層：黒褐色土）の大半が削平によりなくなっている状況であった。

２　概　　要

調査区は３カ所に分かれ、それぞれ北西部をＡ区、南西部をＢ区、東部をＣ区と呼称した。このうちＡ区からは現代溝が１条検出されたが、他に遺構・遺物は見つからなかった。Ｂ区は時期不明の溝が１条、土坑２基、柱穴状土坑４個を検出した。周辺の畑には近世陶器片が混入しており、近世の遺構である可能性も考えられるが詳細は不明である。Ｃ区では柱穴状土坑37個、溝１条、性格不明遺構１基が検出された。柱穴状土坑の埋土には近世初頭頃の陶器片が含まれていることから、16世紀末～17世紀代の建物跡を構成する柱穴群である。溝については出土遺物がなく、時期不明である。

３　調査の経過と調査方法

（１）野外調査の経過

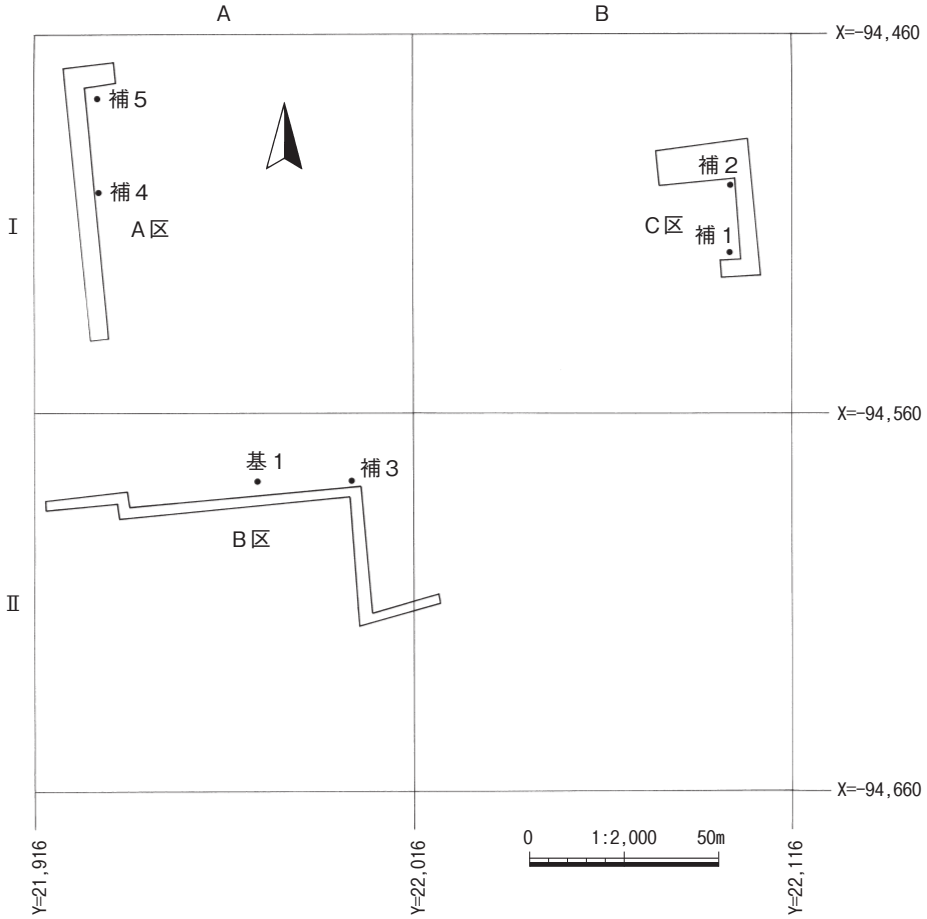
４月26日　調査開始。機材搬入・現場設営・環境整備など。
４月27日　重機による表土除去を開始する。
５月13日　基準点・補助点の設置。
５月19日　終了確認を実施。
５月24日　航空写真撮影実施。
５月25日　重機による埋め戻し作業を開始する。（～５月31日まで）
５月31日　調査終了。
（＊終了確認はいずれも委託者・岩手県教育委員会・埋文センターの３者による）

（２）グリッドの設定

平面直角座標第Ｘ系のＸ＝－94,460.000、Ｙ＝21,916.000を原点として100×100mの大グリッドを設定し、これを25等分し、４×４mの小グリッドとしている。大グリッドの呼称は原点を起点に南方向へⅠ～Ⅸ、東方向へＡ～Ｌ、小グリッドの呼称は南方向へ１～25、東方向へａ～ｙとしている。小グリッドの呼称はＩＡ１ａとなる。

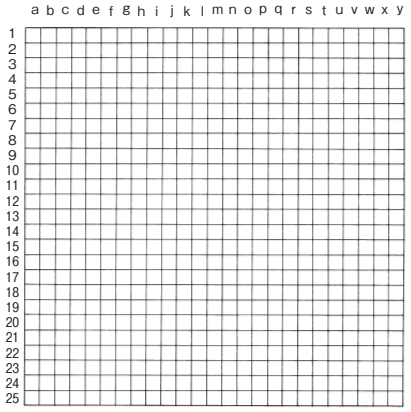
（３）基準点の設定

遺構の実測に利用するため調査区内外に基準点および補助点を株式会社南部測量設計に委託して打設し、これをもとに調査を行った。座標値はいずれも世界測地系によるもので、基準点および補助点



大グリッド

基１：X=-94,578　Y=21,975　H=79.690
補１：X=-94,518　Y=22,100　H=77.936
補２：X=-94,500　Y=22,100　H=77.927
補３：X=-94,578　Y=22,000　H=79.338
補４：X=-94,502　Y=21,933　H=79.442
補５：X=-94,477　Y=21,933　H=79.397



小グリッド　1G＝4×4m

第６図　グリッド配置図

の成果値と杭高は第６図に記載のとおりである。

（４）表土除去と遺構の検出

各遺跡の調査に先立って、岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課による事前の試掘調査が実施されている。この試掘により調査対象区内の水田・畑・未舗装道路などにおける盛土・耕作土の堆積状況が確認され、それを踏まえた上で、重機による表土除去を実施した。その後は人力による遺構検出を行った

（５）遺構の精査と実測

調査で検出された遺構は以下の手順で調査を進めた。土坑は２分法で精査を行い、溝は適宜に土層確認用の断面ベルトを残し、埋土の堆積状況の確認を行いながら掘り下げた。柱穴状土坑については検出時に柱痕を確認し、平面図作成（株式会社ＣＵＢＩＣの遺構実測支援システムによる）後、セクションベルトを設け、断面確認→完掘の順で作業を行った。

（６）写　真　撮　影

調査記録用にデジタル一眼レフカメラ（Canon　EOS　50D）１台を使用した。撮影にあたって、整理時の混乱を防ぐため撮影内容を記入した撮影カードを対象遺構撮影前に撮影している。その他、調査期間中にセスナ機による航空写真撮影を実施した。

４　室内整理の手順と方法

（１）作　業　経　過

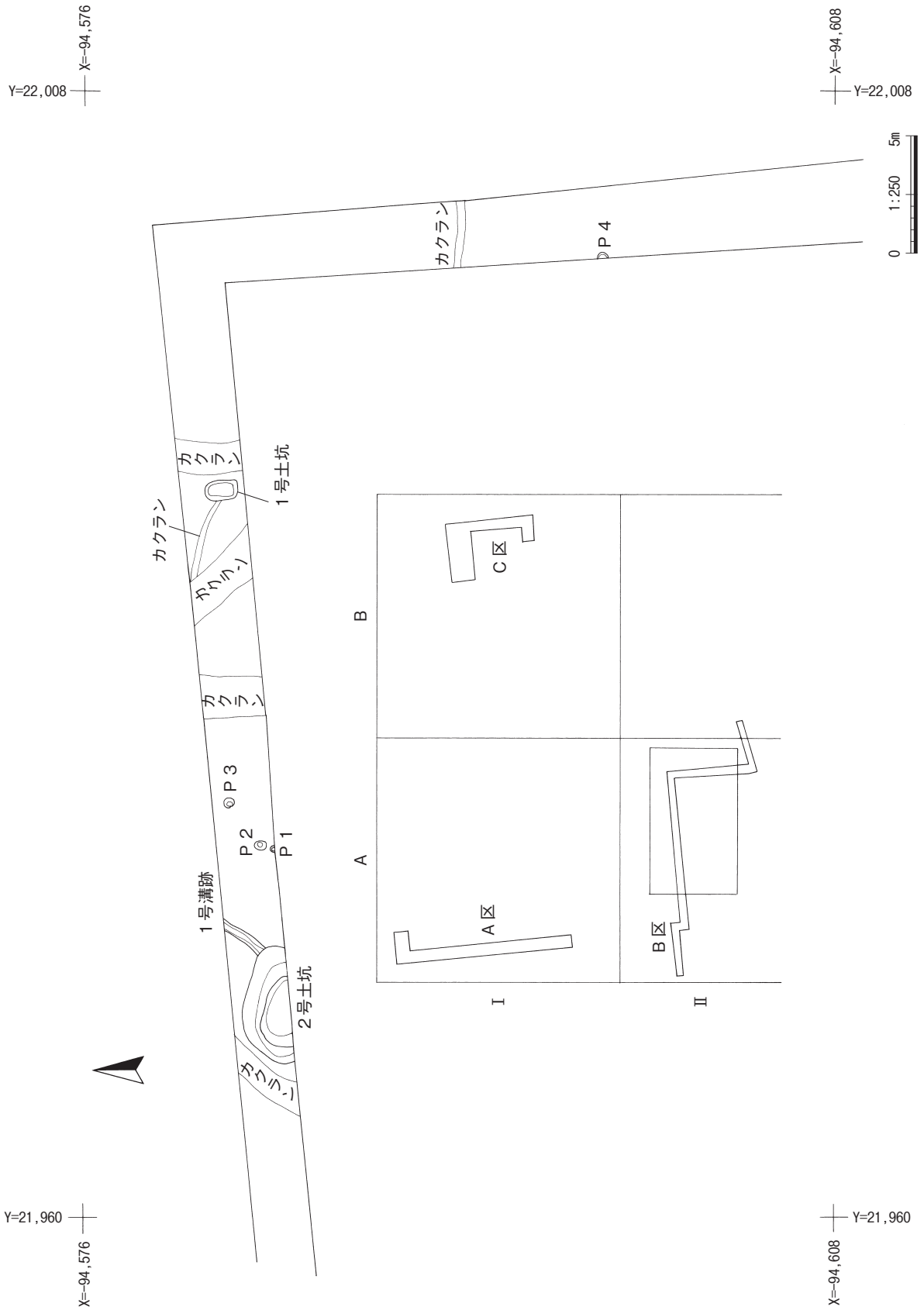
各遺跡の室内整理期間は前述の例言のとおりで、整理作業は実測図作成・図面合成・原稿執筆・各種観察表の作成等の作業を実施した。

（２）掲　載　図

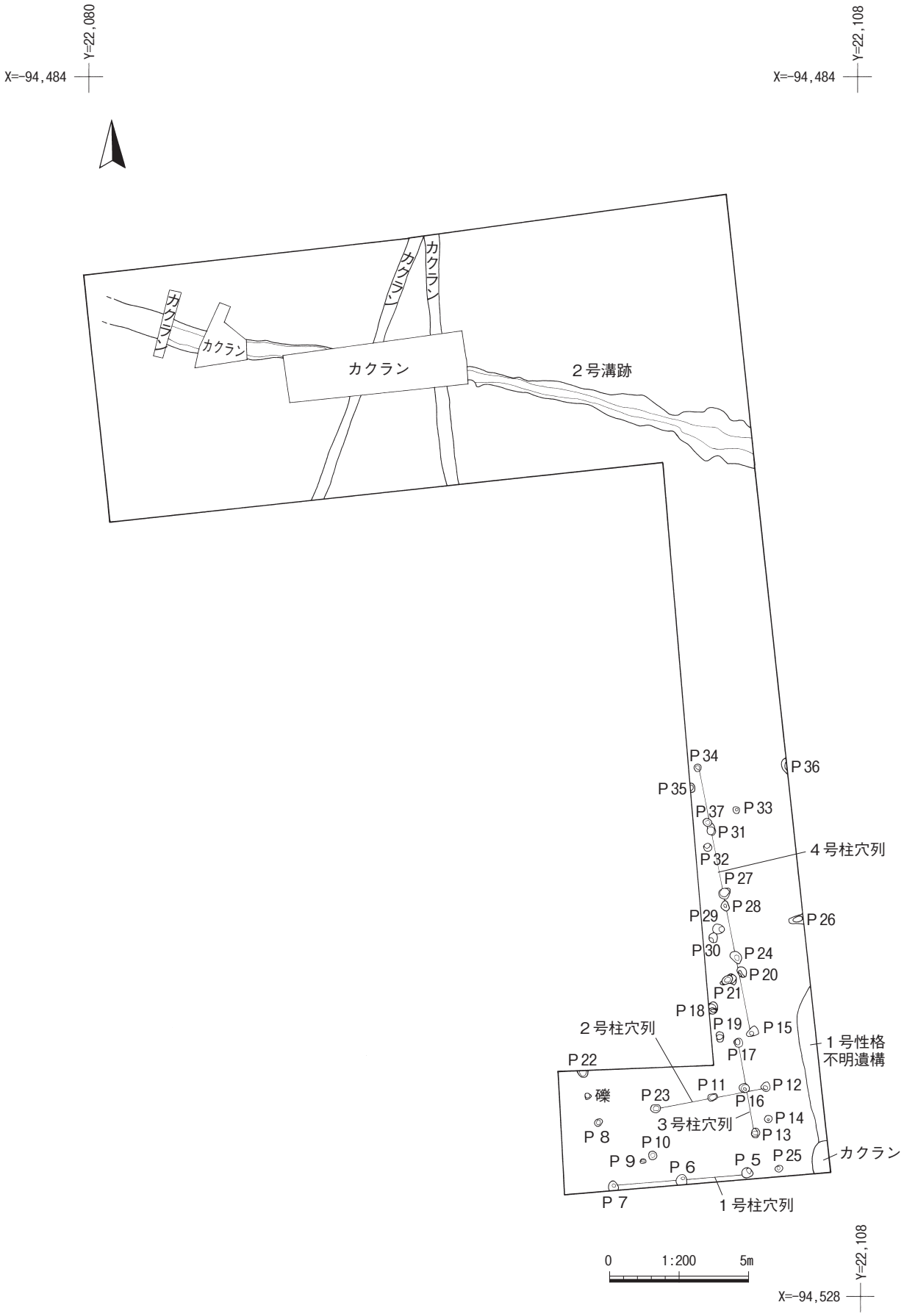
掲載している遺構の縮尺は平面図・断面図ともに竪穴住居跡・住居条遺構は平面図・断面図ともに１/50、竪穴住居跡のカマドは平面図・断面図ともに1/25、土坑・柱穴状土坑は平面図・断面図ともに１/40、溝跡は平面図は1/100、断面図は1/50とした。また、遺物掲載縮尺は1/3とした。ただし、一部異なるものもあるため、各図にスケールおよび縮尺を付した。写真図版については縮尺不定である。また、図中において柱穴列を含む柱穴状土坑は「Ｐ」、土器は「Ｐ」、石器・礫は「Ｓ」、遺構内出土の掲載遺物は（　）内に掲載番号を表記した。スクリーントーンの使用は凡例図のとおりであるが、これ以外の使用については使用箇所に用例を表記した。各遺構の計測値表記については土坑類は長軸×短軸である。

（３）遺 構 の 名 称

調査時においては検出、および精査順に遺構名を付したが、調査途中で遺構でないものも多くあったため、報告書掲載時に遺構名を変更した。変更前と変更後の名称は以下のとおりである。なお、それ以外の掲載遺構については名称の変更はない。


X=-94,576
Y=22,008
X=-94,608
Y=22,008
0
1:250
5m
カクラン
P4
カクラン
1号土坑
カクラン
カクラン
カクラン
P3
P2
P1
1号溝跡
2号土坑
カクラン
B
A
C区
A区
B区
I
II
Y=21,960
X=-94,576
Y=21,960
X=-94,608

第７図　遺構配置図（Ｂ区）

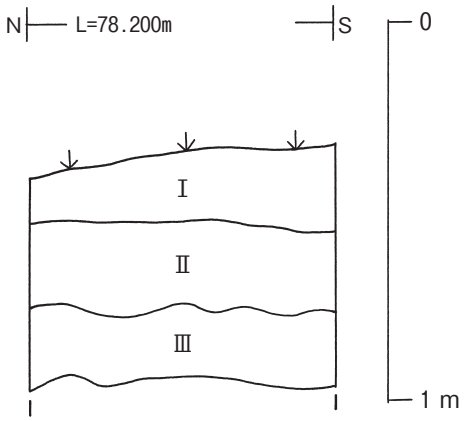

Y=22,080
X=-94,484
Y=22,108
X=-94,484
カクラン
カクラン
カクラン
カクラン
カクラン
２号溝跡
P 34
P 36
P 35
P 37
P 33
P 31
P 32
４号柱穴列
P 27
P 28
P 29
P 26
P 30
P 24
P 20
P 21
P 18
P 19
P 15
２号柱穴列
１号性格
不明遺構
P 17
P 22
P 11
P 12
礫
P 23
P 16
P 14
３号柱穴列
P 13
P 8
P 10
カクラン
P 9
P 6
P 5
P 25
P 7
１号柱穴列
0
1:200
5m
Y=22,108
X=-94,528

第８図　遺構配置図（Ｃ区）

土坑・・・性格不明遺構→２号土坑
溝跡・・・４号溝→１号溝跡、10号溝→１号性格不明遺構、11号溝→２号溝跡
柱穴状土坑・・・P36→P36とP37の２個に分けて掲載
柱穴列・・・調査時PNo、掲載は１～４号柱穴列

5　基　本　土　層

今回の調査区内で最も堆積状況が良かったＣ区の東壁面に土層観察のためのトレンチを設置し、記録した。これ以外ではＡ区の北端が北に下がる地形となっており、Ⅱ層の堆積を確認できたが、それ以外は過去の造成工事の影響で地山（Ⅲ層）まで掘削された状況であった。



第９図　基本土層

Ⅰ　10YR3/1 黒褐色粘土 しまりあり 旧耕作土。
　　層厚35～40cm。
Ⅱ　10YR2/1 黒色シルト しまりあり 層厚0～15cm。
Ⅲ　10YR7/1 灰白色粘土 しまりあり 地山

＊遺構はⅡ・Ⅲ層で検出。

6　検出した遺構

検出した遺構は土坑２基、溝跡２条、柱穴列４基、柱穴状土坑37個（柱穴列構成遺構含む）、性格不明遺構１基である。

（1）土　　坑

１号土坑（第11図、写真図版３）
＜位置・検出・重複関係＞　調査Ｂ区に位置し、Ⅲ層で検出した。重複する遺構はない。
＜形状・規模＞　形状は楕円形で、規模は開口部径は133×74cm、底部径は115×54cm、深さは12cmである。
＜底面＞　底面はおおよそ平坦である。
＜埋土＞　埋土は自然堆積で砂を少量含む暗褐色シルトの単層である。
＜遺物＞　出土した遺物はない。
時期　出土した遺物がなく詳細は不明である。

２号土坑（第11図、写真図版３）

＜位置・検出・重複関係＞　調査Ｂ区に位置し、Ⅲ層で検出した。１号溝跡と重複関係にあり、これを切る。遺構の南側は調査区外へと延びる。
＜形状・規模＞　遺構の一部が調査区外へと延びるため、全形は不明であるが、円形基調の形状と推測される。規模は開口部径が東西435㎝、底部を測る。深さは90㎝である。
＜底面＞　底面はおおよそ平坦である。
＜埋土＞　埋土は自然堆積で上位と下位が黒褐色シルト、中位が褐灰色シルトが堆積する。層全体に少量の砂が混入している。
＜遺物＞　出土した遺物はない。
時期　出土した遺物がなく詳細は不明である。

（２）溝　　跡

調査区全体で３条検出した。いずれも端部が調査区外へと延びるため、全長は不明である。

１号溝跡（第12図、写真図版３）
＜位置・検出・重複関係＞　Ｂ区東側で検出した。２号土坑と重複し、これに切られる。Ⅲ層で検出した。
＜規模・形態・方向＞　遺構の両端が調査区外へと延びているため、全体の規模は不明であるが、長さ約2.1ｍ、上端幅36～47㎝、下端幅12～24㎝、方向は北東－南西でほぼ直線に延びる。両端部底面の比高差は約６㎝で、南西端が低い。
＜埋土＞　埋土全体が褐灰色シルトを主体とした層であるが、中位に灰黄褐色砂層が堆積する。
＜遺物＞　出土した遺物はない。
時期　出土した遺物がなく詳細は不明である。

２号溝跡（第12図、写真図版３）
＜位置・検出・重複関係＞　Ｃ区の北側で検出した。遺構の両端が調査区外へと延び、また一部が撹乱を受け、これに切られる。Ⅲ層で検出した。
＜規模・形態・方向＞　遺構の両端が調査区外へと延びているため、全体の規模は不明であるが、長さ約23.5ｍ、上端幅44～192㎝、下端幅12～74㎝、方向は東－西でほぼ直線に延びる。両端部底面の比高差は約88㎝で、東端が低い。
＜埋土＞　埋土全体が灰色砂質シルトを少量含む黒褐色粘土層である。
＜遺物＞　出土した遺物はない。
時期　出土した遺物がなく詳細は不明である。

（３）柱　穴　列

１号柱穴列（第13・14図）
＜位置・検出・重複関係＞　Ｃ区東側で検出した。ＩＢ16ｔ・16ｕグリッド付近に位置する。表土下のⅡ層・Ⅲ層で検出した。
＜形態＞　東西方向にＰ５～７の３個の柱穴で構成される。調査区外の西側に遺構が延びることが考えられる。調査区内で長さ4.90ｍ（約16.1尺）の範囲が確認された。
＜埋土＞　黒褐色粘土層を主体とする。Ｐ５・６の埋土下部には埋土全体が灰色砂質シルトを少量含

む黒褐色粘土層である。
＜遺物＞　出土した遺物はない。
時期　出土した遺物がなく詳細は不明である。

２号柱穴列（第13・14図）
＜位置・検出・重複関係＞　Ｃ区のＩＢ16ｕ・16ｖグリッド付近に位置する。表土下のⅡ層で検出した。
＜形態＞　東西方向にＰ23・11・12の３個の柱穴で構成され、形状は方形状を呈する。長さ5.00m（約16.5尺）の範囲が確認された。
＜埋土＞　埋土は柱痕部分は黒褐色粘土、掘り方部分は黒褐色粘土と灰色砂質シルト層の混合土を主体とする。
＜遺物＞　出土した遺物はない。
時期　出土した遺物がなく詳細は不明である。

３号柱穴列（第13・14図）
＜位置・検出・重複関係＞　Ｃ区のＩＢ15ｕ・16ｕ・16ｖグリッド付近に位置する。表土下のⅡ層で検出した。
＜形態＞　Ｐ13・16・17の３個の柱穴で構成され、柱穴開口部の形状は方形状を呈する。長さ3.30m（約10.9尺）の範囲が確認された。
＜埋土＞　埋土は灰色砂質シルトと黒褐色粘土の混合土を主体とする。いずれも埋土中ないし、底面から礫が出土している。
＜遺物＞　出土した遺物はない。
時期　出土した遺物がなく詳細は不明である。

４号柱穴列（第13・14図）
＜位置・検出・重複関係＞　Ｃ区のＩＢ15ｕ・16ｕ・16ｖグリッド付近に位置する。表土下のⅡ層で検出した。
＜形態＞　Ｐ15・24・27・34・37の５個の柱穴で構成され、南からＰ15－Ｐ24－Ｐ27－Ｐ37－Ｐ34の順で列をなす。柱穴開口部の形状は方形状を呈する。長さ3.30mの範囲が確認された。
＜埋土＞　埋土は灰色砂質シルトと黒褐色粘土の混合土を主体とする。いずれも埋土中ないし、底面から礫が出土している。
＜遺物＞　出土した遺物はない。
時期　出土した遺物がなく詳細は不明である。

（４）柱 穴 状 土 坑

今回の調査では37個の柱穴が検出され、このうち４個がＢ区、33個がＣ区から見つかった。このうち14個の柱穴が柱穴列を構成している。出土遺物はＰ20の埋土から陶器片が１点のみ出土している。

第２表　柱穴状土坑一覧表

P. No.	径（cm）	深さ（cm）	検出面標高（m）	備　　考
1	26 × (22)	40	79.310	
2	44 × 37	47	79.309	
3	35 × 34	35	79.285	
4	32 × 29	40	79.220	
5	45 × 37	54	77.386	
6	(39) × 37	38	77.307	
7	(38) × 36	40	77.273	
8	28 × 25	24	77.262	底に礫あり
9	46 × 28	7	77.263	
10	60 × 54	11	77.269	
11	32 × 27	40	77.338	
12	31 × 29	28	77.333	
13	33 × 31	26	77.313	埋土下部に礫あり
14	27 × 25	27	77.309	
15	42 × 35	32	77.336	
16	33 × 31	21	77.361	底に礫あり
17	32 × 28	18	77.331	底に礫あり
18	40 × (31)	32	77.319	
19	34 × 28	51	77.332	
20	42 × 35	31	77.315	底に礫あり
21	46 × 36	53	77.315	
22	35 × (26)	35	77.357	
23	38 × 30	27	77.288	
24	48 × 33	36	77.260	
25	26 × 23	16	77.387	
26	51 × (34)	47	77.197	
27	36 × 34	24	77.200	
28	32 × 22	47	77.158	
29	39 × 36	55	77.228	
30	31 × 28	43	77.228	
31	67 × 30	20	77.164	柱痕２箇所あり
32	28 × 25	44	77.138	
33	26 × 22	33	77.120	
34	28 × 23	25	77.144	
35	30 × (22)	34	77.125	
36	54 × (20)	26	77.175	

＊（　）は調査分での計測値。

（5）性格不明遺構

１号性格不明遺構（第12図、写真図版８）

＜位置・検出・重複関係＞　Ｃ区東側で検出した。遺構の西側と思われる部分のみの検出で、大半は調査区外へと延びるため、性格不明遺構とした。また遺構南端の一部が撹乱を受け、これに切られる。

＜規模・形態＞　遺構の両端が調査区外へと延びているため、全体の規模は不明であるが、南北約5.6m×東西0.6mの規模で調査区境に向かって遺構内面は傾斜している。

＜埋土＞　埋土は灰色砂質シルトをブロックで含む黒褐色シルトの単層である。

＜遺物＞　出土した遺物はない。

時期　出土した遺物がなく詳細は不明である。

7　出　土　遺　物

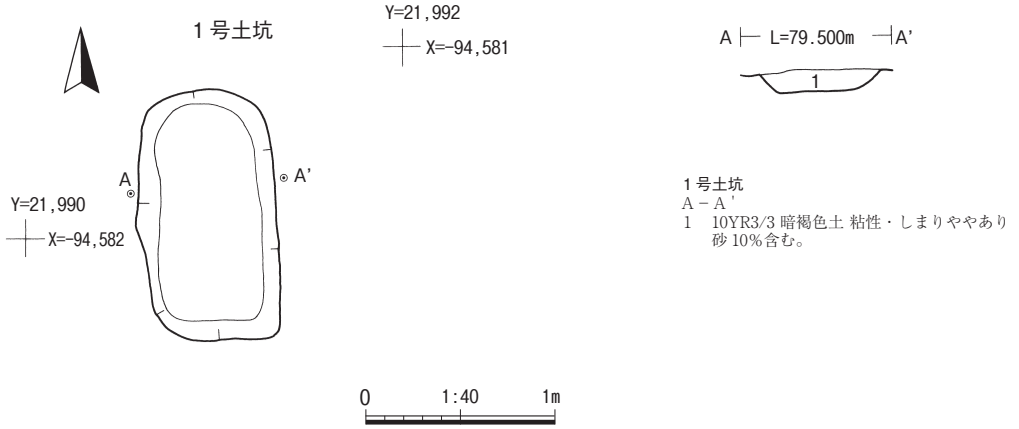
陶器片が２点出土した。いずれも近世の遺物で１はＰ20からの出土で、２は遺構外からの出土である。

1

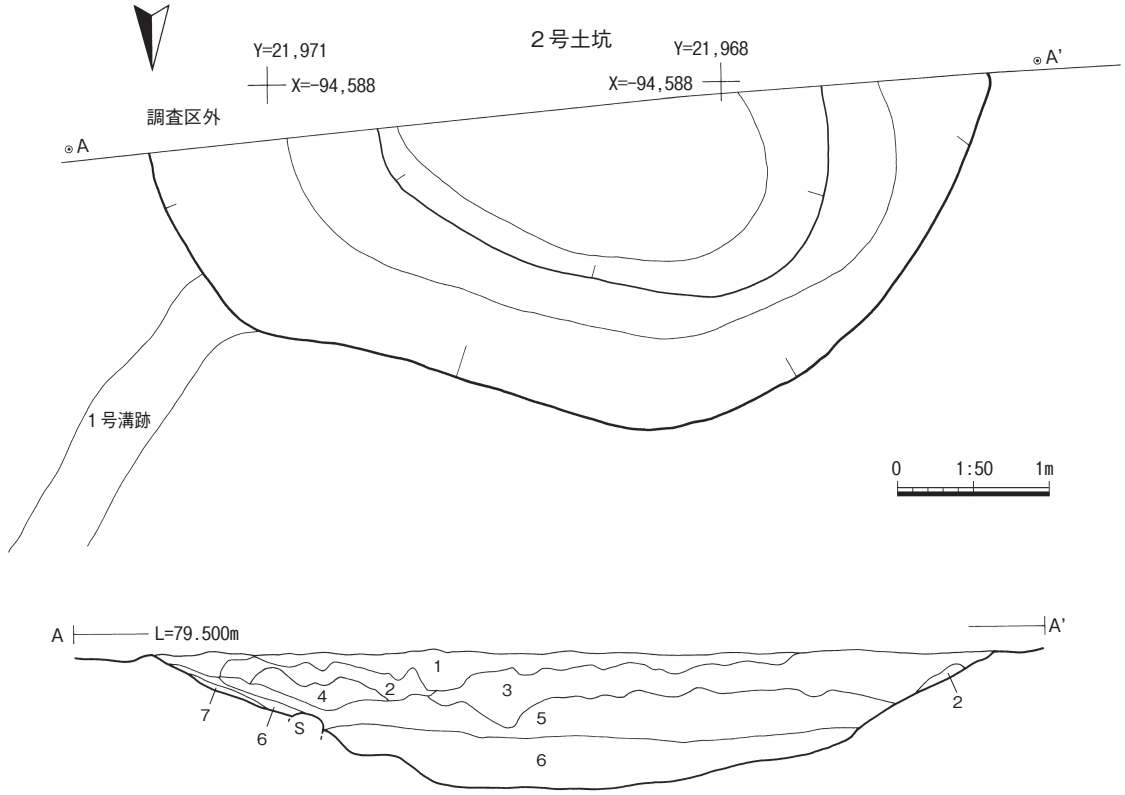
2

第10図　出土遺物

0　2:3　5cm

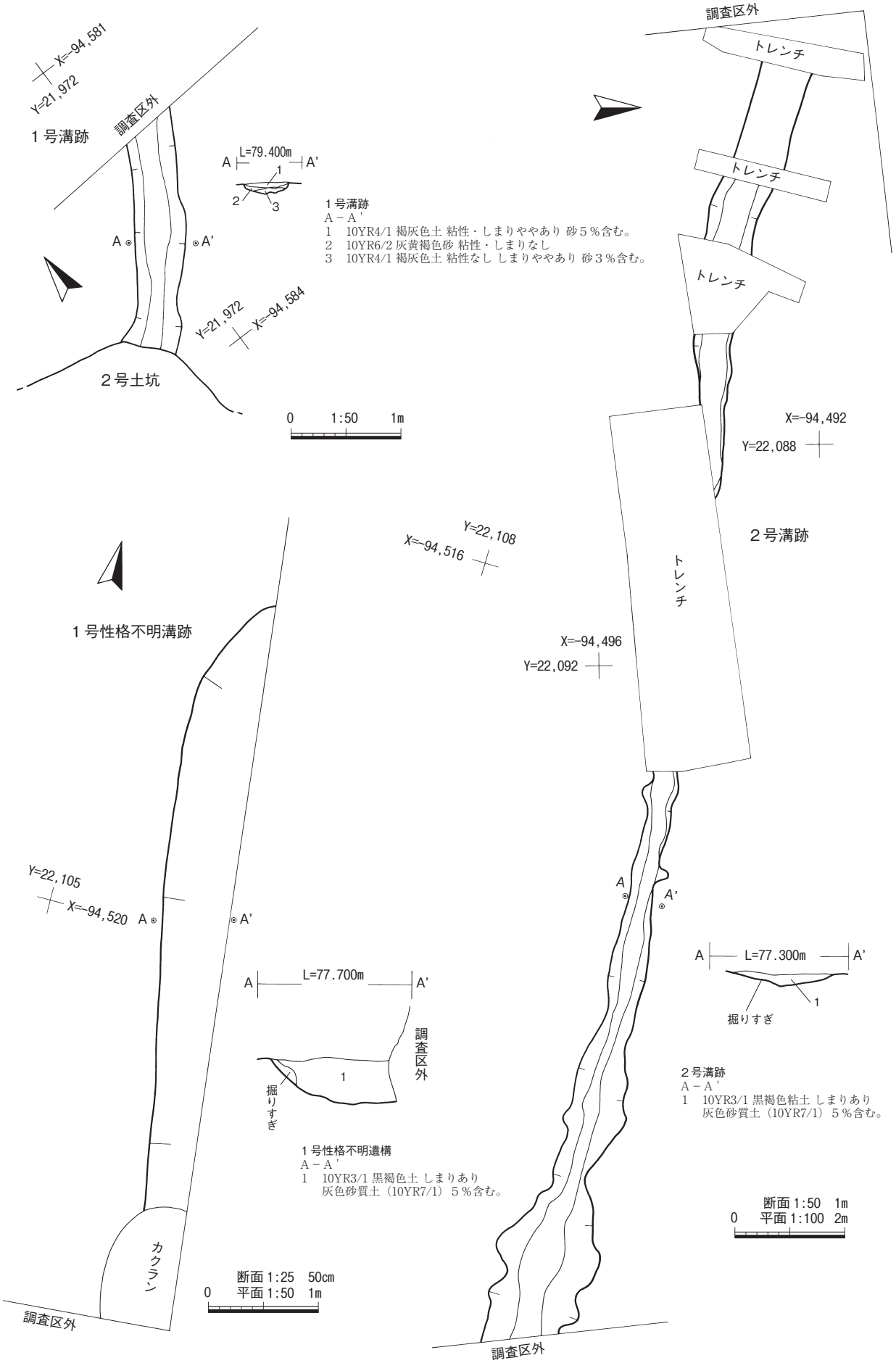


1号土坑
A－A'
1　10YR3/3 暗褐色土 粘性・しまりややあり
　　砂10%含む。

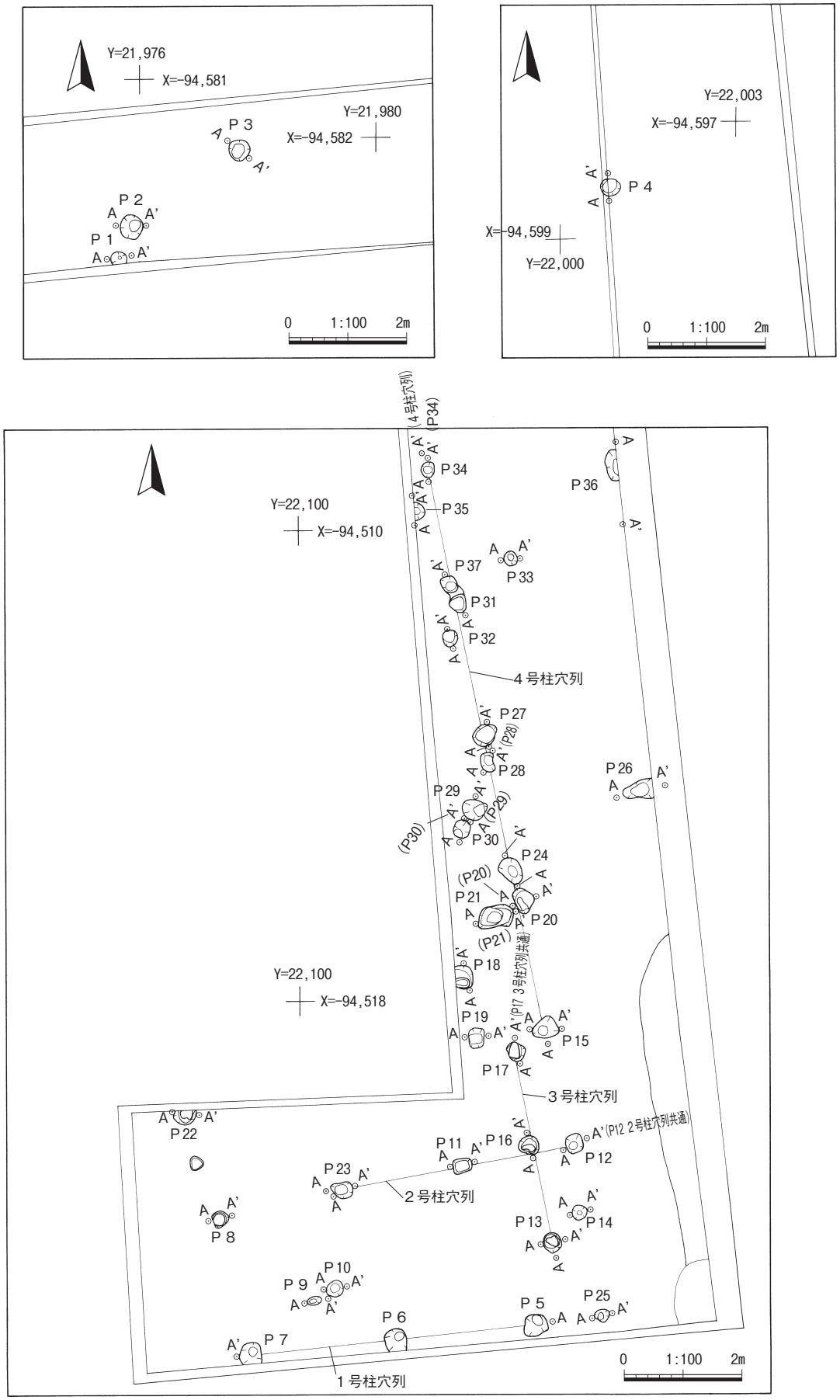


2号土坑
A－A'
1　10YR2/3 黒褐色土 粘性・しまりややあり 黄褐色砂５％含む。
2　10YR8/4 浅黄橙色砂 粘性弱 しまりなし 黒褐色土２％含む。
3　10YR4/1 褐灰色粘土 粘性・しまりあり 黄褐色砂５％含む。
4　10YR5/1 褐灰色土 粘性・しまりあり 黄褐色砂１％含む。
5　10YR3/2 黒褐色粘土 粘性・しまりややあり 黄褐色砂１％含む。
6　10YR3/1 黒褐色土 粘性・しまりややあり 灰白色砂２％含む。
7　10YR4/2 灰黄褐色砂 粘性・しまりなし

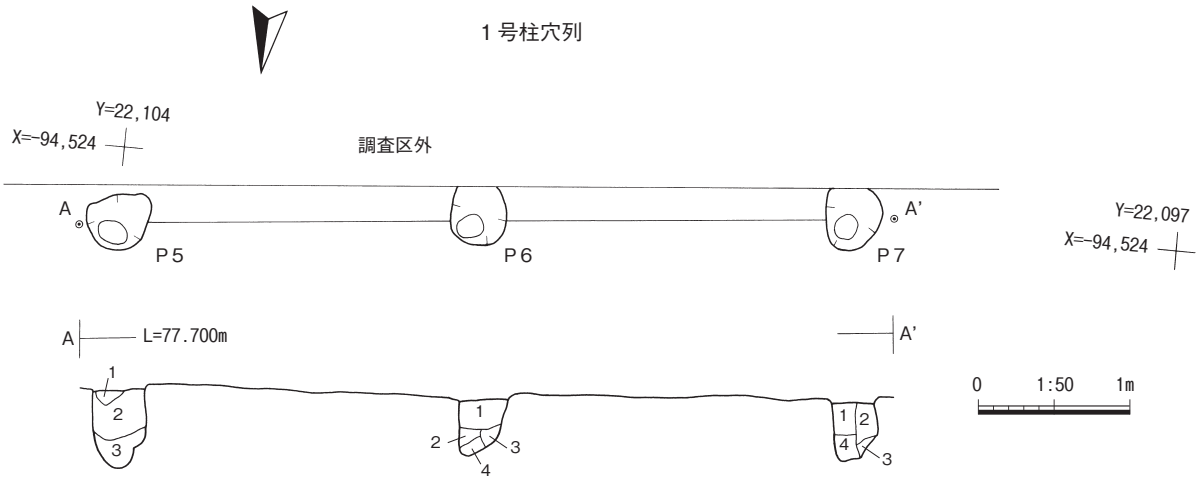
第11図　１・２号土坑



第12図　１・２号溝跡、１号性格不明遺構


Y=21,976
X=-94,581
Y=21,980
X=-94,582
P 3
P 2
P 1
0 1:100 2m
Y=22,003
X=-94,597
P 4
X=-94,599
Y=22,000
0 1:100 2m
(4号柱穴列)
(P34)
P 34
P 35
P 36
Y=22,100
X=-94,510
P 37
P 33
P 31
P 32
4号柱穴列
P 27
(P28)
P 28
P 26
P 29
(P29)
(P30)
P 30
P 24
(P20)
P 21
P 20
(P21)
P 18
Y=22,100
X=-94,518
P 19
(P17 3号柱穴列共通)
P 15
P 17
3号柱穴列
P 22
P 11
P 16
(P12 2号柱穴列共通)
P 12
P 23
2号柱穴列
P 8
P 13
P 14
P 10
P 9
P 5
P 25
P 6
P 7
1号柱穴列
0 1:100 2m

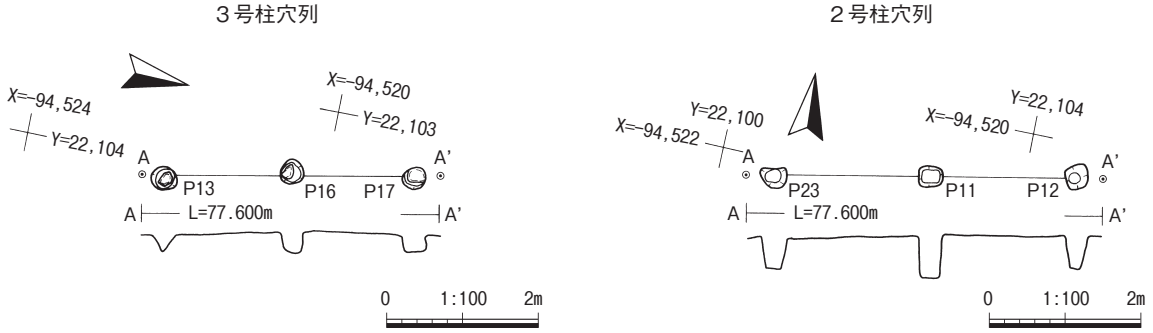
第13図　柱穴状土坑（1）

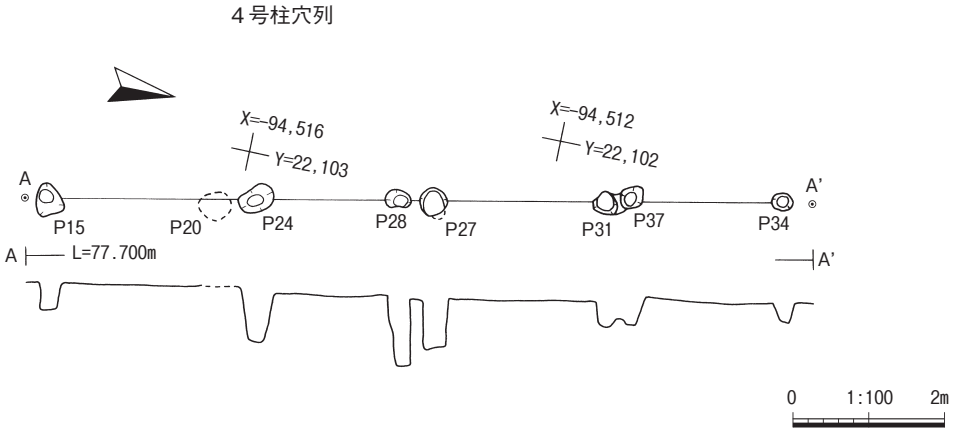


P５
1　10YR2/1 黒色粘土 しまりあり
2　10YR3/1 黒褐色粘土 しまりあり
3　10YR7/1 灰色砂質土 粘性なし しまりあり

P６
1　10YR3/1 黒褐色粘土 しまりあり
2　10YR3/1 黒褐色粘土 しまりあり １層より濃色
3　10YR7/1 灰色砂質土 粘性なし しまりあり
4　10YR3/1 黒褐色土40%、10YR7/1 灰色砂質土60%の混合土層。粘性ややあり しまりあり

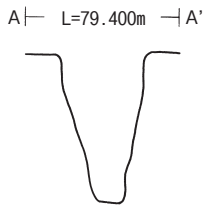
P７
1　10YR3/1 黒褐色粘土 しまりなし
2　10YR3/1 黒褐色粘土 しまりあり
3　10YR3/1 黒褐色粘土 しまりあり １層より濃色
4　10YR3/1 黒褐色粘土 しまりあり しまりなし 腐食物多い。



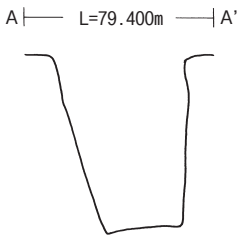


第14図　柱穴状土坑（２）

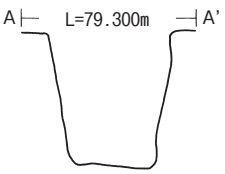
P1



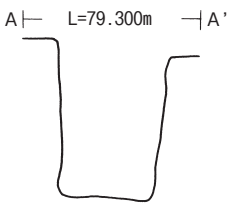
P2



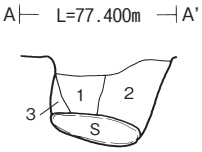
P3



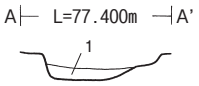
P4



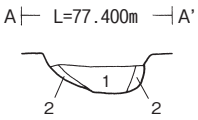
P8



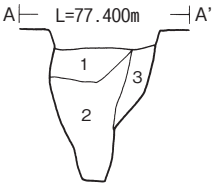
P9



P10



P11



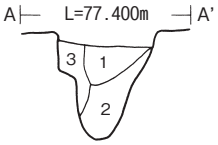
P 8
1　10YR3/1 黒褐色粘土 しまりあり
2　10YR3/1 黒褐色粘土 しまりあり 1 層より濃色。
3　10YR3/1 黒褐色土 60%、10YR8/1 灰白砂 40%の混合土層。粘性ややあり しまりあり

P 9
1　10YR2/1 黒色粘土 90%、10YR7/1 灰色砂質土 10%の混合土層。粘性・しまりあり

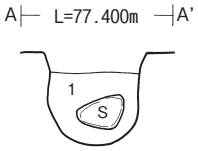
P 10
1　10YR3/1 黒褐色粘土 粘性・しまりあり
2　10YR3/1 黒褐色粘土 40%、10YR7/1 灰色砂質土 60%の混合土層。粘性ややあり しまりあり

P 11
1　10YR3/1 黒褐色粘土 しまりあり 灰色砂質土（10YR7/1）３%含む。
2　10YR2/1 黒色粘土 しまりあり 灰色砂質土（10YR7/1）20%含む。
3　10YR7/1 灰色砂質土 90%、10YR3/1 黒褐色粘土 10%の混合土層。粘性なし しまりあり

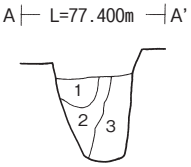
P12



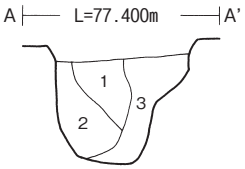
P13



P14



P15



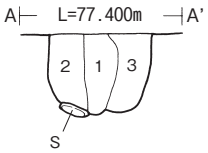
P 12
1　10YR3/1 黒褐色粘土 しまりあり
2　10YR3/1 黒褐色粘土 80%、10YR7/1 灰色砂質土 20%の混合土層。しまりあり
3　10YR3/1 黒褐色粘土 50%、10YR7/1 灰色砂質土 50%の混合土層。しまりあり

P 13
1　10YR7/1 灰色砂質土 70%、10YR3/1 黒褐色粘土 30%の混合土層。しまりあり

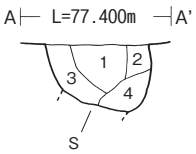
P 14
1　10YR3/1 黒褐色粘土 60%、10YR7/1 灰色砂質土 40%の混合土層。しまりあり
2　10YR3/1 黒褐色粘土 50%、10YR7/1 灰色砂質土 50%の混合土層。しまりあり
3　10YR3/1 黒褐色粘土 しまりあり 灰色砂質土（10YR7/1）３%含む。

P 15
1　10YR7/1 灰色砂質土 しまりあり 黒褐色粘土（10YR3/1）５%含む。
2　10YR3/1 黒褐色粘土 しまりあり
3　10YR3/1 黒褐色粘土 しまりあり 灰色砂質土（10YR7/1）５%含む。

P16

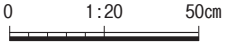


P17

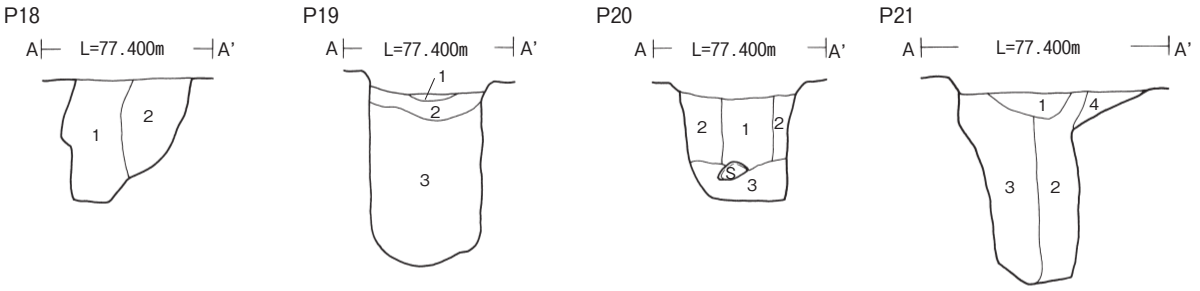


P 16
1　10YR3/1 黒褐色粘土 しまりあり 水酸化鉄多く含む。
2　10YR3/1 黒褐色粘土 しまりあり 灰色砂質土（10YR7/1）５%含む。
3　10YR3/1 黒褐色粘土 50%、10YR7/1 灰色砂質土 50%の混合土層。しまりあり

P 17
1　10YR3/1 黒褐色粘土 しまりあり 灰色砂質土（10YR7/1）３%含む。
2　10YR3/1 黒褐色粘土 しまりあり 1 層より濃色。灰色砂質土（10YR7/1）５%含む。
3　10YR7/1 灰色砂質土 90%、10YR3/1 黒褐色粘土 10%の混合土層。しまりあり
4　10YR3/1 黒褐色粘土 70%、10YR7/1 灰色砂質土 30%の混合土層。しまりあり



第15図　柱穴状土坑（３）

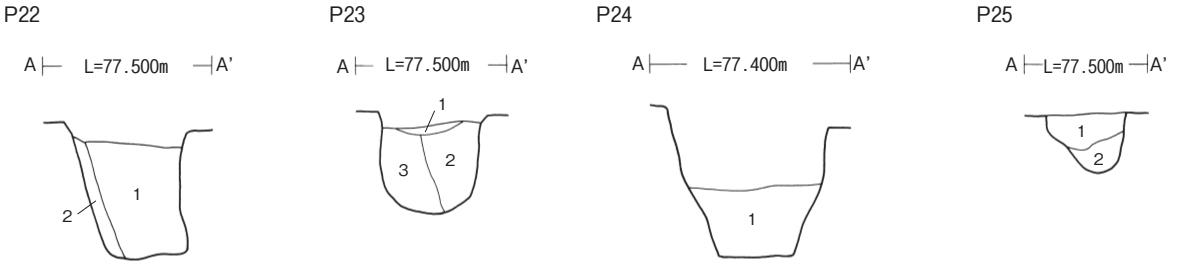


P 18
1　10YR3/1 黒褐色粘土 しまりあり 灰色砂質土（10YR7/1）10%含む。
2　10YR3/1 黒褐色粘土 70%、10YR7/1 灰色砂質土 30%の混合土層。しまりあり

P 19
1　10YR3/1 黒褐色粘土 しまりあり 水酸化鉄多く含む。
2　10YR3/1 黒褐色粘土 50%、10YR7/1 灰色砂質土 50%の混合土層。しまりあり
3　10YR3/1 黒褐色粘土 しまりあり 灰色砂質土（10YR7/1）3～5%含む。

P 20
1　10YR3/1 黒褐色粘土 しまりあり 灰色砂質土（10YR7/1）1%含む。
2　10YR3/1 黒褐色粘土 50%、10YR7/1 灰色砂質土 50%の混合土層。しまりあり
3　10YR3/1 黒褐色粘土 灰色砂質土（10YR7/1）3～5%の混合土層。しまりあり

P 21
1　10YR2/1 黒色粘土 しまりあり
2　10YR2/1 黒色粘土 しまりあり 灰色砂質土（10YR7/1）5%含む。
3　10YR3/1 黒褐色粘土 しまりあり
4　10YR3/1 黒褐色粘土 70%、10YR7/1 灰色砂質土 30%の混合土層。しまりあり

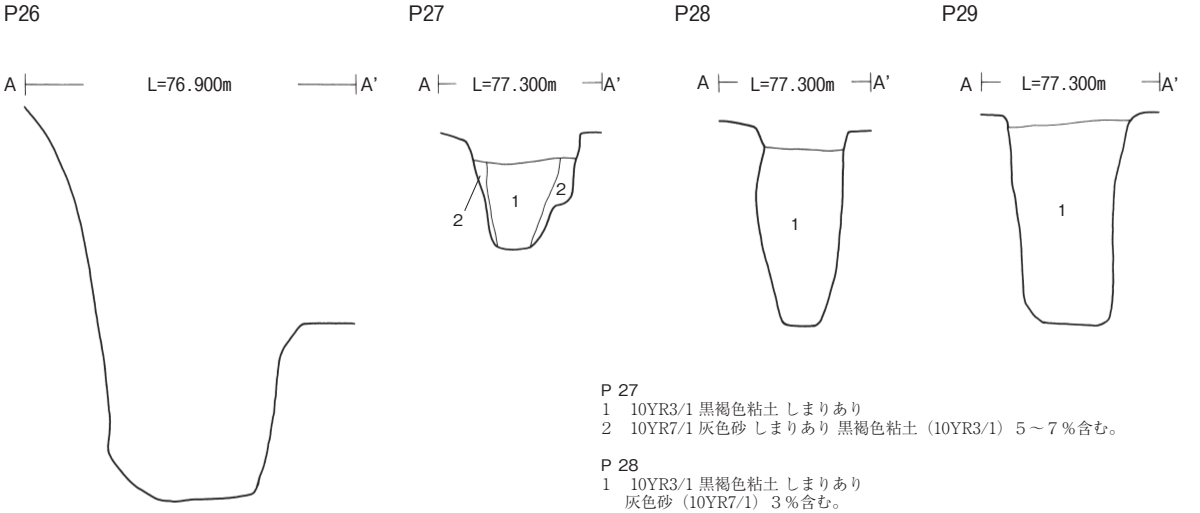


P 22
1　10YR3/1 黒褐色粘土 50%、10YR7/1 灰色砂質土 50%の混合土層。しまりあり
2　10YR3/1 黒褐色粘土 しまりあり

P 23
1　10YR2/1 黒色粘土 しまりあり
2　10YR3/1 黒褐色粘土 30%、10YR7/1 灰色砂質土 70%の混合土層。しまりあり
3　10YR3/1 黒褐色粘土 50%、10YR7/1 灰色砂質土 50%の混合土層。しまりあり

P 24
1　10YR3/1 黒褐色粘土 90%、10YR7/1 灰色砂質土 10%の混合土層。しまりあり

P 25
1　10YR3/1 黒褐色粘土 しまりあり 灰色砂質土（10YR7/1）10%含む。
2　10YR2/1 黒色粘土 しまりあり



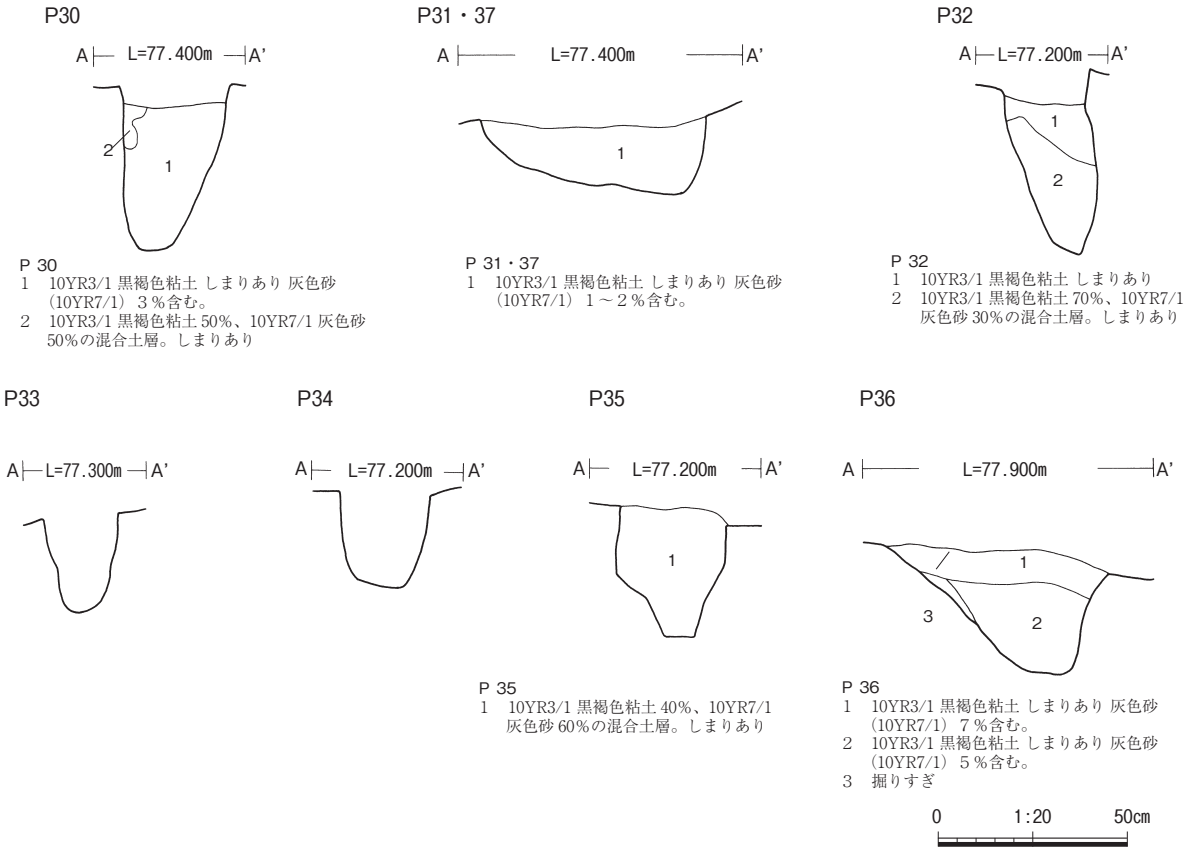
P 27
1　10YR3/1 黒褐色粘土 しまりあり
2　10YR7/1 灰色砂 しまりあり 黒褐色粘土（10YR3/1）5～7%含む。

P 28
1　10YR3/1 黒褐色粘土 しまりあり
灰色砂（10YR7/1）3%含む。

P 29
1　10YR3/1 黒褐色粘土 しまりあり
灰色砂（10YR7/1）1%含む。

0　1:20　50cm

第16図　柱穴状土坑（4）



第17図　柱穴状土坑（５）

８　ま　と　め

今回の調査で掘立柱建物跡や近世陶器の発見により、主に近世を主体とする遺跡であることが判明した。調査前の試掘で出土した古代の遺構や遺物は見つかっておらず、調査以前に行われた造成による整地層にも遺物の混入が認められないことから、古代集落の主体部分は今回の調査区には含まれていないことが明らかになった。

Ⅳ　要　害　遺　跡

１　立　　地

要害遺跡は岩手県奥州市胆沢区南都田字本木地内に所在する。胆沢扇状地内の水沢低位段丘に立地する。標高は77m前後を測り、調査前の状況は農道・水田・畑地である。

調査区を含む周辺一帯は過去の圃場整備事業により、大規模な造成が行われており、本来遺構が確認される層（黒褐色土）が削平によりなくなっている状況であった。

２　概　　要

今回の調査は用排水路および農道改良に関わる工事により、遺跡の一部が破壊される箇所を対象とし、調査面積は1,500㎡である。このうち、本調査対象面積が933㎡、確認調査対象面積が567㎡である。調査区は西側に約５×80mと南北に細長い箇所と南側から北東へ約９m幅をもつ調査区とに大きく分かれる。検出した遺構は竪穴住居跡４棟、住居状遺構４基、土坑９基、溝跡１条、柱穴状土坑17個、性格不明遺構１基である。

３　調査の経過と調査方法

（１）野外調査の経過

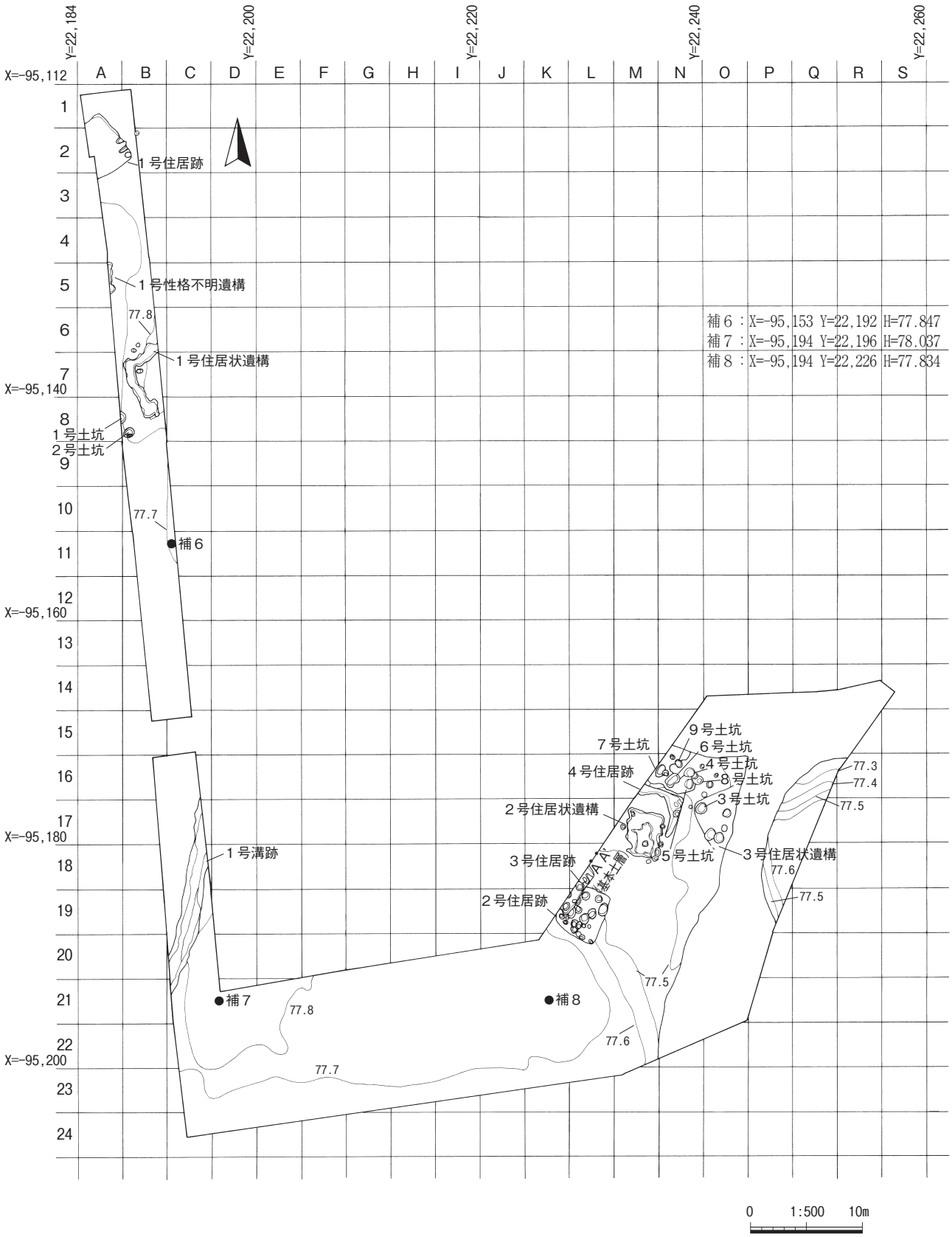
５月12日　調査開始。重機による表土除去開始。
５月16日　人力による遺構検出を開始する。
５月26日　遺構精査・図面実測に着手する。
６月11日　現地公開実施。
６月13日　航空写真撮影実施。
６月14日　終了確認実施。
６月20日　重機による埋め戻し作業を開始する。（～６月22日まで）
６月22日　調査終了。
（＊終了確認はいずれも委託者・岩手県教育委員会・埋文センターの３者による）

（２）グリッドの設定

平面直角座標第Ｘ系のＸ＝－95,112.000、Ｙ＝22,184.000を原点とし、４×４mのグリッドを設定した。グリッドの呼称は原点を起点に南方向へ１～24、東方向へＡ～Ｓとしている。グリッドの呼称は１Ａ、２Ｂなどとなる。

（３）基準点の設定

遺構の実測に利用するため調査区内外に補助点を株式会社南部測量設計に委託して打設し、これをもとに調査を行った。座標値はいずれも世界測地系によるもので、成果値と杭高は第18図のとおりである。


Y=22,184
Y=22,200
Y=22,220
Y=22,240
Y=22,260
X=-95,112
X=-95,140
X=-95,160
X=-95,180
X=-95,200
A B C D E F G H I J K L M N O P Q R S
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24
1号住居跡
1号性格不明遺構
1号住居状遺構
1号土坑
2号土坑
補6
補7
補8
1号溝跡
2号住居跡
3号住居跡
2号住居状遺構
4号住居跡
7号土坑
9号土坑
6号土坑
4号土坑
8号土坑
3号土坑
5号土坑
3号住居状遺構
A A'
基本土層
77.8
77.7
77.3
77.4
77.5
77.6
補6：X=-95,153 Y=22,192 H=77.847
補7：X=-95,194 Y=22,196 H=78.037
補8：X=-95,194 Y=22,226 H=77.834
0 1:500 10m

第18図　遺構配置図

（4）表土除去と遺構の検出

各遺跡の調査に先立って、岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課による事前の試掘調査が実施されている。この試掘により調査対象区内の水田・畑では地山面まで過去の造成等による工事のため掘削されていることが確認された。また、未舗装道路部分については事前に試掘は行われていなかった。

試掘では遺構の大部分が削平されているものの、遺構や遺物が確認された。また、削平により、本来、遺構検出面ある黒褐色シルト層が水田・畑部分にはほとんど残っておらず、低地である旧河道部分や未舗装道路の一部混入しているのが確認された。そのため、旧水田・畑である表土の除去は重機で行い、その後は人力による遺構検出を行った。

（5）遺構の精査と実測

調査で検出された遺構は以下の手順で調査を進めた。

竪穴住居跡・竪穴住居状遺構は４分法、土坑は２分法で精査を行い、溝跡は適宜に土層確認用の断面ベルトを残し、埋土の堆積状況の確認を行いながら掘り下げた。柱穴状土坑については検出時に柱痕を確認し、平面図作成（株式会社ＣＵＢＩＣの遺構実測支援システムによる）後、セクションベルトを設け、断面確認→完掘の順で作業を行った。

（6）遺物の取り上げ方

遺物の取り上げは遺構内と遺構外に大別し、遺構内出土遺物については遺構名と相対的層位（検出面・上位・中位・下位・底面）を記し、遺構外出土遺物についてはグリッドおよび出土層位を記して取り上げたが、この際、グリッドを跨いで取り上げたものについてはグリッド名を複数記した。また、取り上げに際しては事前に必要に応じて平面図の作成および写真撮影を行っている。

（7）写　真　撮　影

調査記録用にデジタル一眼レフカメラ（Canon　EOS　50D）１台、モノクローム６×７㎝版カメラ１台を使用した。撮影にあたって、整理時の混乱を防ぐため撮影内容を記入した撮影カードを対象遺構撮影前に撮影している。その他、調査期間中にセスナ機による航空写真撮影を実施した。

４　室内整理の手順と方法

（1）作　業　経　過

各遺跡の室内整理期間は前述の例言のとおりで、整理作業は出土遺物の洗浄と遺物の仕分けは野外調査と平行して現地および室内で行った。また、土器の接合・復元作業・実測図作成・拓影作成などの作業は室内で行った。整理担当者はこれらの作業の確認・点検と平行して、図面合成・原稿執筆・各種観察表の作成等の作業を実施した。

（2）遺　　物

現場で洗浄した遺物の注記作業から開始し、続いて接合・復元を行った。その過程で本書に掲載するものを抽出し、それらの実測図を作成、トレースした。抽出にあたっては遺構内のものについては小破片でもなるべく掲載するようにした。遺構外のものについては出土地点・層位などを考慮して選別した。実測と平行して、これらを撮影し、合わせて登録作業を行った。

（3）遺　　構

実測図を点検・合成しながら遺構の検討を行った。その後、第２原図を作成し、そのトレースを行った。また、野外調査で撮影した遺構の写真も整理し、台帳登録をしている。その後、掲載するものを抽出し、トリミングなどを行った後に写真図版とした。

（4）掲　載　図

掲載している遺構の縮尺は平面図・断面図ともに竪穴住居跡は1/40・1/50、土坑・柱穴状土坑は平面図・断面図ともに１/40、溝跡は平面図は1/50、断面図は1/25とした。また、遺物掲載縮尺は1/3とした。ただし、一部異なるものもあるため、各図にスケールおよび縮尺を付した。写真図版については縮尺不定である。また、図中において柱穴状土坑は「Ｐ」、遺構内の土坑および柱穴状土坑は「Pit」、土器は「Ｐ」、石器・礫は「Ｓ」、遺構内出土の掲載遺物は（　）内に掲載番号を表記した。スクリーントーンの使用は凡例図のとおりであるが、これ以外の使用については使用箇所に用例を表記した。各遺構の計測値表記については土坑類は長軸×短軸である。

（5）遺 構 の 名 称

調査時においては検出、および精査順に遺構名を付したが、調査途中で遺構でないものも多くあったため、報告書掲載時に遺構名を変更した。変更前と変更後の名称は以下の表のとおりである。

第３表　新旧遺構名対応表

掲載遺構名	現場遺構名
１号住居跡	１号住居跡
２号住居跡	２号住居跡
３号住居跡	３号住居跡
４号住居跡	４号住居跡
１号住居状遺構	１号住居状
２号住居状遺構	２号住居状
３号住居状遺構	４号住居状
１号土坑	１号土坑
２号土坑	２号土坑
３号土坑	３号土坑
４号土坑	４号土坑
５号土坑	５号土坑

掲載遺構名	現場遺構名
６号土坑	６号土坑
７号土坑	７号土坑
８号土坑	８号土坑
９号土坑	９号土坑
１号溝跡	１号溝
Ｐ１	Ｐ２
Ｐ２	Ｐ13
Ｐ３	Ｐ14
Ｐ４	Ｐ101
Ｐ５	Ｐ４
Ｐ６	Ｐ５
Ｐ７	Ｐ６

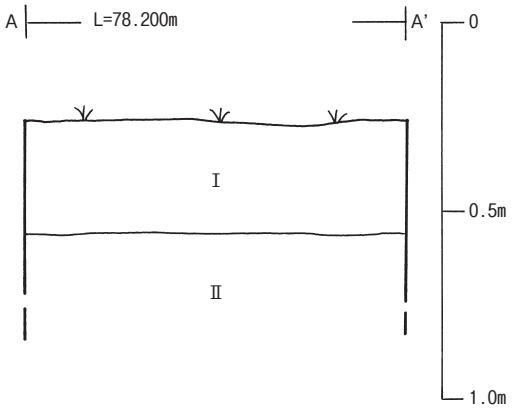
掲載遺構名	現場遺構名
Ｐ８	Ｐ７
Ｐ９	Ｐ11
Ｐ10	Ｐ３・Ｐ12
Ｐ11	Ｐ８
Ｐ12	Ｐ９
Ｐ13	Ｐ10
Ｐ14	Ｐ51
Ｐ15	Ｐ54
Ｐ16	Ｐ53
Ｐ17	Ｐ52
１号性格不明遺構	不明遺構

5　基　本　土　層

調査前の旧地形は水田および畑地であり、過去の造成により、遺構埋土にある黒色土層（銭倉遺跡第Ⅱ層相当）は削平されている。断面図作成は３号住居跡のＮ－Ｓベルト（第25図Ａ－Ａ’）の北側に隣接する調査区西側壁面で行った。

Ⅰ　10YR3/1 黒褐色土 粘土質 旧耕作土。
　　層厚20～30cm。

Ⅱ　10YR6/4 にぶい黄橙色砂質土 粘性なし
　　しまりあり 遺構検出面。



第19図　基本土層

6　検出遺構と出土遺物

（1）竪 穴 住 居 跡

１号住居跡（第20・21図、写真図版10～12）

＜位置・検出・重複関係＞　１～３Ａ・２Ｂグリッドに跨って位置する。Ⅱ層で検出し、遺構の西側が調査区外へと延びる。重複する遺構はないが、旧河道の縁部に位置しているため調査中の湧水があり、このため床面が柔らかく貼床の確認調査などに支障をきたす状況であった。

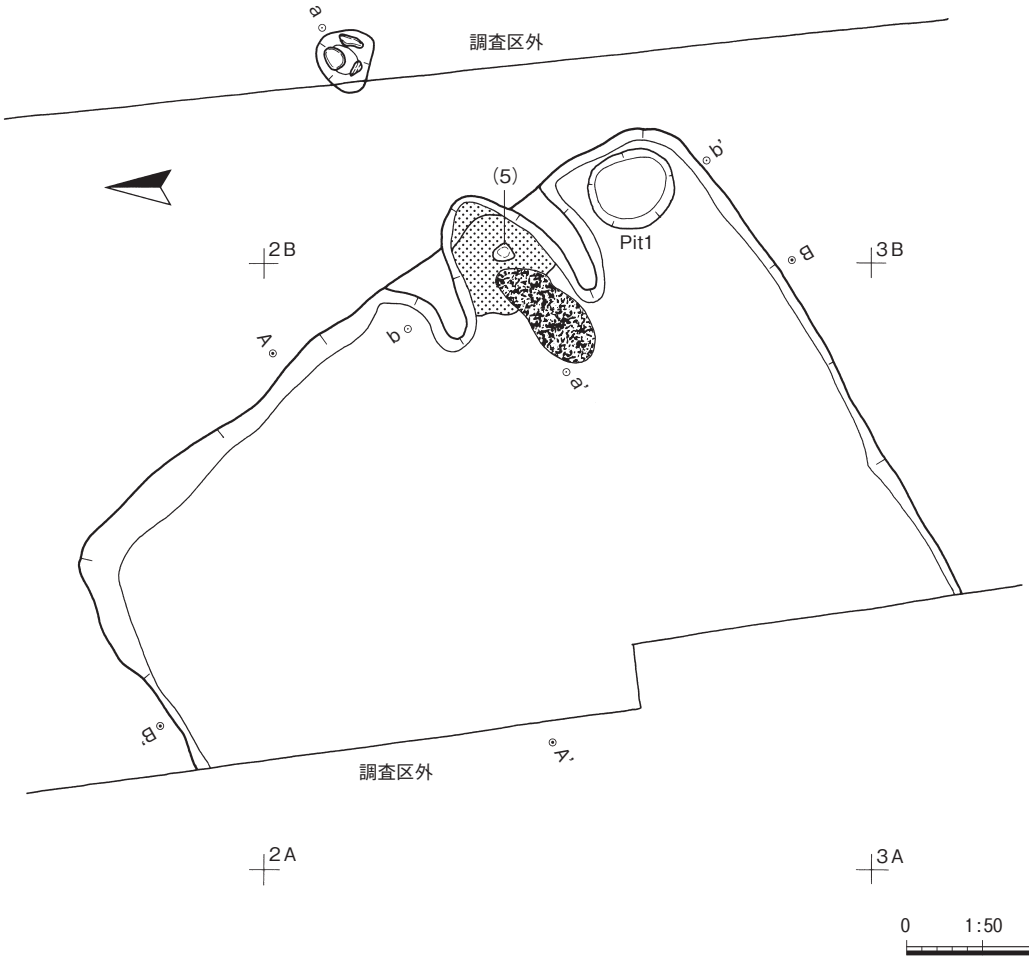
＜形状・規模・主軸方向＞　形状は方形状で、規模は遺構の一部が調査区外と延びるため不明であるが、南北504cmを測る。主軸方向はＥ－35°－Ｎである。

＜埋土＞　埋土は黒褐色砂質土を主体とする堆積で単層である。層中に水酸化鉄を少量含む。

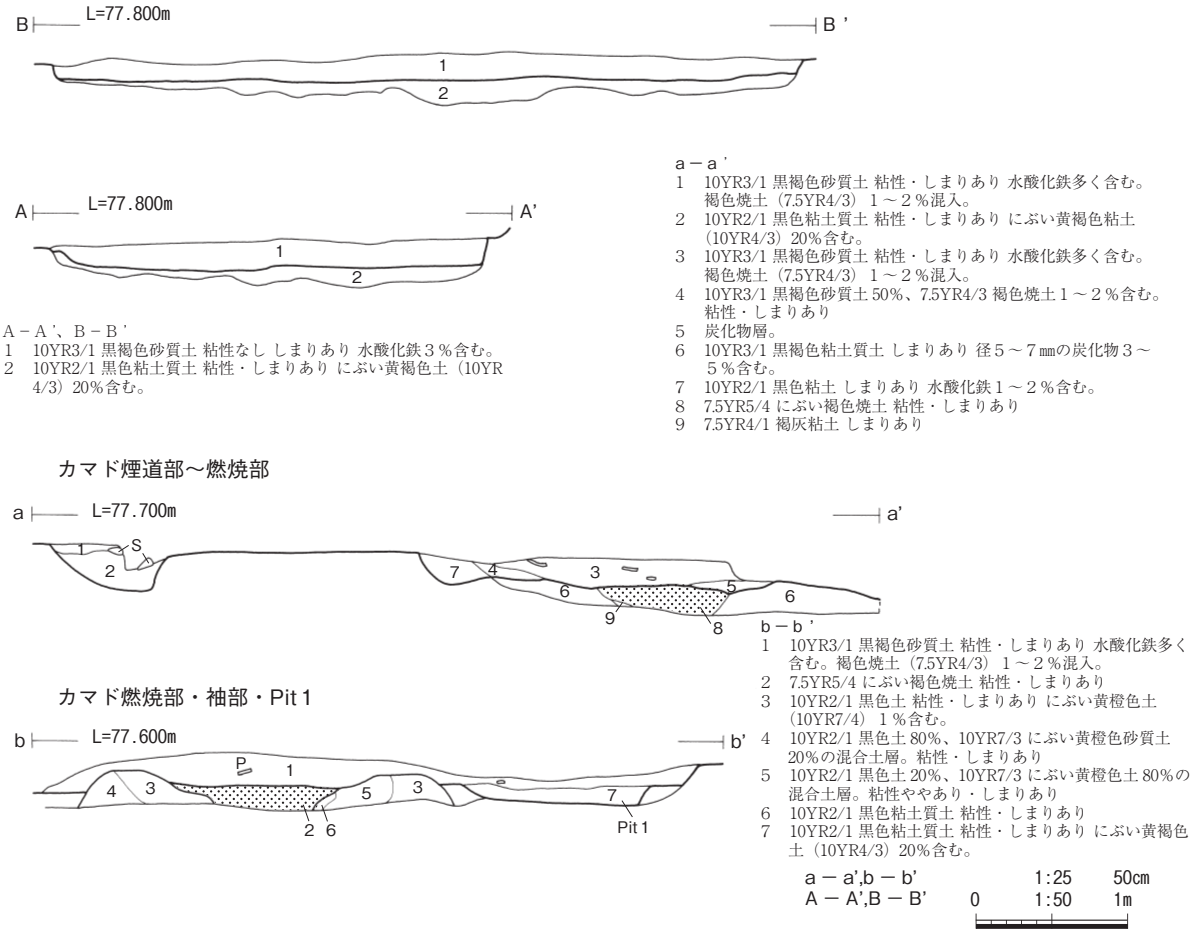
＜カマド＞　カマドは東壁の南寄りに構築されている。煙道部は住居側の一部のみ検出した。カマドは黒色土で構築されている。煙出部は円形で径42×40cm、深さ17cmを測り、埋土の上～中位に大きさ12～18cmの礫が３点混入している。燃焼部は約66×60cmの範囲でにぶい褐色焼土が確認され、焚き口から住居内部にかけての約82×35cmの範囲に炭化物が広がっている。

＜床面・壁面＞　貼床は旧河道を掘り込んだ後、黒褐色土とにぶい黄橙色土の混合土で住居全体に施している。北壁・南壁は外傾して立ち上がるが、東壁は緩い立ち上がりである。床面から検出面までの壁高は北壁・南壁が10cm、東壁が14cmである。

＜土坑＞　住居の南東隅、カマド右袖脇で１基検出した。規模は径58×52cm、深さは６cmを測る。



第20図　１号住居跡（１）

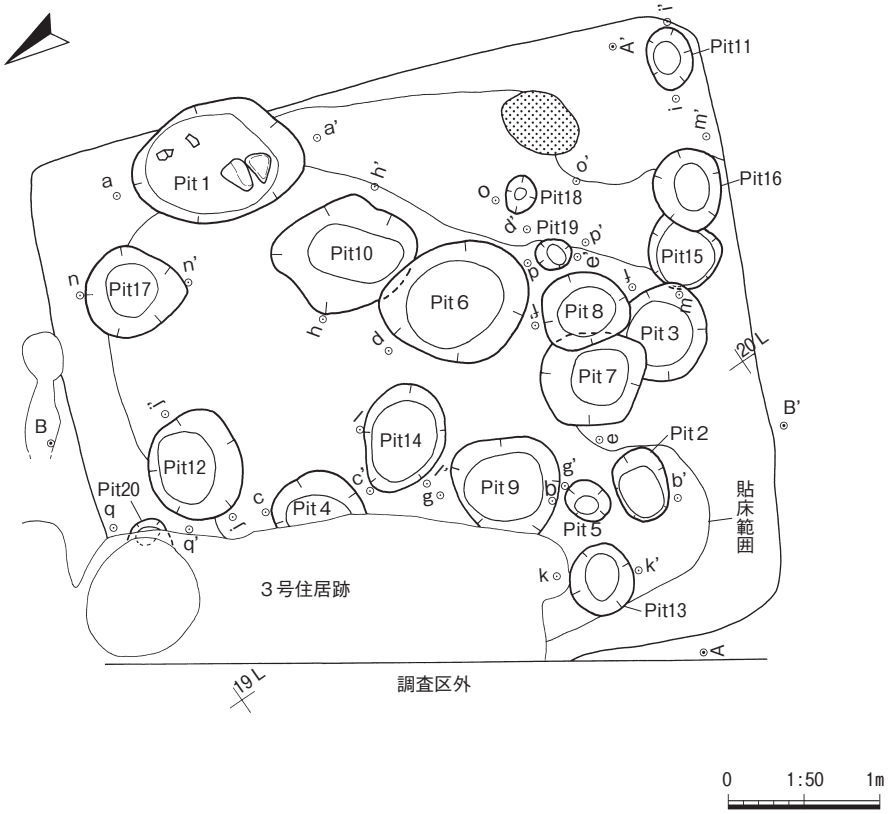


第21図　１号住居跡（２）

＜遺物＞　土器は遺構全体で総量4472.89ｇが出土した。１～８の破片７点を掲載した。このうち１・２・５がカマド燃焼部、３が床面、７が貼床、他は埋土中からの出土である。１～５・７は土師器で器種は１が鉢２～５が坏、７が甕である。６は須恵器の底部破片であるが、器種は不明である。器面調整は１は内外面ミガキで外面の口縁部に沈線文が２～３本施されている。２～５は外面ロクロナデ、２・４の内面にはミガキ後に黒色処理が施されている。７は内外面ロクロナデで６の胴上半はヘラケズリ調整が施されている。底部の切り離し技法は２～５が回転糸切、６は切り離し後の再調整により不明である。石器は磨石が１点（８）出土した。カマド煙出部の埋土から他の礫２点と伴に出土した。石器の原材には奥州山脈産のデイサイトが使用されている。
時期　出土した遺物の年代観から９世紀代に属すると考えられる。

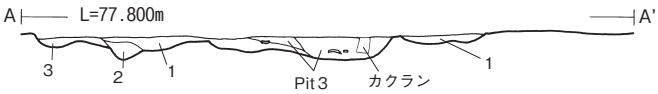
２号住居跡（第22～24図、写真図版12～18）
＜位置・検出・重複関係＞　19Ｋ・19Ｌ・20Ｌグリッドに跨って位置する。表土下のⅡ層で検出した。遺構の西側が調査区外へと延びる。３号住居跡と重複関係にあり、これに切られる。残存状況が悪く、大部分が削平を受けているため、遺構はほぼ床面～貼床面での検出である。遺構内には土坑類が19基検出されたが、本遺構との属性や新旧関係を判断することが難しかったため、遺構内土坑として扱った。

＜形状・規模・主軸方向＞　形状は長方形と推定され、規模は遺構の一部が調査区外と延びるため不明であるが、南北456cm、東西402cmを測る。
＜埋土・貼床＞　黒褐色土と黄褐色粘土質土の混合土である。
＜カマド＞　削平のため焼土以外は検出されておらず、カマドの有無は不明である。焼土範囲は52×38cmで焼土の厚さは１cm未満である。
＜床面・壁面＞　貼床は旧河道を掘り込んだ後、黒褐色土とにぶい黄橙色土の混合土で住居全体に施している。北壁・南壁は外傾して立ち上がるが、東壁は緩い立ち上がりである。床面から検出面までの壁高は北壁・南壁が10cm、東壁が14cmである。
＜土坑類＞　19基検出した。Pit５・18・19は柱穴、Pit６は廃棄坑と考えられる。Pit７・８は重複しているが、Pit10を含めて埋土が類似している。
＜遺物＞　土器は遺構全体で総量5601.87ｇが出土した。このうち９～12の破片４点を掲載した。９は貼床土、10はPit２、11はPit７、12はPit12から出土した。器種は９・10は土師器坏で器面調整は外面ロクロナデ、内面はミガキ後に黒色処理が施されている。９の底部切り離し技法は回転糸切による。11・12は土師器甕の口縁～胴部破片で、器面調整は11が胴部外面は縦位のハケメ、内面はヘラナデ、12が内外面ロクロナデによる。また石器１点がPit10の埋土から出土した（13）。器種は砥石で、原材には奥羽山脈産の頁岩が使用されている。
時期　出土した遺物の年代観から９世紀代の遺構である。



第22図　２号住居跡（１）

貼床

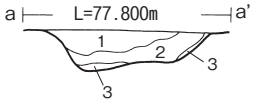


A－A'
1　10YR4/1 褐灰色土 粘性・しまりあり にぶい黄橙色土（10YR6/3）５％含む。
2　10YR3/1 黒褐色土 粘性・しまりあり にぶい黄橙色土（10YR6/3）３～５％含む。
3　10YR3/1 ～ 4/1 黒褐～褐灰色土 粘性・しまりあり にぶい黄橙色土（10YR6/3）５％含む。

貼床

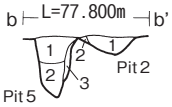
B－B'
1　10YR3/1 黒褐色土 粘性・しまりあり にぶい黄橙色土（10YR6/3）10 ～ 15%含む。
2　10YR3/1 黒褐色土 粘性・しまりあり にぶい黄橙色土（10YR6/3）15 ～ 20%含む。

Pit 1



Pit 1
a－a'
1　10YR3/1 黒褐色粘土質土 粘性・しまりあり にぶい黄橙色砂質土（10YR6/4）１％含む。
2　10YR3/1 黒褐色粘土質土 粘性・しまりあり にぶい黄橙色砂質土（10YR6/4）２～３％含む。
3　10YR6/4 にぶい黄橙色砂質土 粘性なし しまりあり 黒褐色土（10YR3/1）５％含む。

Pit 2・Pit 5



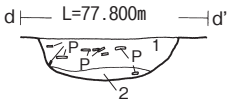
Pit 2
b－b'
1　10YR3/1 黒褐色粘土質土 粘性・しまりあり 水酸化鉄２～３％含む。
2　10YR6/4 にぶい黄燈色砂質土 粘性なし しまりあり 黒褐色土（10YR3/1）５％含む。

Pit 5
b－b'
1　10YR3/1 黒褐色粘土質土 粘性・しまりあり にぶい黄橙色砂質土（10YR6/4）１％含む。
2　10YR3/1 黒褐色砂質土 粘性・しまりあり 灰黄褐色土（10YR4/2）５～７％含む。
3　10YR3/1 黒褐色砂質土 50%、10YR4/2 灰黄褐色土 50%の混合土層。粘性・しまりあり

Pit 4

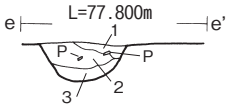
Pit 4
c－c'
1　10YR3/1 黒褐色粘土質土 粘性・しまりあり 水酸化鉄２～３％含む。

Pit 6



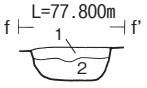
Pit 6
d－d'
1　10YR3/3 暗褐色砂質土 粘性・しまりあり 灰黄褐色土（10YR4/2）10%含む。
2　10YR3/1 黒褐色粘土質土 粘性・しまりあり 灰黄褐色土（10YR4/2）10 ～ 15%含む。

Pit 7



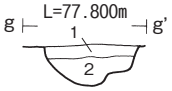
Pit 7
e－e'
1　10YR3/1 黒褐色土 70%、10YR4/2 灰黄褐色土 30%の混合土層。粘性・しまりあり
2　10YR4/1 褐灰色土 粘性・しまりあり 灰黄褐色土（10YR4/2）３％含む。
3　10YR3/1 黒褐色土 80%、10YR4/2 灰黄褐色土 20%の混合土層。粘性・しまりあり

Pit 8



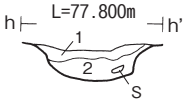
Pit 8
f－f'
1　10YR3/1 黒褐色土 粘性・しまりあり 灰黄褐色土（10YR4/2）10%含む。
2　10YR3/1 黒褐色土 粘性・しまりあり 灰黄褐色土（10YR4/2）３～５％含む。

Pit 9



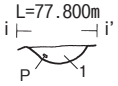
Pit 9
g－g'
1　10YR3/1 黒褐色土 50%、10YR5/2 灰黄褐色土 50%の混合土層。粘性・しまりあり
2　10YR4/2 灰黄褐色土 粘性・しまりあり にぶい褐色焼土粒（10YR5/4 径 10 ～ 15㎜）３％含む。

Pit10



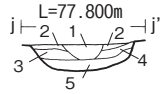
Pit10
h－h'
1　10YR4/2 灰黄褐色土 50%、10YR3/1 黒褐色土 50%の混合土層。粘性・しまりあり
2　10YR3/1 黒褐色土 粘性・しまりあり 灰黄褐色土（10YR4/2）１～２％含む。

Pit11



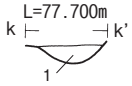
Pit11
i－i'
1　10YR3/3 暗褐色土 粘性・しまりあり 灰黄褐色土（10YR4/2）３～５％、径５～７㎜の炭化物１％含む。

Pit12



Pit12
j－j'
1　10YR6/4 にぶい黄橙色土 50%、10YR3/1 黒褐色土 50%の混合土層。粘性・しまりあり
2　10YR6/4 にぶい黄橙色土 70%、10YR3/1 黒褐色土 30%の混合土層。粘性・しまりあり
3　10YR3/1 黒褐色土 粘性・しまりあり にぶい黄橙色土（10YR6/4）10%混入。
4　10YR6/4 にぶい黄橙色土 粘性・しまりあり 黒褐色土（10YR3/1）10%含む。
5　10YR3/1 黒褐色土 粘性・しまりあり にぶい黄橙色土（10YR6/4）10%含む。

Pit13



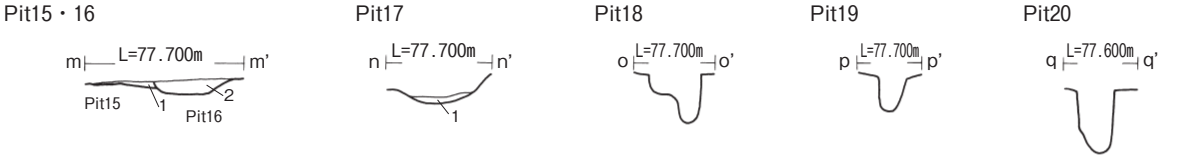
Pit13
k－k'
1　10YR3/1 黒褐色土 粘性・しまりあり 灰黄褐色土（10YR6/2）５％、褐色焼土粒（7.5YR4/4 径 20 ～ 30㎜）をブロックで３％含む。

Pit14

Pit14
l－l'
1　10YR3/1 黒褐色土 50％、10YR6/2 灰黄褐色土 50％の混合土層。粘性ややありしまりあり

0　1:50　1m

第23図　２号住居跡（２）



Pit15
m－m'
1　10YR3/1 黒褐色土 50%、10YR6/2 灰黄褐色土 50%の混合土層。粘性ややあり しまりあり
1　10YR3/1 黒褐色土 粘性・しまりあり 灰黄褐色土（10YR6/2）10%、炭化物１%含む。

Pit16
m－m'
1　10YR3/1 黒褐色土 粘性・しまりあり 灰黄褐色土（10YR6/2）３%、炭化物１%含む。

Pit17
n－n'
1　10YR3/1 黒褐色土 粘性・しまりあり 灰黄褐色土（10YR6/2）３%、炭化物１%含む。

第24図　２号住居跡（３）

0　1:50　1m

３号住居跡（第25・26図、写真図版18～20）

＜位置・検出状況・重複関係＞　18Ｌ・19Ｋ・19Ｌグリッドに跨って位置する。Ⅱ層で検出し、遺構の西側が調査区外へと延びる。２号住居跡と重複関係にあり、これを切る。カマド煙道部は削平されている。

＜形状・規模・主軸方向＞　形状は方形状で、規模は遺構の一部が調査区外と延びるため不明であるが、調査した範囲での規模は464×88cmを測る。

＜埋土＞　埋土は黒色土を主体とする層で、床面直上付近では炭化物粒が多く混入している。

＜カマド＞　カマドは東壁の北寄りに構築されている。主軸方向はＥ－38°－Ｓである。煙道部は煙出部側の一部のみ検出された。煙出部から住居までの距離は90cmで、このうち煙出部側の長さ約50cm、深さ２cmが残存していた。カマドは黒色土で構築されている。煙出部は楕円形で径33×27cm、深さ37cmを測る。カマド本体は袖部に長径20cm前後の礫を芯材とし、これに黒褐色土と褐色砂質土の混合土を覆って構築されている。燃焼部には約51×39cmの範囲で暗褐色焼土が広がっている。

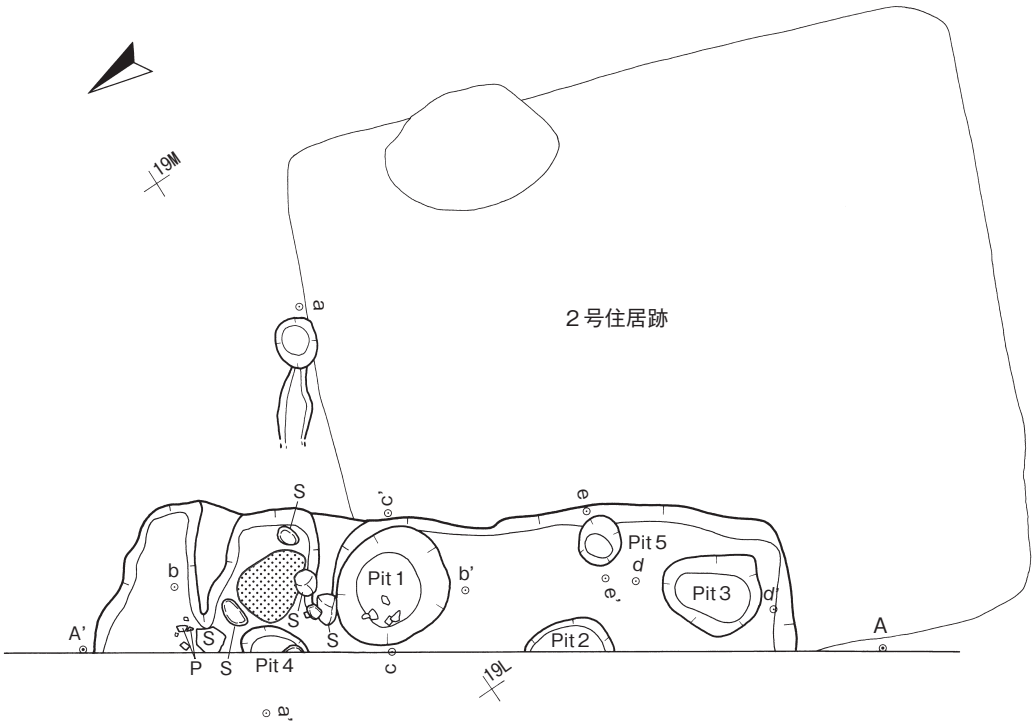
＜床面・壁面＞　貼床はⅢ層を掘り下げた後、黒色・黒褐色・黄褐色などの混合土を６～10cmほどの厚さで住居全体に施している。壁面は外傾して立ち上がり、床面から検出面までの壁高は北壁10cm・南壁17cm、東壁９cmである。

＜土坑類＞　５基検出した。Pit１～４は土坑、Pit５は柱穴状土坑である。Pit１は住居の東壁中央部、カマドの右袖脇で１基検出した。形状は楕円形で底面から土器が多量出土した。Pit５は重複する２号住居跡に属する可能性もある。Pit２・４は遺構の半分が遺構外へと延びるため、詳細は不明である。

＜遺物＞　土器は遺構全体で総量5530.25ｇが出土した。このうち約69.7%が埋土（カマド周辺が28.6%、その他は41.1%）からの出土で占め、以下土坑内11.5%、貼床10.5%、床面8.3%の順である。掲載した土器は14～20の７点で、14・15は貼床内において東西に並立した状態で出土した。16・17はカマド、18は住居西壁の２層中、19・20はPit１から出土した。器種は14～18が土師器坏、20が土師器甕、19が須恵器甕である。器面調整は14～17が外面ロクロナデ、内面はミガキ後に黒色処理が施されている。18・20は内外面ロクロナデ、19は外面タタキが施されている。

底部の切り離し技法は15・18が回転糸切、14は摩滅のため不明である。石器は21～23が埋土から出土した。いずれも磨石で原材には奥羽山脈産の21・23がデイサイト、22が安山岩が使用されている。

時期　出土した遺物の年代観から９世紀代の遺構である。

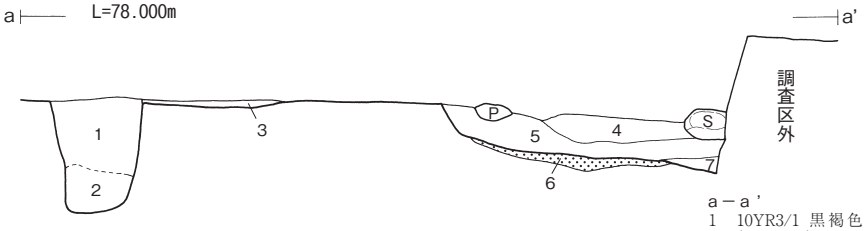


A－A'
1　10YR2/1 黒色土 粘性・しまりあり 径5㎜大の炭化物1～2％、酸化鉄粒多量含む。
2　10YR2/1 黒色土 粘性・しまりあり 径5㎜大の炭化物20％、酸化鉄粒多量含む。
3　10YR2/1 黒色土 粘性･しまりあり 黄褐色土(10YR5/6) 5～7％混入。
4　10YR2/1 黒色土 粘性･しまりあり 黄褐色土(10YR5/6)、炭化物各1％含む。(壁際の掘り方・貼り床)
5　10YR5/6 黄褐色砂質土 粘性なし しまりあり 黒褐色土 (10YR3/1) 10～15％混入。(貼り床)
6　10YR3/1 黒褐色土 粘性・しまりあり 黄褐色砂質土 (10YR5/6) 3％含む。

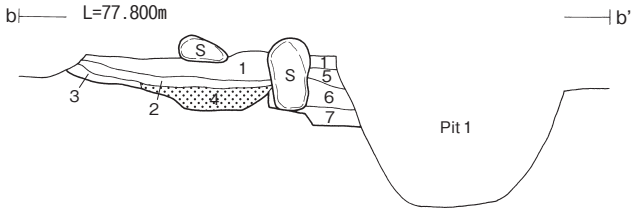
P 2
1　10YR2/2 黒褐色土 粘性・しまりあり 灰黄褐色土 (10YR6/2) 20％含む。

P 4
1　10YR3/1 黒褐色土70％、10YR4/4 褐色土30％の混合土層。
粘性ややあり しまりあり 炭化物1％含む。

カマド煙出～燃焼部



カマド燃焼部



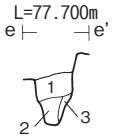
a－a'
1　10YR3/1 黒褐色土 粘性ややあり しまりあり 褐色土 (10YR4/4) 5～7％含む。
2　10YR3/1 黒褐色土30％、10YR4/4 褐色砂質土70％の混合土層である。粘性なし しまりあり
3　10YR3/1 黒褐色土 粘性なし しまりあり 褐色土 (10YR4/4) 1％含む。
4　10YR3/2 黒褐色土 粘性なし しまりあり (住居埋土Ⅰ層)
5　10YR2/2 黒褐色土 粘性なし しまりあり 褐色土粒(10YR4/4 径10㎜) 1～2％含む。
6　10YR2/1 黒色土 粘性・しまりあり 炭化物10％含む。
7　10YR2/1 黒色土 粘性・しまりあり 炭化物70％含む。(住居埋土Ⅱ層 - 焼失部分)

0　1:25　50cm

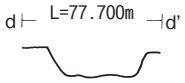
第25図　3号住居跡（1）

b－b’
1　10YR3/2 黒褐色土 粘性なし しまりあり（住居埋土１層）
2　10YR2/2 黒褐色土 粘性なし しまりあり 褐色土粒（10YR4/4 径 10㎜）１～２％含む。
3　10YR3/1 黒褐色土 60％、10YR4/2 灰黄褐色土 40％の混合土層。粘性・しまりあり　袖土
4　7.5YR3/4 暗褐色焼土 粘性・しまりあり 炭化物５％含む。
5　10YR3/2 黒褐色土 粘性・しまりあり 灰黄褐色土（10YR4/2）１～２％含む。
6　10YR3/2 黒褐色土 粘性・しまりあり 灰黄褐色土（10YR4/2）１～２％含む。
7　10YR3/2 黒褐色土 粘性・しまりあり

Pit５

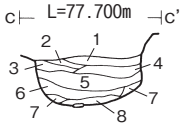


Pit３

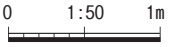


Pit 5
d－d’
1　10YR3/1 黒褐色粘土質土 しまりややあり 灰黄褐色土（10YR4/2）20％含む。
2　10YR2/1 黒色粘土質土 粘性・しまりあり
3　10YR3/1 黒褐色粘土質土 しまりなし 壁崩落土。

Pit１



Pit 1
c－c’
1　10YR3/1 黒褐色土 粘性ややあり しまりあり 炭化材２～３％含む。
2　10YR7/3 にぶい黄橙色砂質土 60％、10YR3/1 黒褐色土 30％、炭化物 10％混合。粘性ややあり しまりあり
3　10YR3/1 黒褐色土 粘性・しまりあり
4　10YR3/1 黒褐色土 粘性・しまりあり 灰黄褐色土（10YR4/2）10％混入。
5　10YR3/1 黒褐色土 粘性・しまりあり 灰黄褐色土（10YR4/2）５～10％含む。
6　10YR3/1 黒褐色土 粘性・しまりあり
7　10YR3/1 黒褐色土 粘性・しまりあり にぶい黄橙色砂質土（10YR7/3）30％含む。
8　10YR2/2 黒褐色砂質土 粘性あり しまりあり



第26図　３号住居跡（２）

４号住居跡（第27・28図、写真図版21・22）

＜位置・検出状況・重複関係＞　16M・16N・17Nグリッドに跨って位置する。Ⅱ層で検出し、遺構の西側が調査区外へと延びる。２号住居状遺構と重複関係にあり、これに切られる。遺構の大半が削平されており、カマドの一部と貼床の掘り方と思われる溝状のプラン、柱穴を含む土坑類３基が本遺構に属すると考えられる。

＜形状・規模・主軸方向＞　規模は遺構の一部が調査区外と延びること、また、遺構南側が重複する遺構に切られていることから形状・規模は不明である。

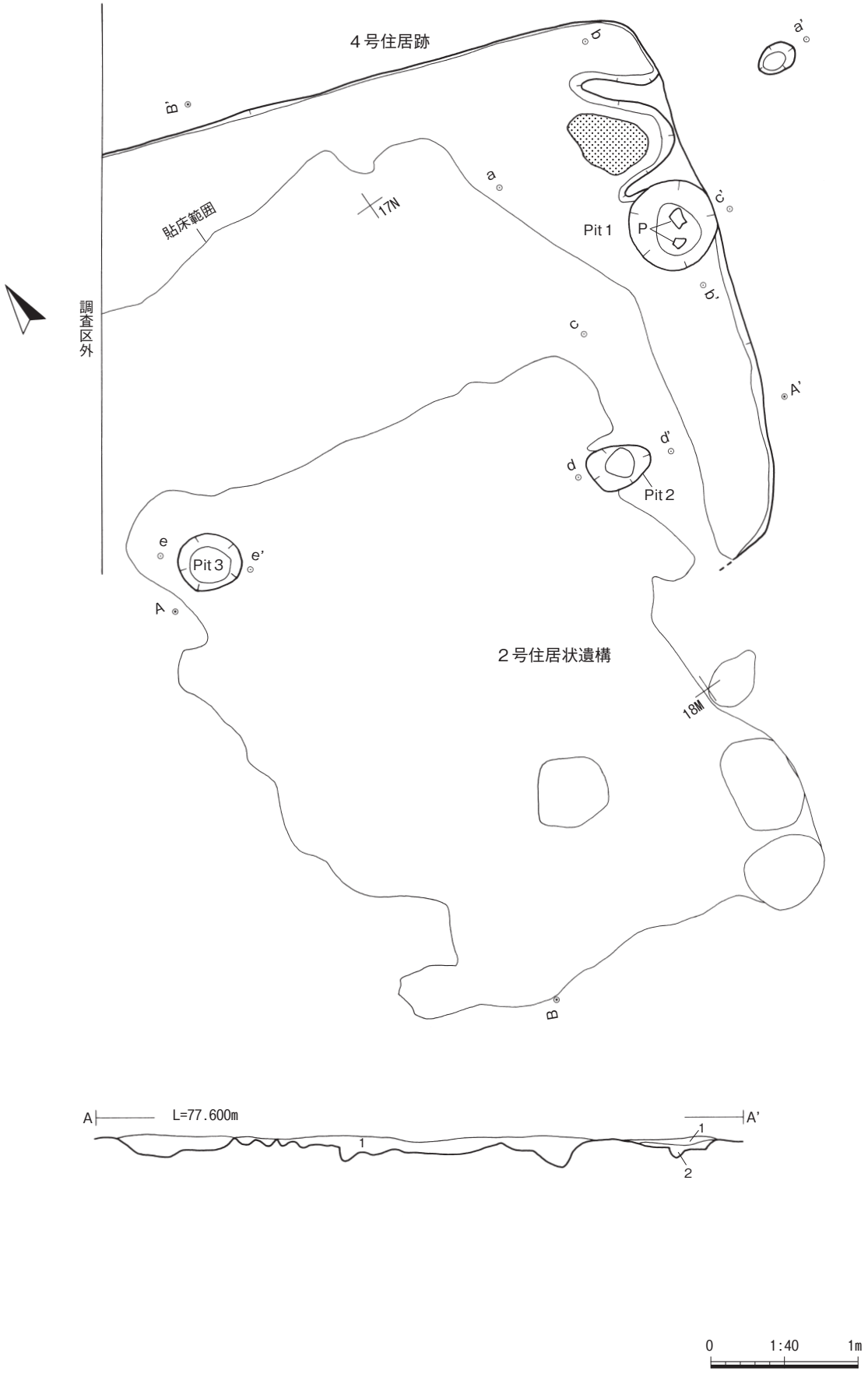
＜埋土＞　埋土は貼床の掘り方と思われる部分のみで暗黒色土を主体とする層で、炭化物粒・焼土粒が少量混入している。

＜カマド＞　カマドは東壁の北寄りに構築されている。煙道部は削平されており、煙出部と思われる土坑がカマドの東側に検出された。土坑の規模は径29×19㎝、深さ26㎝、住居壁面までの距離は68㎝を測る。カマドは灰黄褐色土を主体とする黒褐色土との混合土で構築され、わずかに袖部が残存している。燃焼部には約56×36㎝の範囲で暗褐色焼土が広がるが、ブロック状で疎らに検出された。

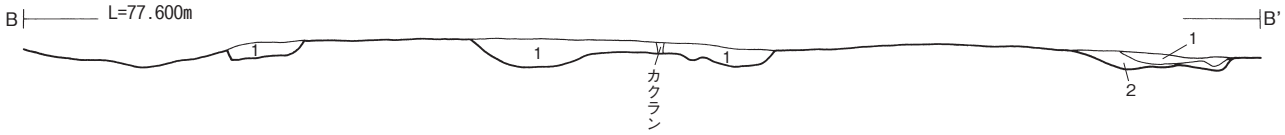
＜土坑類＞　３基検出した。Pit１は住居の東壁中央よりやや北側、カマドの右袖脇で検出した。形状は円形で規模は61×61㎝、深さは21㎝で底面から土器が出土した。Pit２・３は柱穴状土坑である。

＜遺物＞　土器は遺構全体で総量734.07ｇが出土した。大半がカマド付近およびPit１内からの出土である。このうち１点のみ掲載した。24は土師器甕の口縁～胴部破片でPit１から出土した。器面調整は両面ロクロナデが施されている。

時期　出土した遺物の年代観から９世紀代の遺構である。

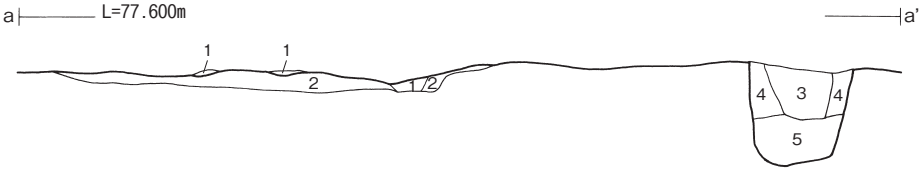

4号住居跡
a'
b
B'
a
c'
Pit 1
P
貼床範囲
17N
調査区外
b'
c
A'
d'
d
Pit 2
e
e'
Pit 3
A
2号住居状遺構
18M
B
A
L=77.600m
A'
1
1
2
0
1:40
1m

第27図　4号住居跡（1）

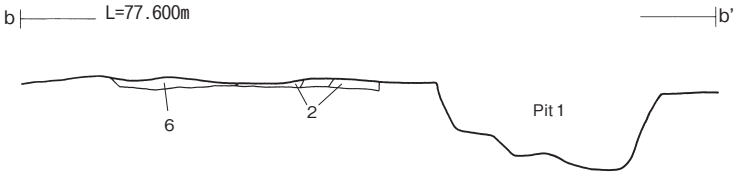


A－A'、B－B'
1　10YR3/3 暗褐色土 粘性なし･しまりあり 炭化物２％、焼土粒１％含む。遺物包含。人為層（掘り方）２号住居状遺構埋土。
2　10YR3/3 暗褐色土 粘性なし・しまりあり 炭化物・焼土粒各１％含む。遺物包含。人為層（掘り方）

カマド燃焼部～煙出部



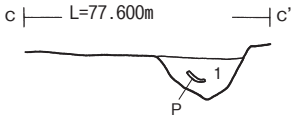
カマド燃焼部～ Pit 1



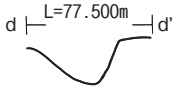
a－a'、b－b'
1　10YR4/2 灰黄褐色土 粘性ややあり しまりあり 砂５％、焼土粒３％混入。
2　10YR3/3 暗褐色土 粘性・しまりややあり 砂１％、焼土粒５％、径10㎜大の炭化物３％、遺物含む。
3　10YR2/1 黒色土 粘性ややあり しまりあり 砂３％、焼土粒１％含む。
4　10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 粘性・しまりややあり 砂３％含む。
5　10YR4/2 灰黄褐色粘土 粘性あり しまりなし 砂５％含む。
6　10YR4/2 灰黄褐色粘土 粘性ややあり しまりあり 砂３％含む。

a － a',b － b'　1:20　50cm
A － A',B － B'　0　1:40　1m

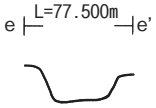
Pit 1



Pit 2



Pit 3



Pit 1
c－c'
1　10YR2/2 黒褐色土 粘性ややあり しまりあり 径10㎜大の炭化物１％、焼土粒１％、遺物少量混入。人為。

0　1:40　1m

第28図　４号住居跡（２）

（2）住 居 状 遺 構

３基検出した。竪穴住居跡のカマドがないものを本遺構とした。

１号住居状遺構（第29図、写真図版23）

＜位置・検出状況・重複関係＞　６Ｂ・７Ｂ・８Ｂグリッドに跨って位置する。Ⅱ層で検出し、遺構の東側が調査区外へと延びる。住居の貼床の掘り方と考えられる溝状の遺構がＬ字状に検出された。

＜形状・規模＞　Ｌ字形の溝が北東－南西に354cm、南北に540cmの長さに延びている。溝の幅は上端54～165cm、下端40～144cm、深さは20cmを測り、底面は凹凸である。

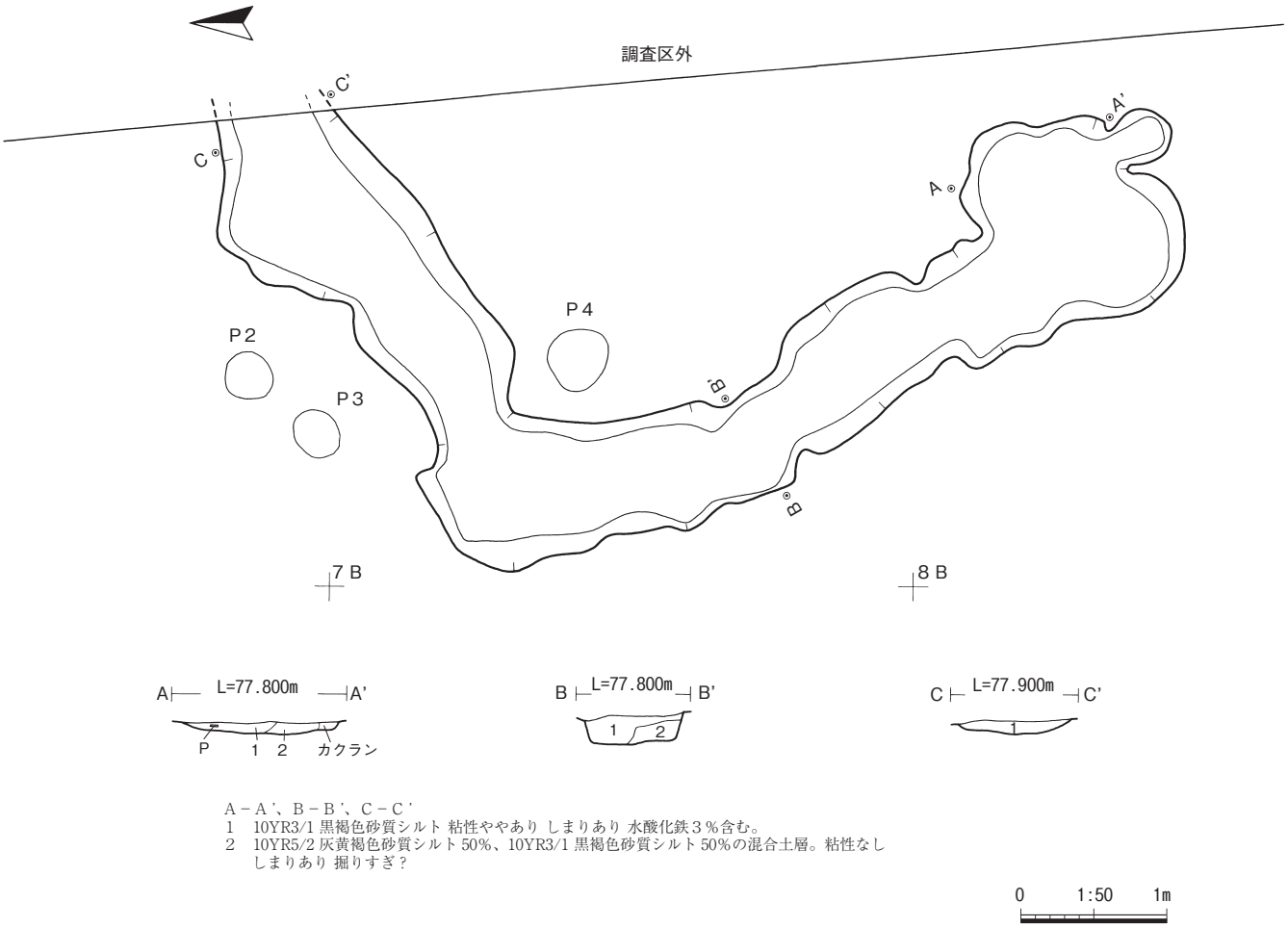
＜埋土＞　埋土は黒褐色砂質土を主体とする層と黒褐色土と灰黄褐色砂質土との混合土層からなる。

＜床面・壁面＞　削平のため床・壁面は不明である。

＜土坑類＞　遺構の内外から柱穴状土坑３個（Ｐ２～４）を検出したが、本遺構との関連は不明である。

＜遺物＞　土器は貼床の掘り方から総量2112.04ｇ出土し、このうち２点を掲載した。25は土師器坏、26は土師器甕で器面調整はいずれも内外ロクロナデ、25の底部切り離し技法は回転糸切りによる。

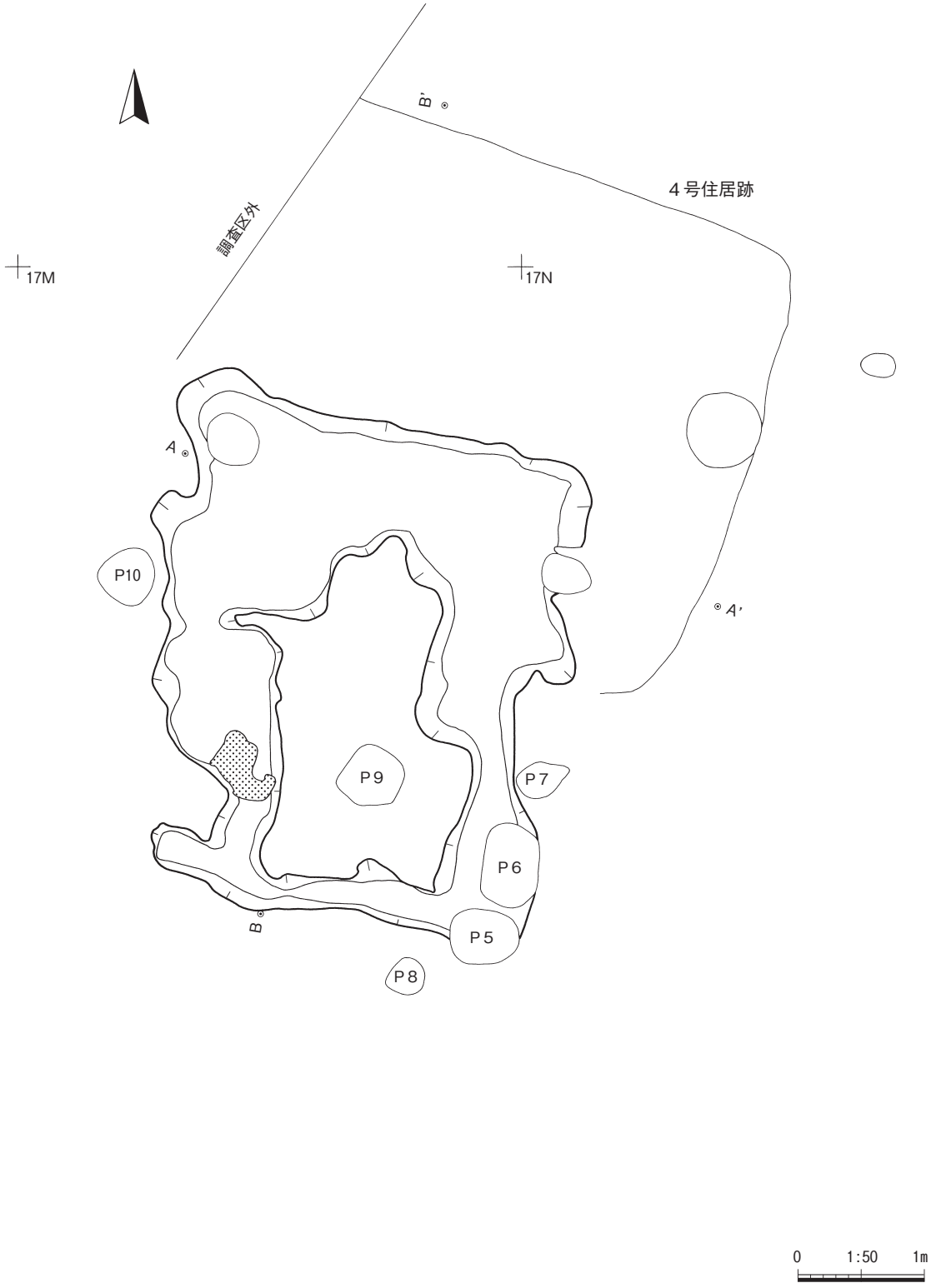
時期　出土した遺物の年代観から９世紀代の遺構である。



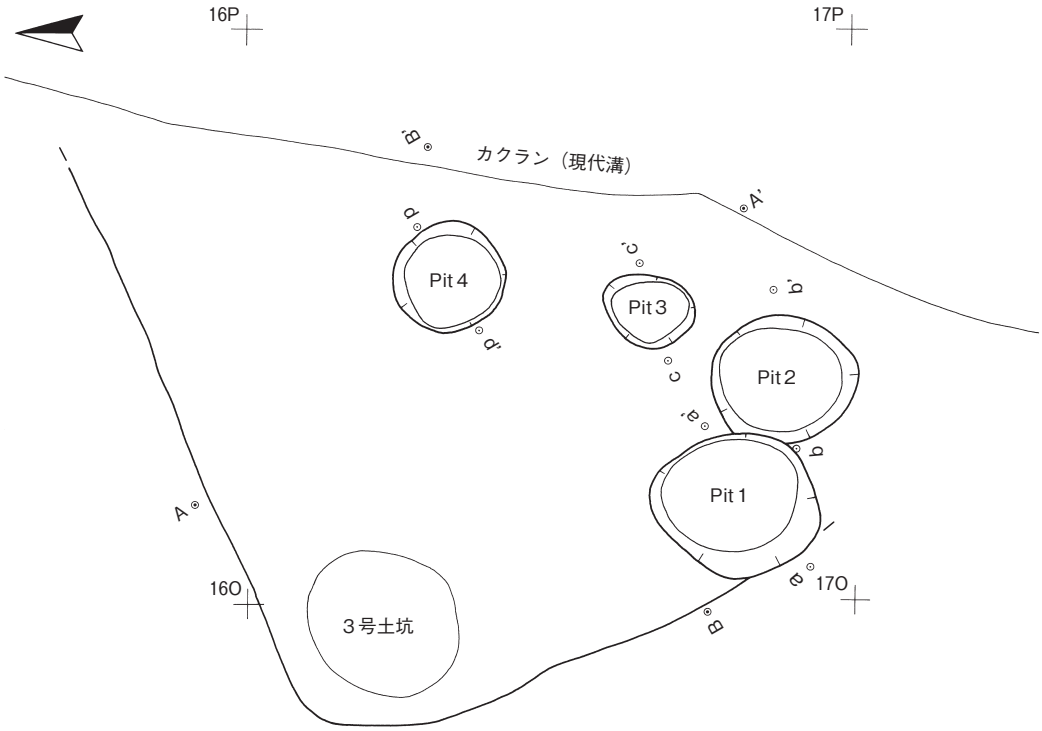
第29図　１号住居状遺構

２号住居状遺構（第30図、写真図版24）
＜位置・検出状況・重複関係＞　17M・17N・18M・18Nグリッドに跨って位置する。Ⅱ層で検出し、住居の貼床の掘り方と考えられる溝状の遺構が方形状に巡っている。４号住居跡の柱穴状土坑（Pit２・３）と重複関係にあり、これを切る。
＜形状・規模＞　溝状の掘り方が方形状に巡る。掘り方部分の幅は検出面で34～160cm、底部で21～112cm、深さは４～20cmで底面は凹凸である。
＜埋土＞　埋土は貼床のみである。暗褐色土を主体とする層で、層中に炭化物・焼土粒を少量含んでいる。
＜床面・壁面＞　削平のため壁面は残存せず、貼床は一部のみ確認できた。
＜土坑類＞　柱穴状土坑を６個検出した。Ｐ５～Ｐ10でいずれも本遺構と同時期のものではない。
＜遺物＞　土器は貼床の掘り方から総量2990.4ｇ出土したが、小破片で図化できたものはない。石器は、貼床の掘り方南西部から１点（27）出土した。器種は磨石で原材には奥羽山脈産の安山岩が使用されている。
時期　出土した遺物の年代観から９世紀代の遺構である。

３号住居状遺構（第31図、写真図版25・26）
＜位置・検出状況・重複関係＞　16O・17N・17Oグリッドに跨って位置する。Ⅱ層で検出し、遺構の東側が隣接する水路（現代）に切られており、遺構の北～西側の一部のみを検出した。３号土坑と重複し、これに切られる。
＜形状・規模・主軸方向＞　検出した一部から形状は方形状と推定される。規模は遺構の一部が調査区外と延びるため不明である。
＜埋土＞　埋土は貼床の埋土で、黒褐色土を主体に灰黄褐色土が混合している。
＜床面・壁面＞　貼床は壁面付近を中心に掘り込みが確認できる。また、削平のため壁面は残存しない。
＜土坑類＞　４基検出した。Pit１～４は土坑であるが、本遺構との関連は不明である。Pit１とPit２は重複関係にあり、Pit１が新しい。
＜遺物＞　土器は遺構全体で総量2072.94ｇが出土し、６点を掲載した。28はPit１、それ以外は貼床から出土した。28・29は土師器坏、30～33は土師器甕で、器面調整は28・29が外面ロクロナデ、内面ミガキで、29の底部切り離し技法は回転糸切による。また、28の外面には格子状の線刻が施されている。30～33は土師器甕の口縁～胴部破片で外面の調整は口縁部ナデ、胴部外面にケズリが施され、31・32はロクロ使用である。
時期　出土した遺物の年代観から９世紀代の遺構である。



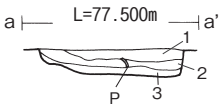
第30図　２号住居状遺構



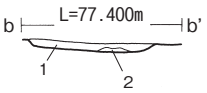
A－A'
1　10YR3/1 黒褐色土 粘性・しまりあり 灰黄褐色土（10YR5/2）10～15%、炭化物１～２％含む。

B－B'
1　10YR3/1 黒褐色土 粘性・しまりあり 灰黄褐色土（10YR5/2）10～15%、炭化物１～２％含む。
2　10YR3/1 黒褐色土 粘性・しまりあり 灰黄褐色土（10YR5/2）５％含む。

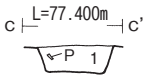
Pit 1



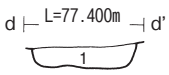
Pit 2



Pit 3



Pit 4



Pit 1
a－a'
1　10YR3/1 黒褐色土 しまりあり 灰黄褐色土（10YR4/2）10%含む。
2　10YR5/4 にぶい黄褐色粘土質土 粘性・しまりあり
3　掘りすぎ

Pit 2
b－b'
1　10YR3/1 黒褐色土 粘性・しまりあり 灰黄褐色土（10YR4/2）20%含む。
2　掘りすぎ

Pit 3
c－c'
1　10YR3/1 黒褐色粘土 しまりあり 灰黄褐色土（10YR4/2）10%含む。径 10～20㎜の炭化物５％含む。

Pit 4
d－d'
1　10YR4/1 褐灰色土 粘性ややあり しまりあり にぶい黄橙色砂質土（10YR7/2）10%、径 10㎜の炭化物１％含む。

0　1:50　1m

第31図　３号住居状遺構

（３）土　　坑

１号土坑（第32図、写真図版26）
＜位置・検出・重複関係＞　８Ａ・８Ｂグリッドに跨って位置する。Ⅱ層で検出し、重複する遺構はない。遺構の西側が調査区外へと延びる。
＜形状・規模＞　形状は楕円形状で、規模は遺構の一部が調査区外と延びるため不明であるが、検出面から底面までの深さは16cmを測る。
＜埋土＞　埋土は黒褐色土を主体とする堆積で、単層である。層中ににぶい黄橙色土および水酸化鉄を少量含む。
＜遺物＞　埋土から土師器の坏・甕の破片58.15ｇが出土したが、小片のため図化にはいたらなかった。
時期　出土した遺物から９世紀代の遺構と考えられる。

２号土坑（第32図、写真図版27）
＜位置・検出・重複関係＞　８Ｂグリッドに位置し、Ⅱ層で検出した。Ｐ１と重複し、これに切られる。
＜形状・規模＞　形状は不整な楕円形状を呈し、規模は開口部の長軸径が88cm、底部径は60×45cm、検出面から底面までの深さは14cmである。
＜埋土＞　埋土は黒色砂質土を主体とする。底～壁面の一部に水酸化鉄を多く含む。
＜遺物＞　総量で334.98ｇ出土した。34は底面からの出土した土師器坏で器面調整は外面ロクロナデ、内面ミガキが施され、底面の切り離し技法は回転糸切による。
時期　出土した遺物から９世紀代後半に属すると考えられる。

３号土坑（第32図、写真図版27）
＜位置・検出・重複関係＞　17Ｎ・17Ｏグリッドに跨って位置する。表土下のⅡ層で検出し、重複する遺構はない。
＜形状・規模＞　形状は楕円形で、規模は開口部径106×92cm、底部径74×68cm、検出面から底面までの深さは15cmである。
＜埋土＞　埋土の上位は黒色土、中位は灰黄褐色土で土器片が多く混入している。下位は黒褐色土で層全体に炭化物が混入しており、上位には焼土も多く含まれている。
＜遺物＞　総量で1128.23ｇ出土した。器種は土師器甕・須恵器甕の胴部破片などで図化には至らなかった。
時期　出土した遺物から９世紀代後半に属すると考えられる。

４号土坑（第32図、写真図版27・29）
＜位置・検出・重複関係＞　16Ｎグリッドに位置し、Ⅱ層で検出した。重複する遺構はない。
＜形状・規模＞　形状は円形基調で、規模は開口部径86×77cm、底部径は67×64cm、検出面から底面までの深さは29cmである。
＜埋土＞　埋土の上位は炭化物を多く含む黒色土が堆積し、中～下位は砂を少量含む黒褐色粘土質土を主体とした堆積である。

＜遺物＞　総量で205.01ｇの土器が出土した。いずれも小破片で図化には至らなかった。
時期　出土した遺物から９世紀代後半と考えられる。

５号土坑（第32図、写真図版27・29）
＜位置・検出・重複関係＞　16Ｎグリッドに位置し、Ⅱ層で検出した。重複する遺構はない。
＜形状・規模＞　形状は楕円形状で、規模は開口部径94×82cm、底部径は82×54cm、検出面から底面までの深さは32cmである。
＜埋土＞　自然堆積を呈し、埋土全体が黒褐色を基調としたシルトの堆積である。混入物は上位に炭化物と水酸化鉄、中～下位に砂が多く含まれる。
＜遺物＞　総量で832.61ｇ出土した。35～38を掲載した。いずれも埋土２層より出土した。35～37は土師器坏で器面調整は35が外面ロクロナデ、内面がミガキで黒色処理が施され、36・37は内外面ともにロクロナデ、また底部の切り離し技法はいずれも回転糸切による。38は土師器甕の口縁～胴上部の破片で、器面調整は内外面ロクロナデによる。
時期　出土した遺物から９世紀代後半と考えられる。

６号土坑（第33図、写真図版28・29）
＜位置・検出・重複関係＞　16Ｎグリッドに位置し、Ⅱ層で検出した。重複する遺構はない。
＜形状・規模＞　不整な形状で、規模は開口部径124×82cm、底部径は105×54cm、検出面から底面までの深さは20cmである。
＜埋土＞　自然堆積を呈し、埋土全体が黒褐色を基調としたシルトの堆積である。混入物は上位に炭化物が筋状に入り、中～下位に砂を多く含む。
＜遺物＞　総量で152.09ｇ、各層位から出土したが、いずれも小破片で図化には至らなかった。
時期　出土した遺物から９世紀代後半と考えられる。

７号土坑（第33図、写真図版28・29)
＜位置・検出・重複関係＞　16Ｍ・16Ｎグリッドに跨って位置し、Ⅱ層で検出した。Ｐ17と重複し、これに切られる。
＜形状・規模＞　形状は楕円形で、規模は開口部径108×75cm、底部径は90×56cm、検出面から底面までの深さは17cmである。
＜埋土＞　自然堆積を呈し、埋土全体が黒褐色を基調としたシルトの堆積である。混入物は上～中位に炭化物と水酸化鉄、下位に砂が多く含まれる。
＜遺物＞　総量で827.93ｇ出土した。39～42を掲載した。いずれも埋土下位～底面より出土した。39・40は土師器坏で器面調整は外面ロクロナデ、内面がミガキが施され、底部の切り離し技法はいずれも回転糸切による。41・42は土師器甕の口縁～胴上部の破片で、器面調整は外面ロクロナデによる。41の胴部外面には凹凸が確認できる。内面調整は41はロクロナデ、42はミガキが施されている。
時期　出土した遺物から９世紀代後半以降と考えられる。

８号土坑（第33図、写真図版28・29）
＜位置・検出・重複関係＞　16Ｎグリッドに位置し、Ⅱ層で検出した。重複する遺構はない。
＜形状・規模＞　形状は楕円形で、規模は開口部径70×34cm、底部径は40×26cm、検出面から底面ま

での深さは37㎝である。
＜埋土＞　埋土全体が黒褐色を基調としたシルトの堆積である。埋土の上～中位に炭化物と水酸化鉄が少量混入し、下位に砂が多く含まれる。
＜遺物＞　遺物は出土していない。
時期　出土した遺物がないことから詳細は不明である。

９号土坑（第33図、写真図版28・29）
＜位置・検出・重複関係＞　16Ｎグリッドに位置し、Ⅱ層で検出した。重複する遺構はない。
＜形状・規模＞　形状は楕円形で、規模は開口部径82×63㎝、底部径は58×44㎝、検出面から底面までの深さは20㎝である。
＜埋土＞　自然堆積で埋土の大半が黒褐色粘土質土の堆積で、壁～底面に一部灰黄褐色（グライ化した）の層が堆積している。
＜遺物＞　遺物は総量で926.19ｇ出土している。小片のみで掲載した遺物はない。
時期　出土した遺物から９世紀代後半と考えられる。

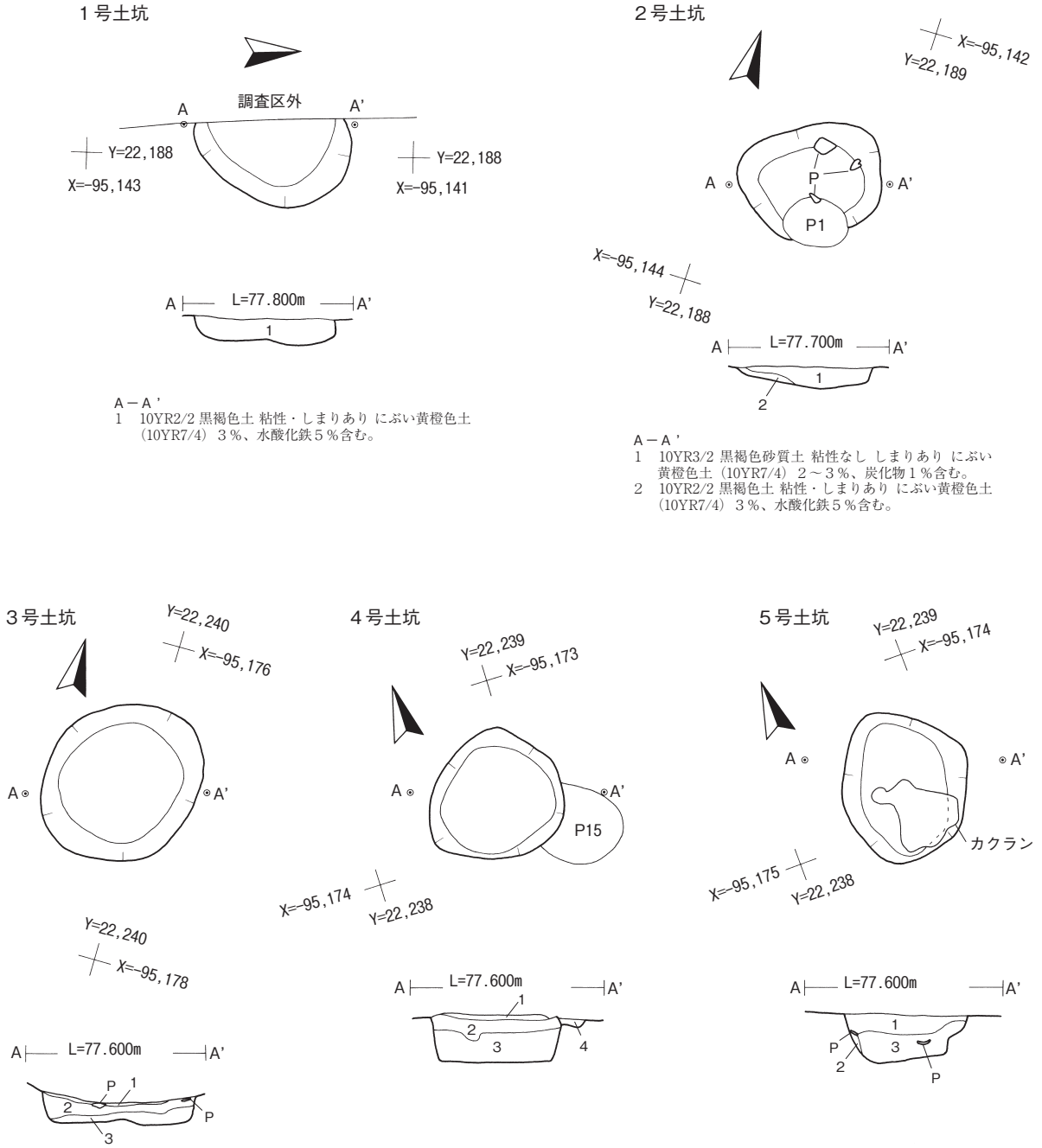
（４）溝　　跡

調査区全体で１条検出した。

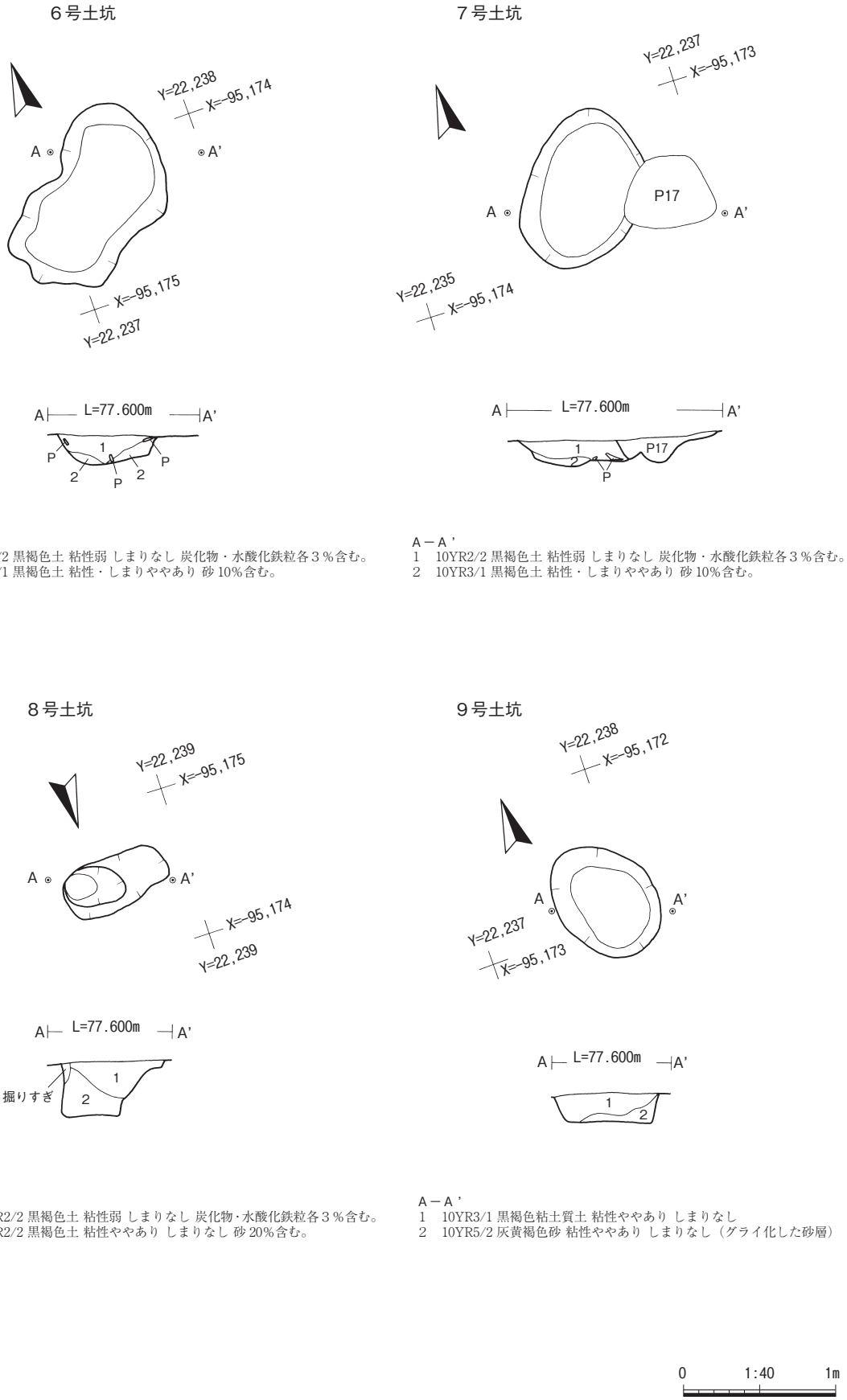
１号溝跡（第34図、写真図版30）
＜位置・検出・重複関係＞　15～21Ｃに跨いで位置し、表土下のⅡ層で検出した。遺構の両端が遺構外へと延びる。重複する遺構はない。
＜規模・形態・方向＞　遺構の両端が調査区外へと延びているため全長は不明であるが、調査した部分では長さが約15m、上端幅161～192㎝、下端幅60～92㎝、方向は北東－南西でほぼ直線に延びる。両端部底面の比高差は約16㎝で、南西端側が低い。
＜埋土＞　埋土全体が黒～黒褐の色調で、上～中位はシルト、下位は粘土を主体とする。中～下位には灰黄褐色火山灰層が堆積する。
＜遺物＞　総量で926.19ｇ出土した。土器は43～46の４点を掲載した。43は底面、それ以外は埋土からの出土である。43・44・46は土師器、45は須恵器で器種は43・45は坏、44・46は台付坏である。器面調整は43～45は外面ロクロナデで内面は43・44にミガキが施されている。43～45の底部には回転糸切痕がある。石器は47～49の３点が埋土から出土した。器種は47・48が磨石で49が石鍬である。原材には47・48が奥羽山脈産の安山岩、49が北上山地の頁岩が使用されている。他には種実（桃）が埋土から148点出土した。
時期　埋土に十和田ａテフラが混入していることから９世紀末頃と考えられる。

（５）柱 穴 状 土 坑（第 35 ～ 37 図、写真図版 31 ～ 33）

17個検出した。いずれも竪穴住居跡・住居状遺構などに隣接する。Ｐ４は１号住居状遺構内、Ｐ５～Ｐ10は２号住居状遺構の内外に位置するが関連性が明確でなかったため、単独の遺構として扱った。


1号土坑
調査区外
A
A'
Y=22,188
X=-95,143
Y=22,188
X=-95,141
A
L=77.800m
A'
1
A－A'
1　10YR2/2 黒褐色土 粘性・しまりあり にぶい黄橙色土（10YR7/4）３％、水酸化鉄５％含む。
2号土坑
X=-95,142
Y=22,189
A
P
A'
P1
X=-95,144
Y=22,188
A
L=77.700m
A'
1
2
A－A'
1　10YR3/2 黒褐色砂質土 粘性なし しまりあり にぶい黄橙色土（10YR7/4）２～３％、炭化物１％含む。
2　10YR2/2 黒褐色土 粘性・しまりあり にぶい黄橙色土（10YR7/4）３％、水酸化鉄５％含む。
3号土坑
Y=22,240
X=-95,176
A
A'
Y=22,240
X=-95,178
A
L=77.600m
A'
P
1
2
P
3
A－A'
1　10YR2/1 黒色土 粘性あり しまりなし 焼土３％、炭化物粒３％含む。
2　10YR4/2 灰黄褐色土 粘性・しまりなし 焼土・炭化物粒各１％含む。
3　10YR3/1 黒褐色土 粘性あり しまりややあり 焼土・炭化物粒各１％含む。
4号土坑
Y=22,239
X=-95,173
A
A'
P15
X=-95,174
Y=22,238
A
L=77.600m
A'
1
2
3
4
A－A'
1　10YR2/1 黒色粘土質土 粘性・しまりややあり 炭化材（層）30％含む。
2　10YR3/1 黒褐色粘土質土 粘性・しまりややあり 砂10％含む。
3　10YR3/1 黒褐色粘土質土 粘性ややあり しまりなし 砂20％含む。
4　10YR3/1 黒褐色粘土質土 粘性・しまりややあり 砂５％含む。
5号土坑
Y=22,239
X=-95,174
A
A'
カクラン
X=-95,175
Y=22,238
A
L=77.600m
A'
1
P
3
2
P
A－A'
1　10YR2/2 黒褐色土 粘性弱 しまりなし 炭化物・水酸化鉄粒各３％含む。
2　10YR3/1 黒褐色土 粘性・しまりややあり 砂10％含む。
3　10YR3/1 黒褐色粘土質土 粘性ややあり しまりなし 砂20％含む。
0
1:40
1m

第32図　１～５号土坑



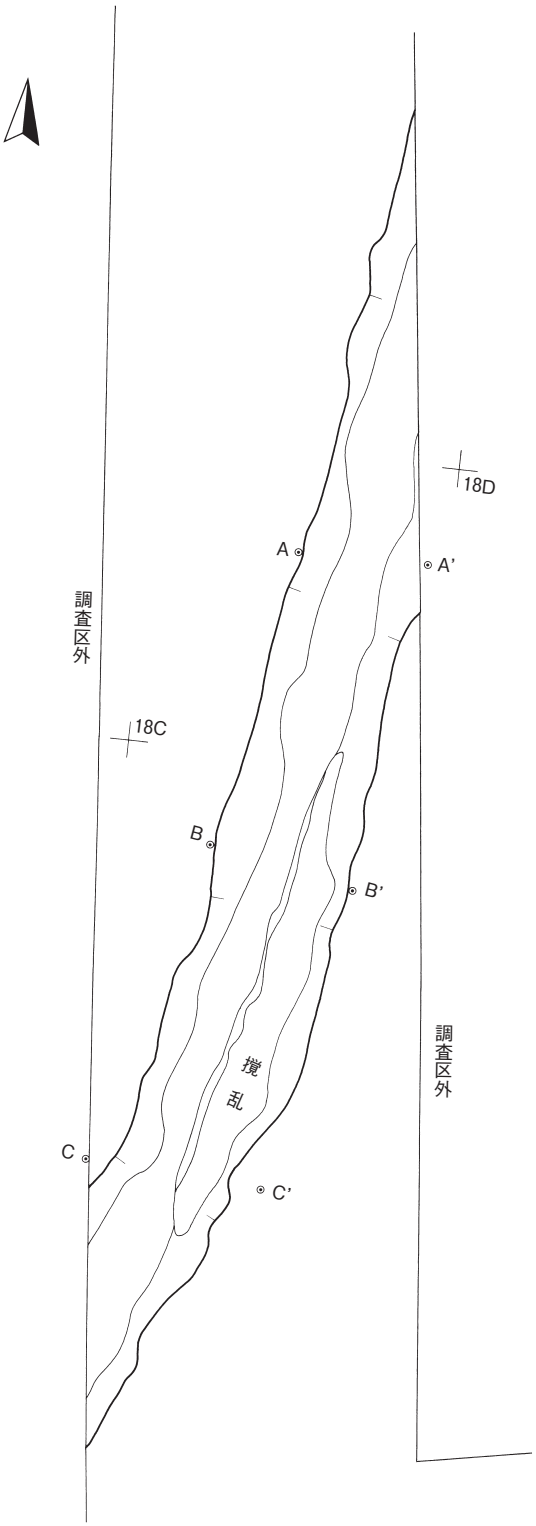
A－A'
1　10YR2/2 黒褐色土 粘性弱 しまりなし 炭化物・水酸化鉄粒各３％含む。
2　10YR3/1 黒褐色土 粘性・しまりややあり 砂 10％含む。

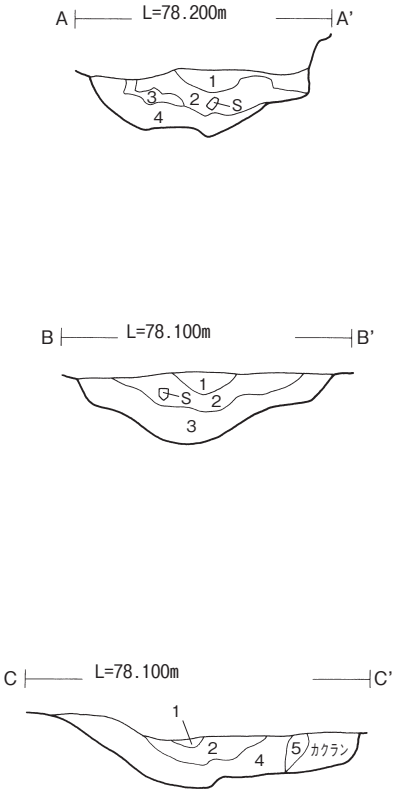
A－A'
1　10YR2/2 黒褐色土 粘性弱 しまりなし 炭化物・水酸化鉄粒各３％含む。
2　10YR3/1 黒褐色土 粘性・しまりややあり 砂 10％含む。

A－A'
1　10YR2/2 黒褐色土 粘性弱 しまりなし 炭化物･水酸化鉄粒各３％含む。
2　10YR2/2 黒褐色土 粘性ややあり しまりなし 砂 20％含む。

A－A'
1　10YR3/1 黒褐色粘土質土 粘性ややあり しまりなし
2　10YR5/2 灰黄褐色砂 粘性ややあり しまりなし（グライ化した砂層）

第33図　６～９号土坑

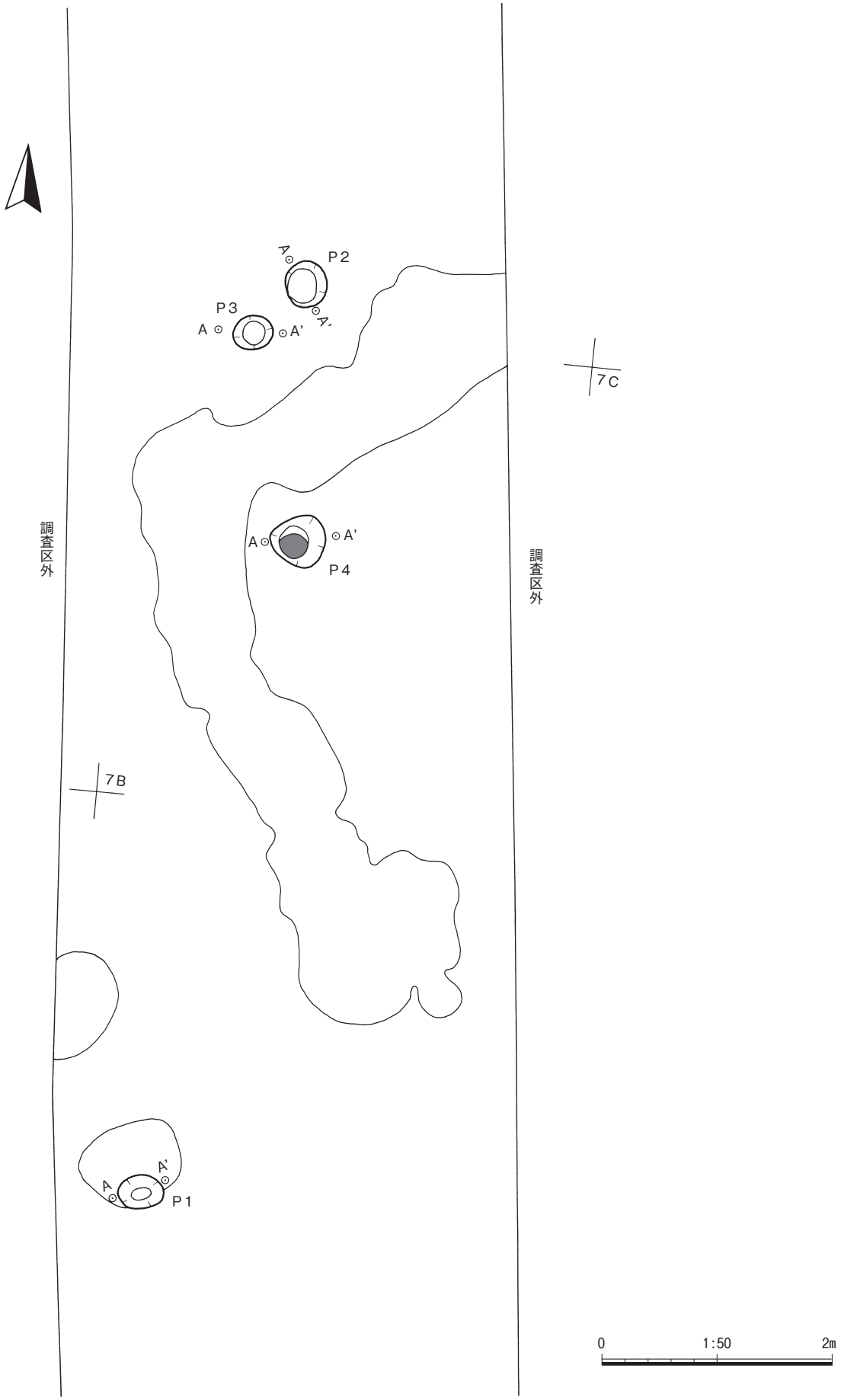




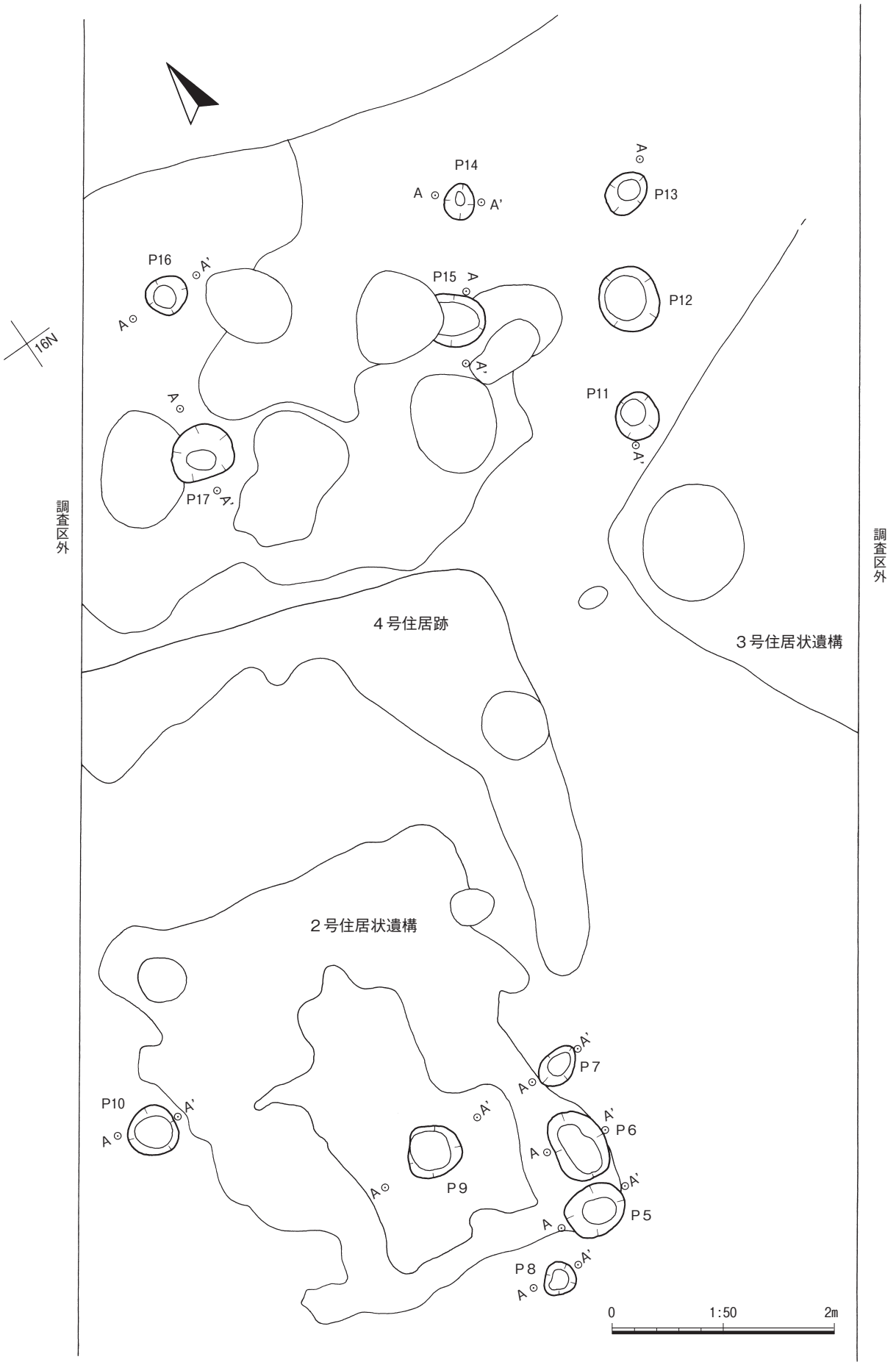
A－A'、B－B'、C－C'共通
1　10YR2/1 黒色土 粘性・しまりややあり
　炭化物粒１％含む。
2　10YR3/1 黒褐色土 粘性・しまりややあり
　炭化物粒・自然木片各３％含む。
3　10YR6/2 灰黄褐色火山灰 粘性・しまりなし
　細粒砂３％、To-a の流れ込みの可能性あり
4　10YR1.7/1 黒色粘土 粘性・しまりあり
　自然木片５％、炭化種子１％含む。
5　5BG6/1 青灰色粘土 しまりあり

断面 1:50　1m
0　平面 1:100　2m

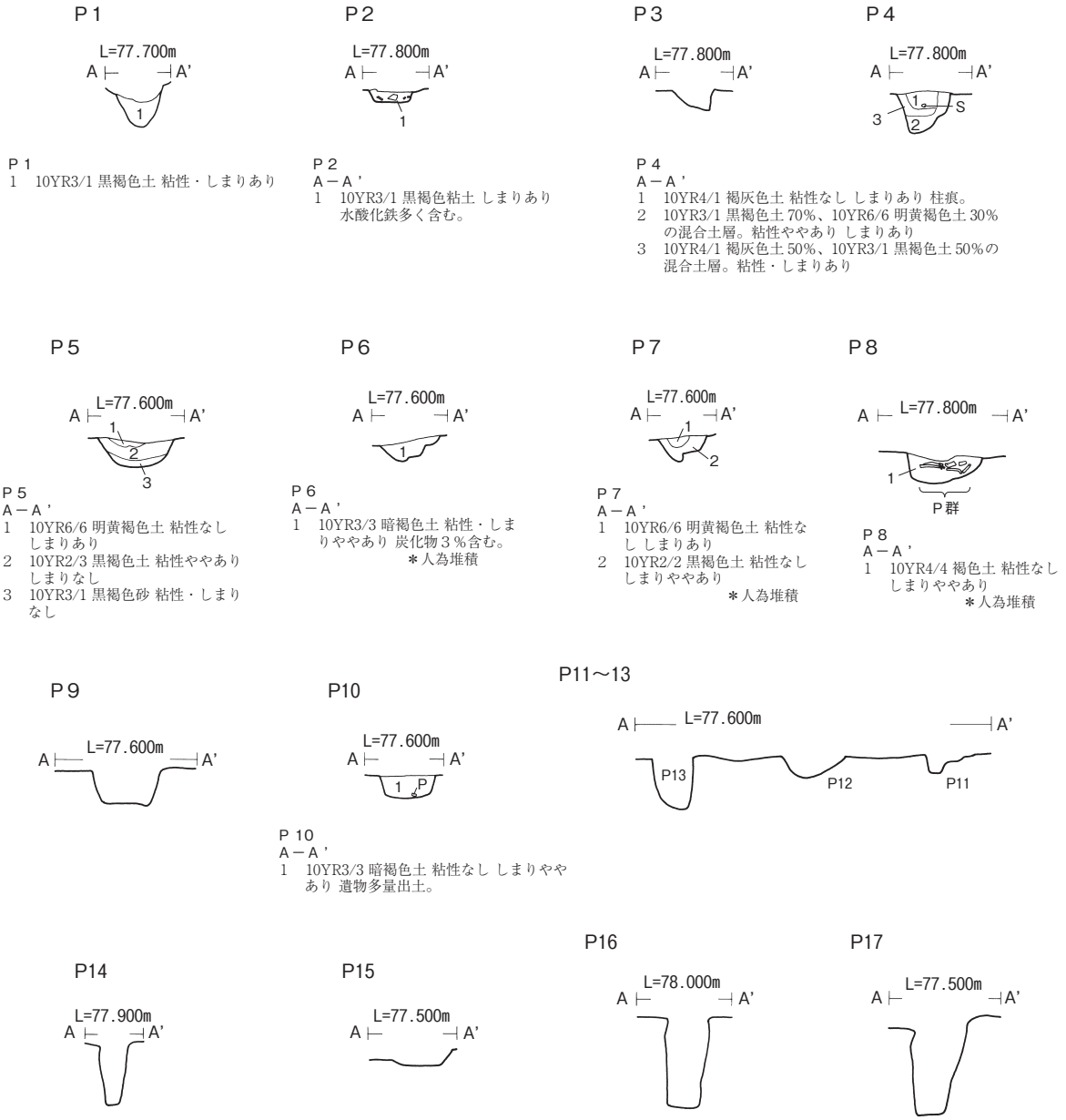
第34図　１号溝跡



第35図　柱穴状土坑（1）


16N
調査区外
調査区外
P14
A
A'
P13
P16
P15
P12
P11
P17
４号住居跡
３号住居状遺構
２号住居状遺構
P7
P10
P6
P9
P5
P8
0
1:50
2m

第36図　柱穴状土坑（２）



P１
1　10YR3/1 黒褐色土 粘性・しまりあり

P２
A－A'
1　10YR3/1 黒褐色粘土 しまりあり
水酸化鉄多く含む。

P４
A－A'
1　10YR4/1 褐灰色土 粘性なし しまりあり 柱痕。
2　10YR3/1 黒褐色土 70%、10YR6/6 明黄褐色土 30%
の混合土層。粘性ややあり しまりあり
3　10YR4/1 褐灰色土 50%、10YR3/1 黒褐色土 50%の
混合土層。粘性・しまりあり

P５
A－A'
1　10YR6/6 明黄褐色土 粘性なし
しまりあり
2　10YR2/3 黒褐色土 粘性ややあり
しまりなし
3　10YR3/1 黒褐色砂 粘性・しまり
なし

P６
A－A'
1　10YR3/3 暗褐色土 粘性・しま
りややあり 炭化物３%含む。
＊人為堆積

P７
A－A'
1　10YR6/6 明黄褐色土 粘性な
し しまりあり
2　10YR2/2 黒褐色土 粘性なし
しまりややあり
＊人為堆積

P８
A－A'
1　10YR4/4 褐色土 粘性なし
しまりややあり
＊人為堆積

P１０
A－A'
1　10YR3/3 暗褐色土 粘性なし しまりやや
あり 遺物多量出土。

第37図　柱穴状土坑（３）

第４表　柱穴状土坑一覧表

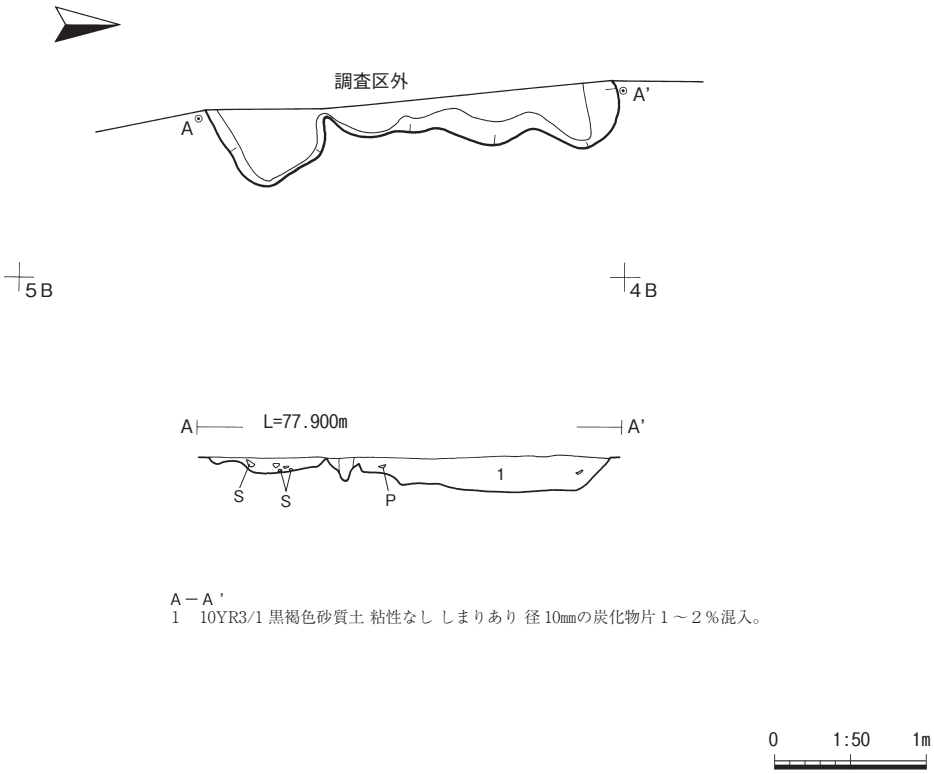
P. No.	径 (cm)	深さ (cm)	備　　考
1	41 × 30	30	
2	41 × 36	8	50 が出土
3	36 × 30	15	
4	48 × 46	31	
5	54 × 44	21	2 号住居状遺構と重複、51 が出土
6	65 × 48	14	2 号住居状遺構と重複
7	42 × 28	18	
8	32 × 29	11	52 が出土
9	52 × 50	24	2 号住居状遺構と重複、53 が出土

P. No.	径 (cm)	深さ (cm)	備　　考
10	46 × 46	17	54 が出土
11	42 × 40	15	
12	61 × 54	16	
13	42 × 33	38	
14	32 × 28	44	55 が出土
15	48 × (38)	6	4 号土坑と重複
16	40 × 35	66	
17	58 × 49	64	7 号土坑と重複、56 が出土

（6）性格不明遺構

調査区全体で１基検出した。不整な形状と遺構の大半が調査区外へと延びるため、詳細は不明である。竪穴住居跡の貼床である可能性が考えられる。

１号性格不明遺構（第38図、写真図版34）
＜位置・検出・重複関係＞　５Ａグリッドに位置し、表土下のⅡ層で検出した。遺構の西側が遺構外へと延びる。重複する遺構はない。
＜規模・形態・方向＞　遺構の西側が調査区外へと延びているため全体の規模は不明であるが、調査した部分では南北270cm、東西50cm、深さは４～20cmで底面は凸凹である。
＜埋土＞　埋土全体が黒褐色砂質土で、径10mmほどの炭化物粒が少量混入している。
＜遺物＞　総量で421.06ｇの土器が出土した。いずれも小破片で図化には至らなかった。
時期　出土した遺物から９世紀末頃と考えられる。



第38図　１号性格不明遺構

７　遺構外出土遺物

土器

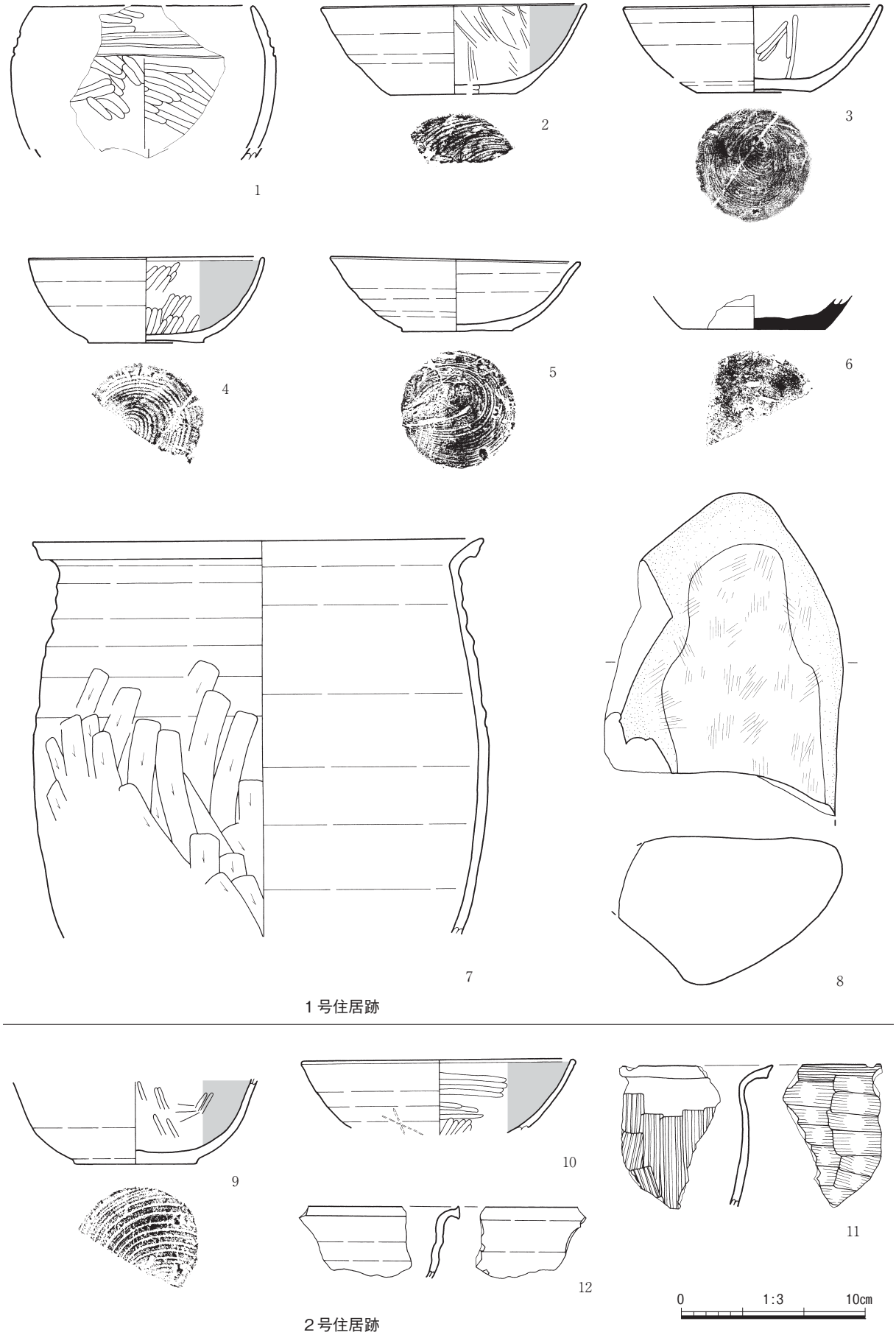
総量で41341.53ｇ出土した。内訳は土師器が35571.41ｇ（86％）、須恵器が5770.12ｇ（14％）で遺構外出土土器は2788.19ｇで総量に占める割合は６％と少ない。掲載した遺構外出土土器は土師器坏３点（22～24）で遺構の集中する16Ｎグリッドの掘り込み状の凹みから出土した。いずれも器面調整は外面ロクロナデ、内面は23・24がロクロナデ、22がミガキで黒色処理が施されている。底部の切り離し技法は22・23が回転糸切、24は摩滅により不明である。

陶器

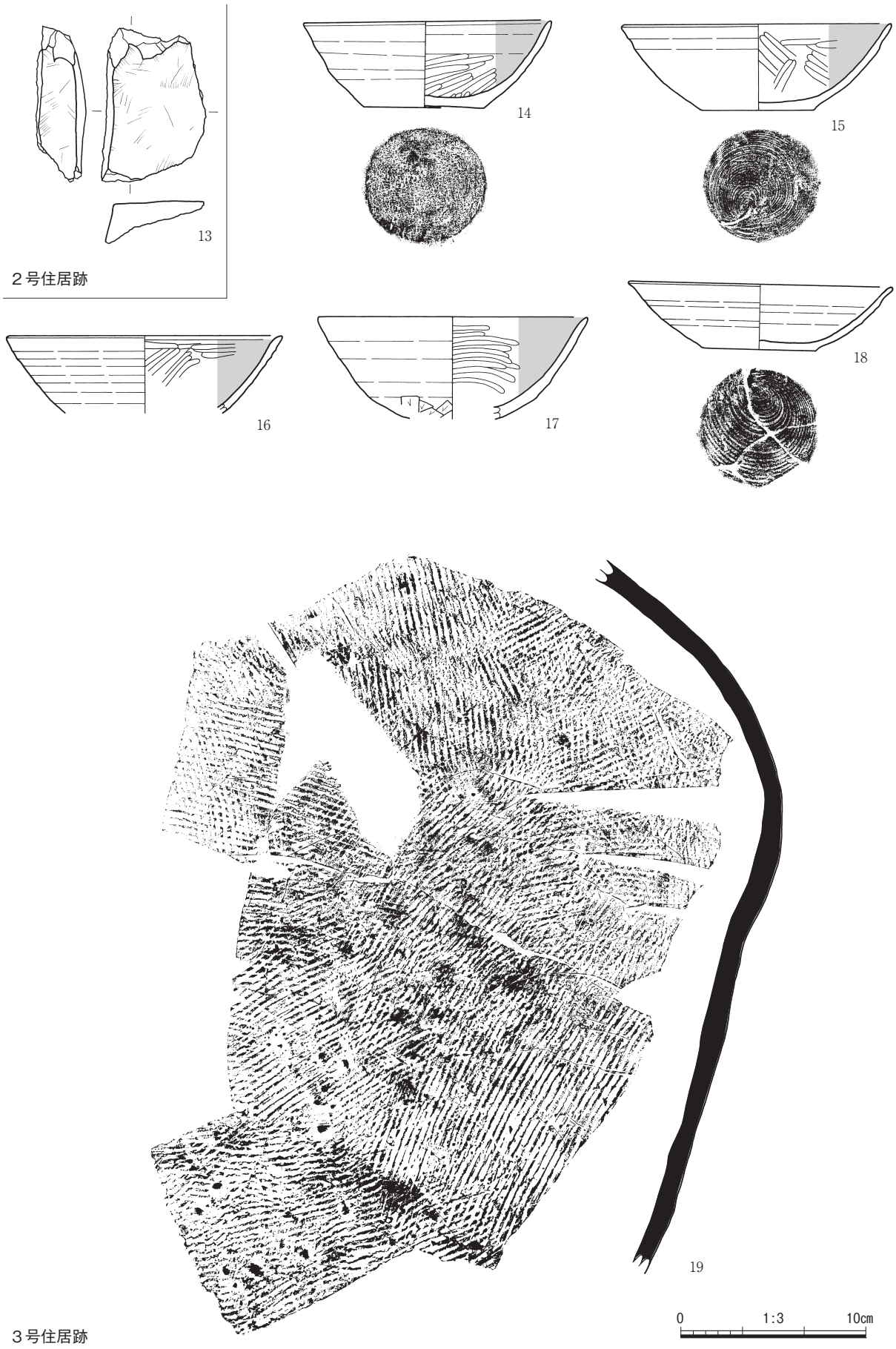
８Ｂグリッドの Ⅱ 層から愛知県猿投窯産の緑釉陶器が１点出土した。器種は埦で口縁部破片である。

瓦

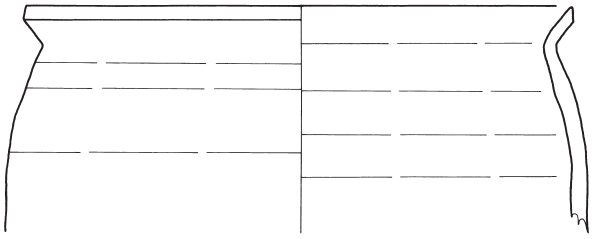
16Ｏグリッドの旧河道埋土から平瓦の破片１点が出土した。凸面にＬ６本の縄目タタキ痕、凹面に布目が残る。９世紀代の遺物と考えられる。



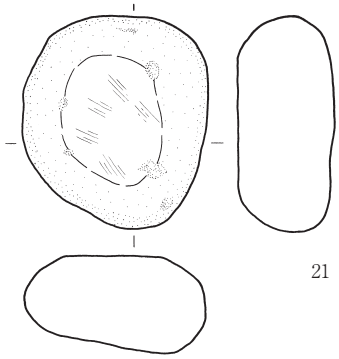
第39図　遺構内出土遺物１



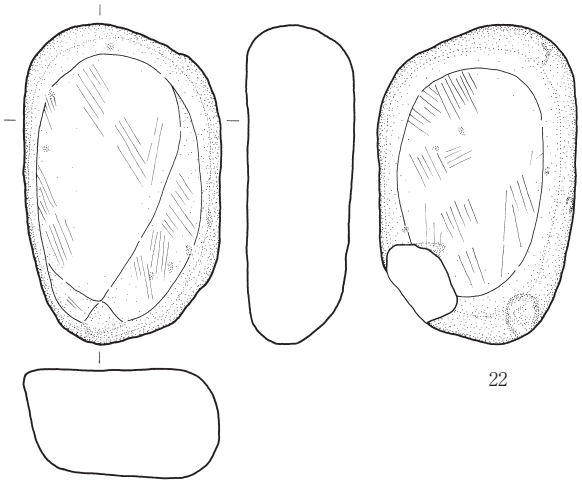
第40図　遺構内出土遺物２



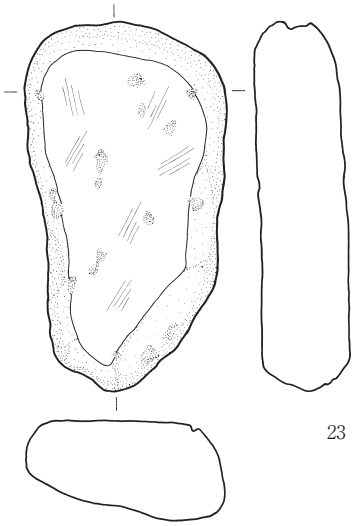
20



21

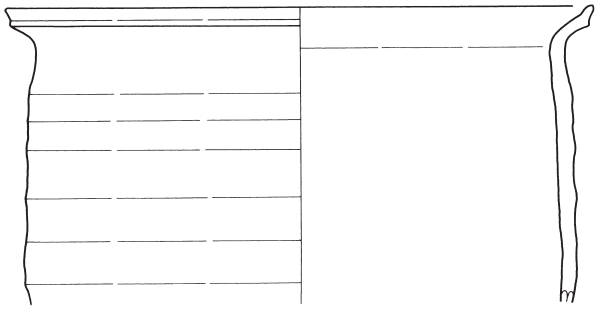


22



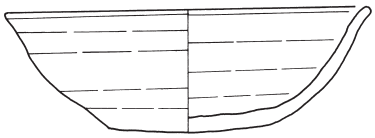
23

３号住居跡

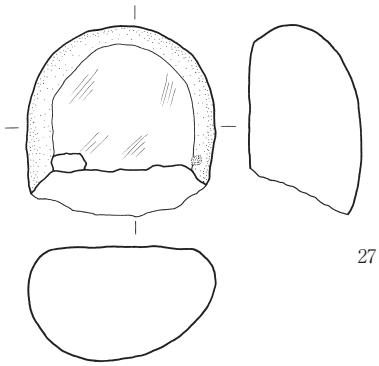


24

４号住居跡

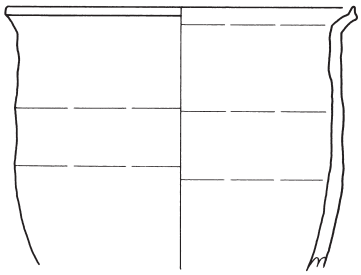


25



27

２号住居状遺構

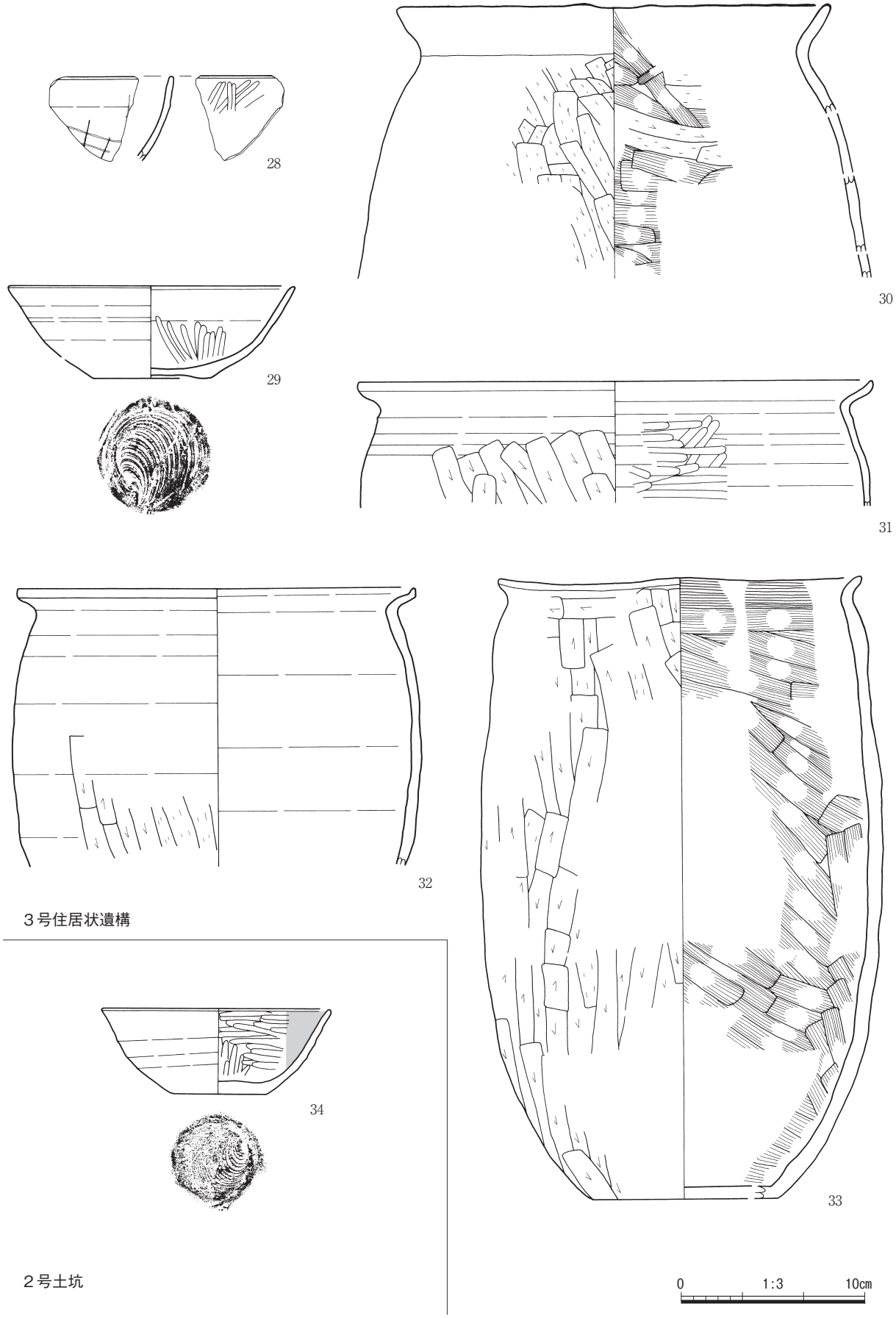


26

１号住居状遺構

0　1:3　10cm

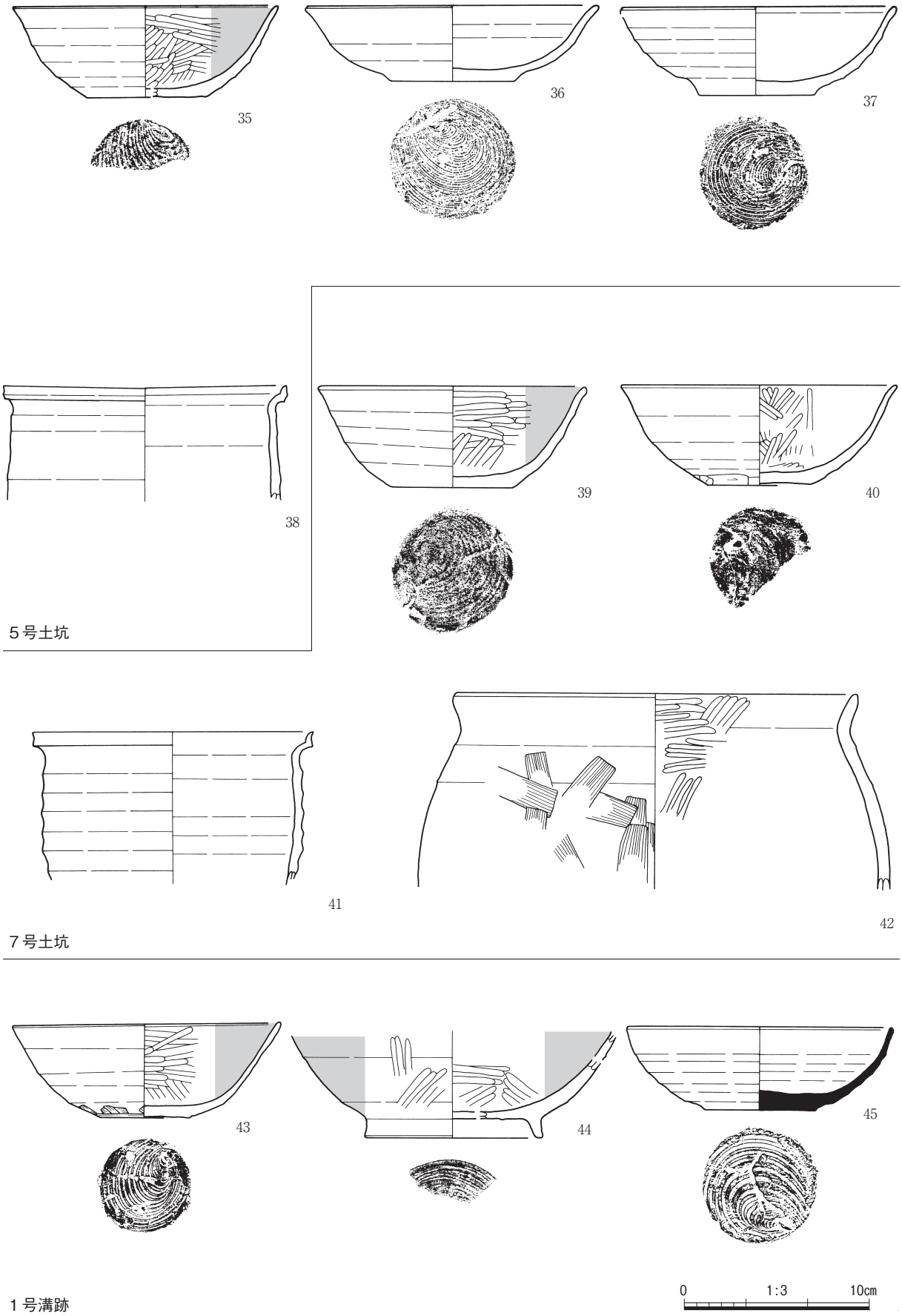
第41図　遺構内出土遺物３



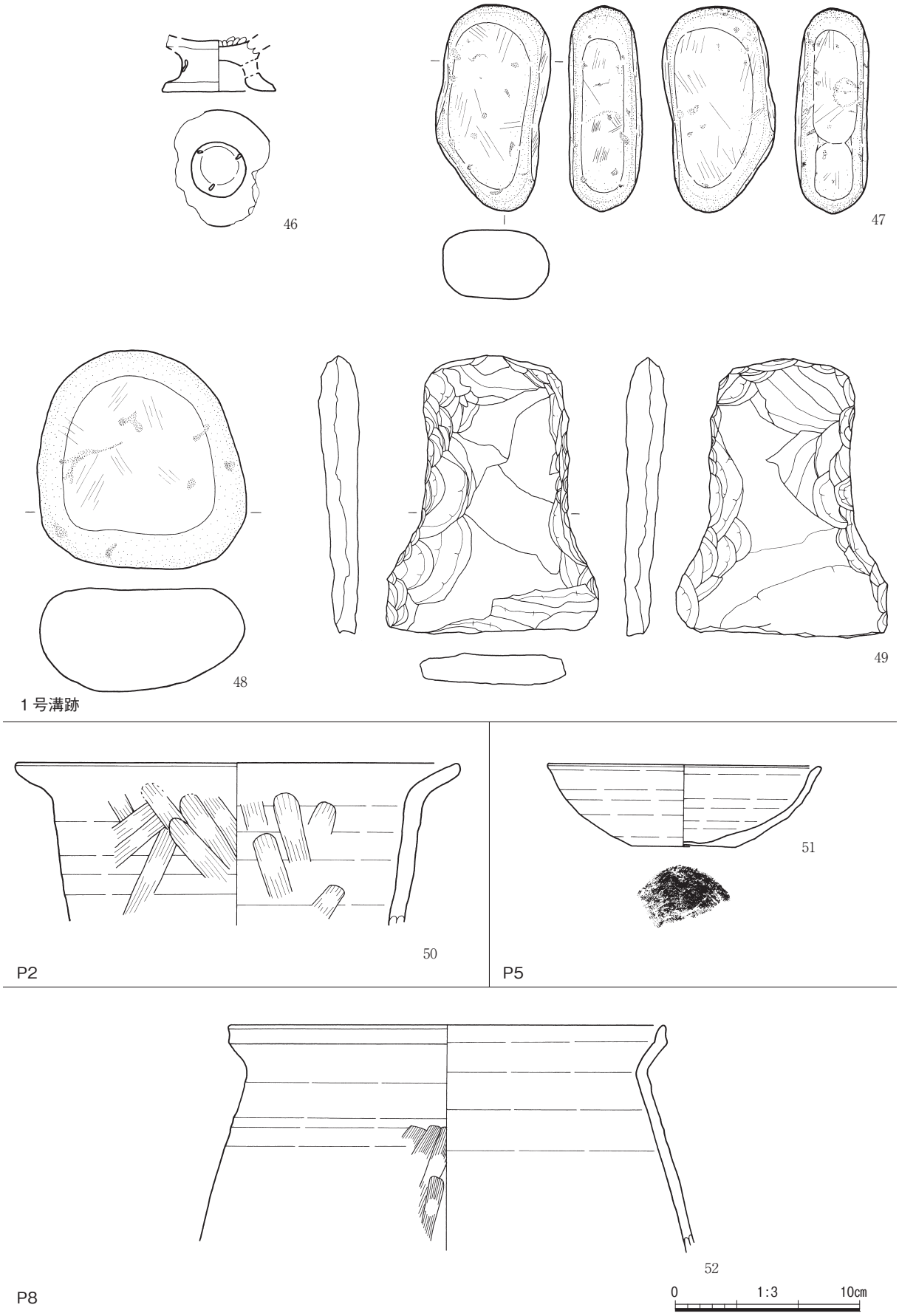
３号住居状遺構

２号土坑

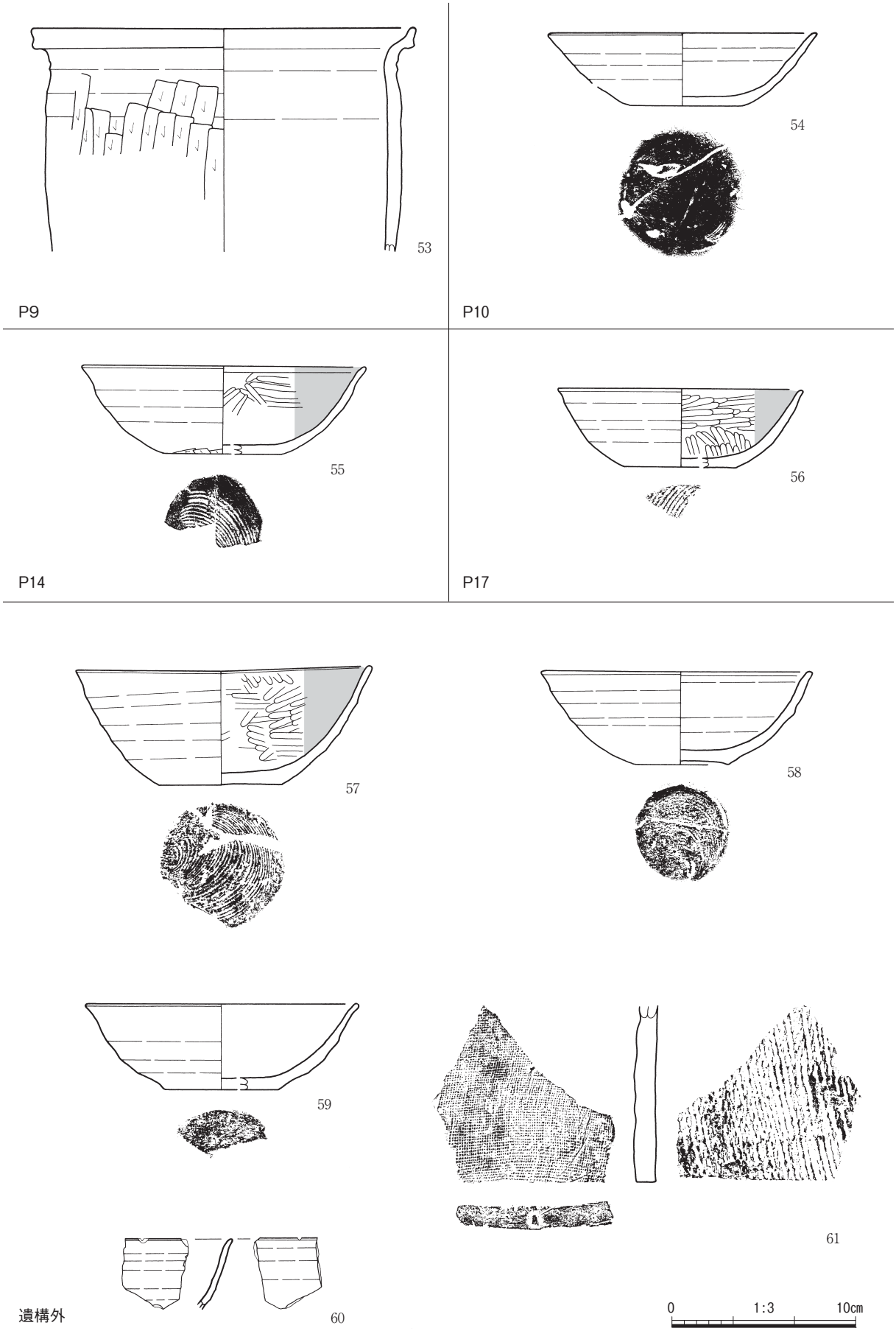
第42図　遺構内出土遺物４



第43図　遺構内出土遺物5



第44図　遺構内出土遺物６



第45図　遺構内出土遺物７、遺構外出土遺物

第５表　土器観察表

№.	出土地点	層位	種類	器種	部位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	外面調整	内面調整	底部	備考	図版	写図
1	1 号住居跡 - カマド	燃焼部	土師器	鉢	口縁～胴部	(11.8)	(8.1)		口縁部沈線文、ミガキ	ミガキ、黒色処理			39	35
2	1 号住居跡 - カマド	燃焼部	土師器	坏	口縁～底部	(14.6)	4.8	(6.8)	ロクロナデ	ミガキ、黒色処理	回転糸切		39	35
3	1 号住居跡	床面	土師器	坏	胴～底部	13.6	4.3	6.8	ロクロナデ	ミガキ	回転糸切		39	35
4	1 号住居跡	埋土	土師器	坏	胴～底部	(13.1)	4.6	(6.4)	ロクロナデ	ミガキ、黒色処理	回転糸切		39	35
5	1 号住居跡	燃焼部	土師器	坏	口縁～底部	13.8	4.1	6.2	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切		39	35
6	1 号住居跡	埋土	須恵器		底部	—	—	(7.8)	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラケズリによる再調整	底部切り離し技法は不明	39	35
7	1 号住居跡	貼床土	土師器	甕	口縁～胴部	(25.0)	(21.3)		口～胴上位：ロクロナデ 胴下半：ヘラケズリ	ロクロナデ	—		39	35
9	2 号住居跡	貼床土	土師器	坏	胴～底部	—	(4.5)	6.8	ロクロナデ	ロクロナデ、黒色処理	回転糸切		39	35
10	2 号住居跡 -Pit2	埋土	土師器	坏	口縁～胴部	(14.9)	(3.7)	—	ロクロナデ	ロクロナデ、黒色処理	—	器体外面に「×」の刻線	39	35
11	2 号住居跡 -Pit7	埋土	土師器	甕	口縁～胴部		(7.7)		ハケメ	ヘラナデ			39	35
12	2 号住居跡 -Pit12	埋土	土師器	甕	口縁～胴部		(3.8)		ロクロナデ	ロクロナデ			39	35
14	3 号住居跡	貼床土	土師器	坏	口縁～底部	13.5	4.8	6.5	ロクロナデ	ミガキ、黒色処理	回転糸切？、摩滅		40	35
15	3 号住居跡	貼床土	土師器	坏	口縁～底部	14.2	4.6	6.2	ロクロナデ	ミガキ、黒色処理	回転糸切		40	35
16	3 号住居跡 -Pit1	底面	土師器	坏	口縁～胴部	(15.2)	(4.1)		ロクロナデ	ミガキ、黒色処理	—		40	36
17	3 号住居跡 -Pit1	埋土	土師器	坏	口縁～胴部	(14.6)	(5.5)		ロクロナデ　胴下部：ヘラケズリ	ミガキ、黒色処理			40	36
18	3 号住居跡 カマド付近	埋土	土師器	坏	口縁～底部	(14.6)	3.5	6.2	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切		40	36
19	3 号住居跡	埋土	須恵器	甕	胴部				タタキ				40	36
20	3 号住居跡 カマド	埋土	土師器	甕	口縁～胴部	(22.2)	(9.0)	—	ロクロナデ	ロクロナデ	—		41	36
24	4 号住居跡 -Pit1	埋土	土師器	甕	口縁～胴部	(23.4)	(11.7)	—	ロクロナデ	ロクロナデ			41	36
25	1 号住居状遺構	貼床土	土師器	坏	口縁～底部	14.8	5.0	6.2	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切		41	36
26	1 号住居状遺構	貼床土	土師器	甕	口縁～胴部	(14.0)	(10.4)		ロクロナデ	ロクロナデ			41	36
28	3 号住居状遺構 -Pit1	埋土	土師器	坏	口縁～胴部				ロクロナデ	ミガキ	—		42	36
29	3 号住居状遺構 -Pit1	貼床土	土師器	坏	口縁～底部	(15.4)	5.0	6.2	ロクロナデ	ミガキ	回転糸切		42	36
30	3 号住居状遺構 -Pit1	貼床土	土師器	甕	口縁～胴部	(23.6)	(14.6)	—	口縁：ヨコナデ 胴部：ケズリ	口縁：ヨコナデ 胴部：ヘラナデ、ヘラケズリ	—		42	37
31	3 号住居状遺構 -Pit1	貼床土	土師器	甕	口縁～胴部	(27.6)	(6.8)	—	口縁：ロクロナデ 胴部下位：ケズリ	ミガキ	—		42	37
32	3 号住居状遺構	貼床土	土師器	甕	口縁～胴部	(21.5)	(15.0)	—	口縁：ロクロナデ 胴部下位：ケズリ	ロクロナデ			42	37
33	3 号住居状遺構	貼床土	土師器	甕	口縁～胴部	(19.6)	(10.2)	—	口縁：ヨコナデ 胴部：ケズリ	口縁：ヨコナデ 胴部：ヘラナデ			42	37
34	2 号土坑	底面	土師器	坏	口縁～底部	12.5	4.6	5.0	ロクロナデ	ミガキ、黒色処理	回転糸切		42	37
35	5 号土坑	２層	土師器	坏	口縁～底部	(14.2)	4.9	(6.2)	ロクロナデ	ミガキ、黒色処理	回転糸切		43	37
36	5 号土坑	２層	土師器	坏	口縁～底部	(15.8)	4.0	6.6	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切		43	37
37	5 号土坑	２層	土師器	坏	口縁～底部	(14.9)	4.7	6.2	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切		43	37
38	5 号土坑	埋土	土師器	甕	口縁～胴部	15.2	(6.1)		ロクロナデ	ロクロナデ			43	37
39	7 号土坑	埋土	土師器	坏	口縁～底部	14.5	5.4	6.4	ロクロナデ	ミガキ、黒色処理	回転糸切		43	37

No.	出土地点	層位	種類	器種	部位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	外面調整	内面調整	底部	備考	図版	写図
40	7号土坑	埋土	土師器	坏	口縁～底部	(15.0)	5.4	5.6	口縁：ロクロナデ 胴下部：ケズリ	ミガキ	回転糸切、摩滅		43	37
41	7号土坑	埋土	土師器	甕	口縁～胴部	(15.0)	(8.2)	—	ロクロナデ	ロクロナデ			43	38
42	7号土坑	埋土	土師器	甕	口縁～胴部	(21.6)	(10.4)	—	口縁：ロクロナデ 胴部上位：ヘラナデ	ミガキ			43	38
43	1号溝跡	底面	土師器	坏	口縁～底部	14.4	5.2	4.8	口縁：ロクロナデ 胴下部：ヘラナデ	ミガキ、黒色処理	回転糸切		43	38
44	1号溝跡 B-B'ベルト	4層	土師器	台付坏	胴～台部		(5.7)	(9.4)	ロクロナデ、ミガキ、黒色処理	ミガキ、黒色処理	回転糸切	両面黒色処理	43	38
45	1号溝跡	埋土	須恵器	坏	口縁～底部	(14.4)	(10.4)	—	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切		43	38
46	1号溝跡 B-B'ベルト	埋土	土師器	台付坏？	台部		(2.5)	6.2	ナデ	ナデ		台部に3箇所の透かしあり	44	38
50	P2	埋土	土師器	甕	口縁～胴部	(24.0)	(8.7)	—	口縁：ロクロナデ 胴部上位：ヘラナデ	口縁:ロクロナデ、 胴部：ヘラナデ			44	38
51	P5	埋土下部	土師器	坏	口縁～底部	(14.8)	4.5	(5.6)	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切？、摩滅		44	39
52	P8	埋土	土師器	甕	口縁～胴部	(23.2)	(12.1)	—	口縁：ロクロナデ 胴部上位：ヘラナデ	ロクロナデ			44	39
53	P9	埋土	土師器	甕	口縁～胴部	(20.8)	(12.0)	—	口縁：ロクロナデ 胴部上位：ケズリ	ロクロナデ			45	39
54	P10	埋土	土師器	坏	口縁～底部	(14.6)	3.9	6.6	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切後、一部ヘラナデ		45	39
55	P14	埋土	土師器	坏	口縁～底部	(15.4)	4.7	6.2	口縁：ロクロナデ 胴部下部：ケズリ	ミガキ、黒色処理	回転糸切、一部ケズリ		45	39
56	P17	埋土	土師器	坏	口縁～底部	(13.2)	4.2	(6.0)	ロクロナデ	ミガキ、黒色処理	回転糸切		45	39
57	16 N	埋土	土師器	坏	口縁～底部	16.2	6.4	6.8	ロクロナデ	ミガキ、黒色処理	回転糸切		45	39
58	16 N	埋土	土師器	坏	口縁～底部	14.7	5.0	5.0	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切		45	39
59	16 N	埋土	土師器	坏	口縁～底部	(14.8)	4.5	(6.2)	ロクロナデ	ロクロナデ	摩滅		45	39

第６表　石器観察表

No.	器種	出土地点	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石質・産地・時代	備考	図版	写図
8	磨石	1号住居跡 - 煙道部	埋土	(17.2)	(12.9)	7.9	2252.7	デイサイト・奥羽山脈・新生代新第三紀		39	35
13	砥石	2号住居跡	埋土	(8.3)	(5.3)	(2.3)	90.7	頁岩・奥羽山脈・新生代新第三紀		40	35
21	磨石	3号住居跡	1層	8.4	7.2	3.9	355.7	デイサイト・奥羽山脈・新生代新第三紀		41	36
22	磨石	3号住居跡	1層	12.6	7.8	4.3	734.7	安山岩・奥羽山脈・新生代新第三紀		41	36
23	磨石	3号住居跡	1層	14.6	8.0	3.9	735.3	デイサイト・奥羽山脈・新生代新第三紀		41	36
27	磨石	2号住居状遺構	埋土	(7.6)	7.5	4.6	361.5	安山岩・奥羽山脈・新生代新第三紀		41	36
47	磨石	1号溝跡Ａ－Ａ'ベルト	2層	11.0	5.7	3.7	417.9	安山岩・奥羽山脈・新生代新第三紀		44	38
48	磨石	1号溝跡Ａ－Ａ'ベルト	2層	11.6	10.9	5.4	1053.0	安山岩・奥羽山脈・新生代新第三紀		44	38
49	石鍬？	1号溝跡	埋土上位	(14.7)	11.3	1.9	427.2	頁岩・北上山地・古・中生代		44	38

＊（　）は残存値。

第７表　陶器観察表

No.	出土地点	層位	種類	器種	部位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	外面調整	内面調整	重量 (g)	備考	図版	写図
60	８Ｂ	Ⅱ層	灰釉陶器	埦	口縁～胴部	―	(3.8)	―	ロクロナデ	ロクロナデ	7.7	猿投窯	45	39

第８表　瓦観察表

No.	出土地点	層位	種類	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	調整		色調		胎土	図版	写図
								凹面	凸面	凹面	凸面			
61	16 O	旧河道埋土	平瓦	(9.4)	(9.5)	1.3	145.09	布目	縄目タタキ Ｌ６本	赤灰 (2.5YR4/1)	褐灰 (10YR5/1)	4～5㎜の礫1%、2㎜以下の砂粒５～７%含む。	45	39

第９表　出土土器重量一覧表

遺構内

出土地点	土師器	須恵器	合計
1号住居跡	4472.89		4472.89
2号住居跡	5536.08	65.79	5601.87
3号住居跡	4136.35	1393.90	5530.25
4号住居跡	731.51	2.56	734.07
1号住居状遺構	1968.22	143.82	2112.04
2号住居状遺構	2985.39	5.01	2990.40
3号住居状遺構	6549.81	324.90	6874.71
1号土坑	58.15		58.15
2号土坑	334.98		334.98
3号土坑	447.14	681.09	1128.23
4号土坑	205.01		205.01
5号土坑	832.61		832.61
6号土坑	152.09		152.09
7号土坑	827.93		827.93
9号土坑	266.09		266.09
1号溝跡	851.26	74.93	926.19
P2	209.85		209.85
P5	74.31		74.31
P6	290.89		290.89
P8	308.11	26.47	334.58
P10	194.66		194.66
P11	148.81		148.81
P12	5.25		5.25
P13	592.01		592.01
P14	55.75		55.75
P17	196.73		196.73
1号性格不明遺構	421.06		421.06
合計	32852.94	2718.47	35571.41

遺構外

出土地点	層位	土師器	須恵器	合計
1 A	検出面	128.45		128.45
3 B	Ⅱ層	318.37	6.67	325.04
5 B	Ⅱ層	60.45		60.45
6 B	Ⅱ層	60.78		60.78
7 B	Ⅱ層	15.73		15.73
8 B	Ⅱ層	76.45		76.45
9 B	Ⅱ層	11.78		11.78
11 B	Ⅱ層	31.72		31.72
12 B	Ⅱ層	18.00		18.00
15 N (旧河道)	埋土	401.66		401.66
16 N	Ⅰ層	300.75		300.75
16 N	Ⅱ層	1295.05		1295.05
16 O	Ⅱ層	371.02		371.02
17 M	Ⅱ層	486.41	20.75	507.16
17 N	Ⅱ層	46.65	3.86	50.51
17 O	Ⅱ層	133.24		133.24
17 P付近	撹乱	230.12		230.12
18 M	Ⅰ層	570.71		570.71
18 M	検出面	25.95		25.95
18 N	Ⅰ層	69.65		69.65
20 N	Ⅰ層	8.89		8.89
20 O	Ⅰ層		19.70	19.70
22 K	Ⅰ層		18.74	18.74
22 L	Ⅰ層	3.37		3.37
22 L	Ⅱ層	17.09		17.09
23 K	Ⅰ層	38.86		38.86
A区検出面		56.26		56.26
B区沢跡		293.80		293.80
B区排土	一括	358.60		358.60
B区	Ⅰ層	24.93		24.93
地点不明		245.66		245.66
合計		5700.40	69.72	5770.12

種類別	遺構内	遺構外	合計
土師器	32852.94	2718.47	35571.41
須恵器	5700.40	69.72	5770.12
小計	38553.34	2788.19	41341.53

＊単位はｇ

８　ま　と　め

本遺跡は奥州市胆沢区南都田字本木地内に所在し、胆沢扇状地の水沢段丘面に立地している。今回の調査は周知の遺跡範囲の約1.6％に過ぎず、調査成果はその一端に過ぎない。今回の調査で明らかになった事項を各時期ごとに本文中の補足も兼ねて述べていきたい。

地形

本文中にも記したが、調査前は水田・畑・農道などに利用されていた場所で、水田・畑地の部分については過去の造成に伴う工事で地形は本来の姿を失っている。周知の遺跡範囲は東西に長く、遺跡内でも水沢段丘高位面と低位面に南北に分かれ、今回の調査区は水沢段丘低位面にある。微高地とその谷間とによって形成されていることが明らかになった。今回の調査でも調査区北端に旧河道と思われる地形を確認した。また、南端の未舗装道路は湿地状の地形であったことが判った。

遺構

竪穴住居跡は４棟でいずれも、調査区域外へ遺構が延びたり、削平を受けているため、残存状況は良くないが、遺構の年代は出土遺物から９世紀代である。カマドは２号住居では削平のため確認できなかったが、他の３棟は東壁に設置されていた。他に住居状遺構３基、溝跡１条を検出した。性格不明遺構としたものも含め、いずれも出土遺物から９世紀代の遺構である。ただし、遺構の重複は２号住居跡・３号住居跡、３号土坑・３号住居状遺構に新旧関係がみられる。また、２号住居跡床面で検出した土坑19基の大半が、住居廃絶後に利用されたものと考えられる。４号住居跡北側にある４・６・７～９号土坑周辺は黒褐色土と褐色土の混合土が撹乱状に広がっており、竪穴住居跡の貼床の痕跡であった可能性も考えられる。

遺物

出土品の大半は遺構内から出土した土師器・須恵器の坏・甕の破片で、石器は金属製品の研磨用と考えられる砥石や磨石が住居等から出土している。また、遺構外からは灰釉陶器や瓦片など稀少な遺物が出土している。

総括

今回の調査では平安時代（９世紀後半～10世紀初頭頃）前半を中心とする遺構・遺物が見つかった。本遺跡の調査は平成６年に胆沢町教育委員会により、今回の調査箇所と隣接する箇所で調査が行われ、奈良～平安時代の集落跡が確認されている。今回の調査では前回の調査で見つかった奈良時代の遺構や中世の遺構・遺物は見つからなかったが、また、中世には葛西氏一族の柏山氏の家来の屋敷（要害館）があったという伝承があり、古来より、断続的に居住地として利用されてきた土地であることが明らかになっていた。ことが、特記される。また、本遺跡の南東に隣接して国指定遺跡の角塚古墳があるが、今回の調査で古墳時代の遺構・遺物は見つかっていない。

参考文献

佐々木いく子　1995 『要害遺跡』胆沢町埋蔵文化財調査報告書第26集　胆沢町教育委員会
島根県教育庁古代文化センター　2011 『平塚運一古代瓦コレクション資料集（２）』（島根県古代文化センター調査研究報告書44）
茨城県立歴史館　1994 『茨城における古代瓦の研究』（学術調査報告書４）

附編　自然科学分析

要害遺跡における放射性炭素年代（AMS 測定）

（株）加速器分析研究所

1　測定対象試料

要害遺跡は、岩手県奥州市胆沢区南都田字本木地内（北緯39°08′33″、東経141°05′24″付近）に所在し、胆沢扇状地内の水沢低位段丘に立地する（標高78～80m）。測定対象試料は、１号住居カマド燃焼面出土炭化物（１：IAAA-112567）、３号住居埋土（炭化物層）出土炭化物（２：IAAA-112568）の合計２点である（表１）。１が採取された１号住居カマド燃焼面からは９世紀代後半頃の土師器が出土している。２は３号住居床面直上に堆積した炭化物を多量に含む層の中から採取された。この遺構からは９世紀後半代と考えられる土師器、須恵器が出土している。

2　測定の意義

試料が採取された遺構の時代を明らかにする。

3　化学処理工程

（１）メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。
（２）酸-アルカリ-酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常１mol/ℓ（１M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い、0.001Mから１Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が１Mに達した時には「AAA」、１M未満の場合は「AaA」と表１に記載する。
（３）試料を燃焼させ、二酸化炭素（CO_2）を発生させる。
（４）真空ラインで二酸化炭素を精製する。
（５）精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト（C）を生成させる。
（６）グラファイトを内径１㎜のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

4　測定方法

加速器をベースとした^{14}C-AMS専用装置（NEC社製）を使用し、^{14}Cの計数、^{13}C濃度（13C/12C）、^{14}C濃度（14C/12C）の測定を行う。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOxⅡ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5　算出方法

（１）δ^{13}C は、試料炭素の^{13}C 濃度（^{13}C/^{12}C）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（表１）。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。

（２）^{14}C年代（Libby Age：yrBP）は、過去の大気中^{14}C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polach 1977）。^{14}C年代はδ^{13}Cによって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表１に、補正していない値を参考値として表２に示した。^{14}C年代と誤差は、下１桁を丸めて10年単位で表示される。また、^{14}C年代の誤差（±１σ）は、試料の^{14}C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

（３）pMC (percent Modern Carbon)は、標準現代炭素に対する試料炭素の^{14}C濃度の割合である。pMCが小さい（^{14}Cが少ない）ほど古い年代を示し、pMCが100以上（^{14}Cの量が標準現代炭素と同等以上）の場合Modernとする。この値もδ^{13}Cによって補正する必要があるため、補正した値を表１に、補正していない値を参考値として表２に示した。

（４）暦年較正年代とは、年代が既知の試料の^{14}C濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の^{14}C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、^{14}C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、１標準偏差（１σ＝68.2%）あるいは２標準偏差（２σ＝95.4%）で表示される。グラフの縦軸が^{14}C年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、δ^{13}C補正を行い、下一桁を丸めない^{14}C年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal09データベース（Reimer et al. 2009）を用い、OxCalv4.1較正プログラム（Bronk Ramsey 2009）を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表２に示した。暦年較正年代は、^{14}C年代に基づいて較正（calibrate）された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」（または「cal BP」）という単位で表される。

６　測　定　結　果

炭化物の^{14}C年代は、１号住居カマド燃焼面の１が1180±20yrBP、３号住居埋土（炭化物層）の２が1260±20yrBPである。暦年較正年代（１σ）は、１が782～887cal AD、２が691～774cal ADの間に各々複数の範囲で示される。１は９世紀代後半頃の土師器が伴うことと整合的な値である。２の遺構からも９世紀後半代の土器が出土しているが、１σ暦年代範囲は土器の時期よりも古く、２σ暦年代範囲でわずかに一致する部分が認められる結果である。

試料の炭素含有率はいずれも60%を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

表１

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	δ^{13}C (‰) (AMS)	δ^{13}C 補正あり	
						Libby Age（yrBP）	pMC (%)
IAAA-112567	1	１号住居　カマド燃焼面	炭化物	AAA	-25.80 ± 0.33	1,180 ± 20	86.32 ± 0.25
IAAA-112568	2	３号住居　埋土（炭化物層）	炭化物	AAA	-20.58 ± 0.50	1,260 ± 20	85.48 ± 0.26

[#4883]

表２

測定番号	δ ^{13}C 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	１σ暦年代範囲	２σ暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC （%）			
IAAA-112567	1,190 ± 20	86.18 ± 0.25	1,181 ± 23	782calAD - 789calAD (5.9%) 810calAD - 848calAD (32.3%) 853calAD - 887calAD (30.0%)	776calAD - 895calAD (92.8%) 925calAD - 937calAD (2.6%)
IAAA-112568	1,190 ± 20	86.26 ± 0.24	1,260 ± 24	691calAD - 750calAD (57.9%) 763calAD - 774calAD (10.3%)	671calAD - 783calAD (90.2%) 789calAD - 812calAD (4.2%) 846calAD - 855calAD (0.9%)

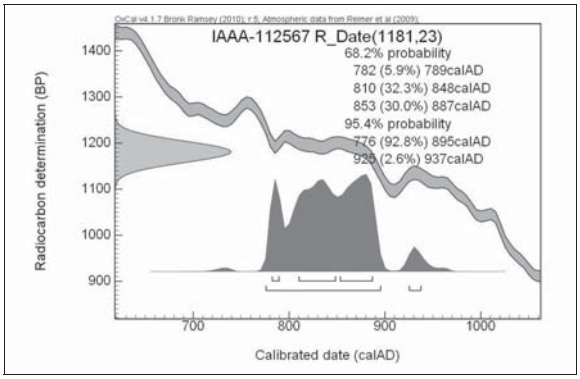
[参考値]

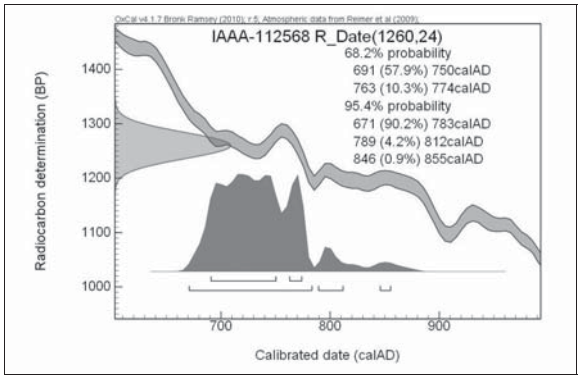
文献

Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of 14C data, Radiocarbon 19(3), 355-363

Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51(1), 337-360

Reimer, P.J. et al. 2009 IntCal09 and Marine09 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, Radiocarbon 51(4), 1111-1150





[参考]暦年較正年代グラフ

写　真　図　版

遺跡遠景・S→

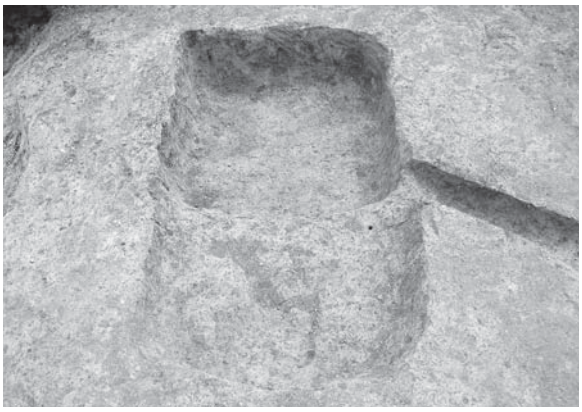
調査区全景（上が北）

写真図版１　航空写真

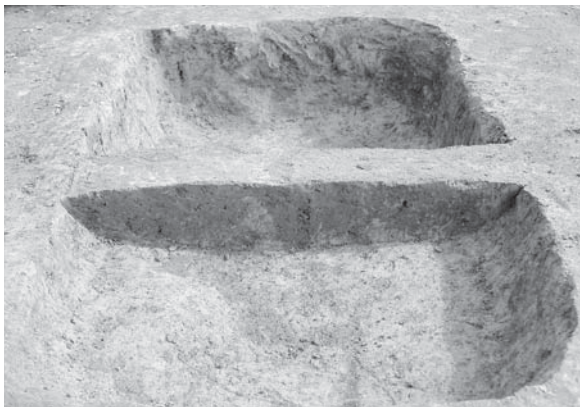
調査前風景・W→

基本土層・E→

写真図版２　調査前風景、基本土層



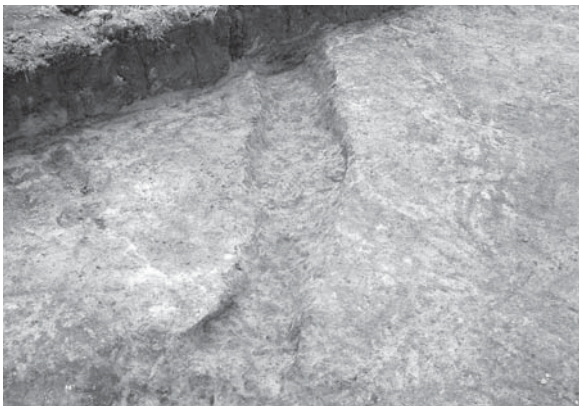
１号土坑完掘・Ｎ→



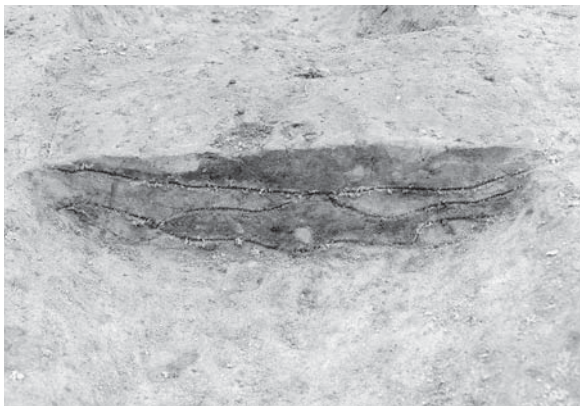
１号土坑断面・Ｎ→

２号土坑完掘・Ｗ→

２号土坑断面・Ｎ→



１号溝跡完掘・ＳＷ→



１号溝跡断面・ＳＷ→

２号溝跡完掘・ＳＥ→

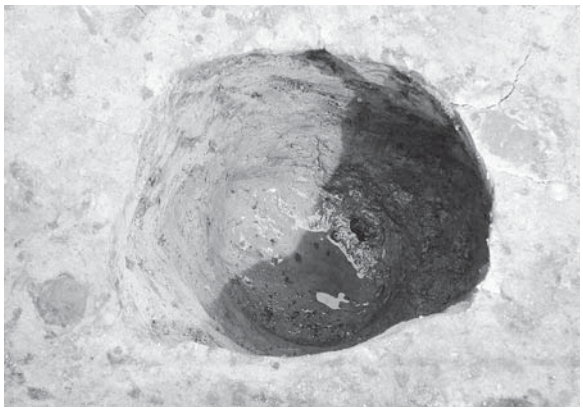
２号溝跡断面・ＳＥ→

写真図版３　１・２号土坑、１・２号溝跡

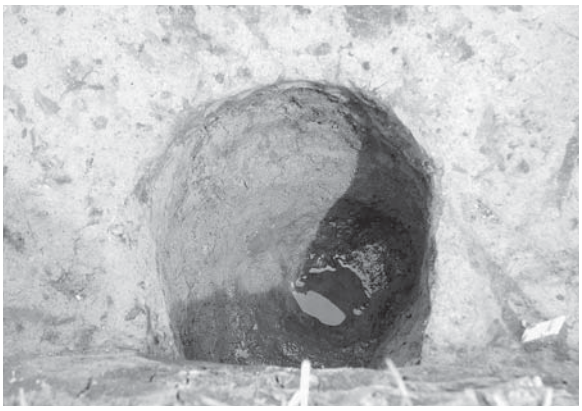
Ｐ１～３完掘・ＳＷ→

Ｐ５～17・19・22・23・25完掘・Ｅ→

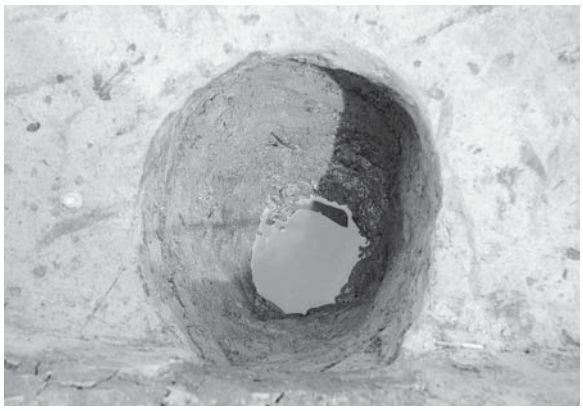
調査区東端部柱穴状土坑群・Ｓ→



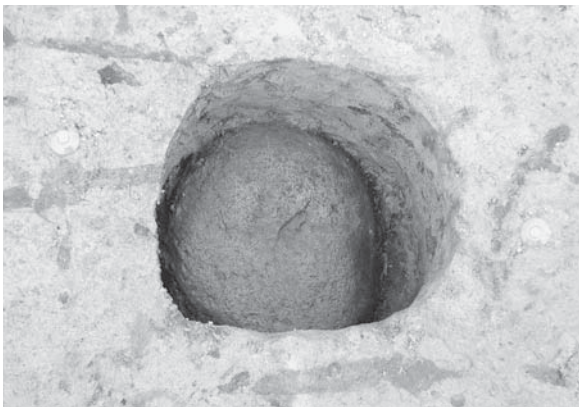
Ｐ５完掘・Ｓ→



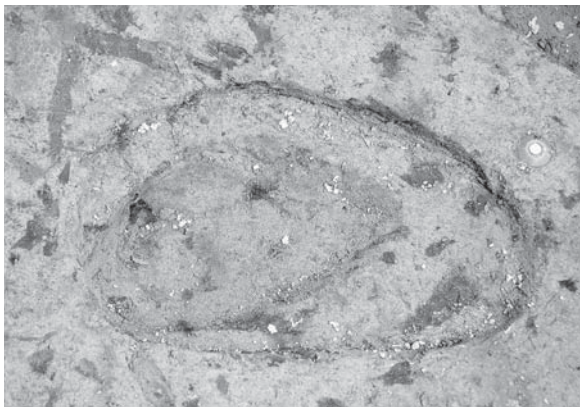
Ｐ６完掘・Ｓ→



Ｐ７完掘・Ｓ→

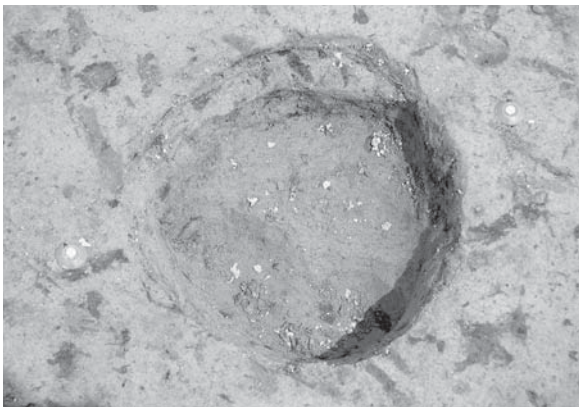


Ｐ８完掘・ＳＥ→

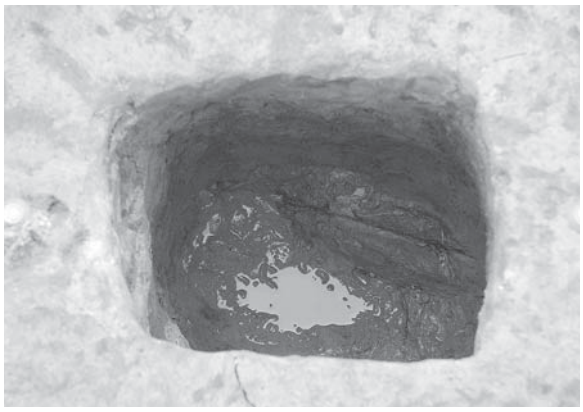


Ｐ９完掘・Ｓ→

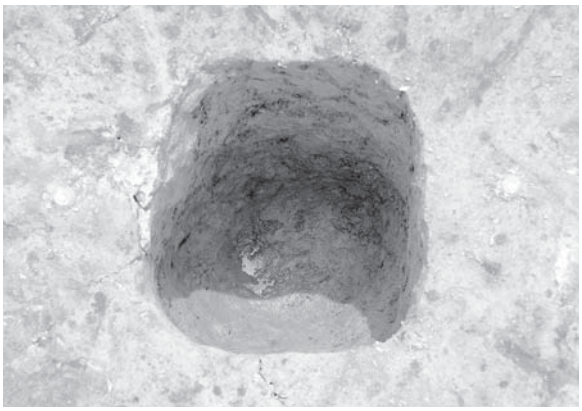
写真図版４　柱穴状土坑（１）



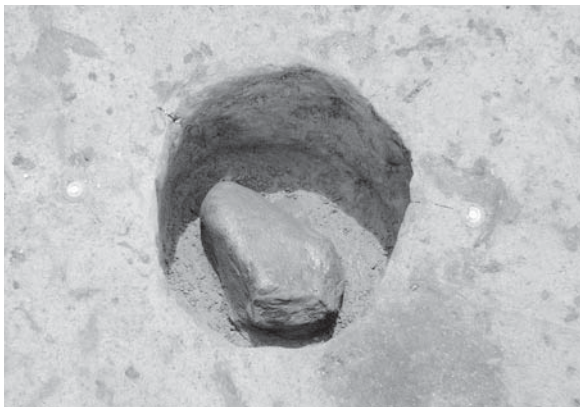
P10完掘・S→



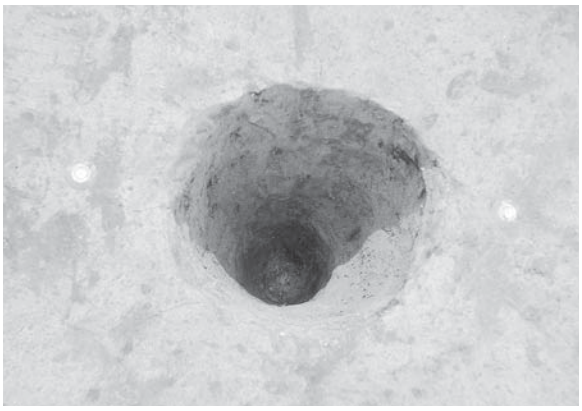
P11完掘・N→



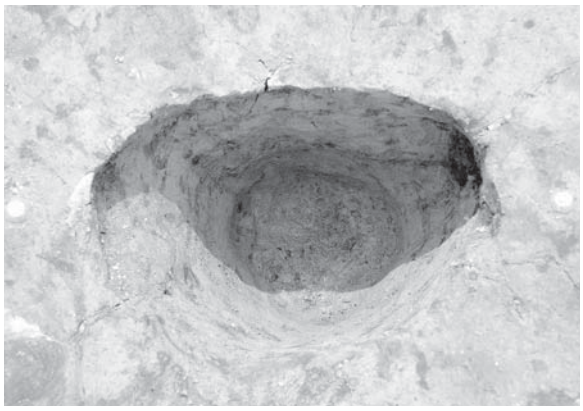
P12完掘・NW→



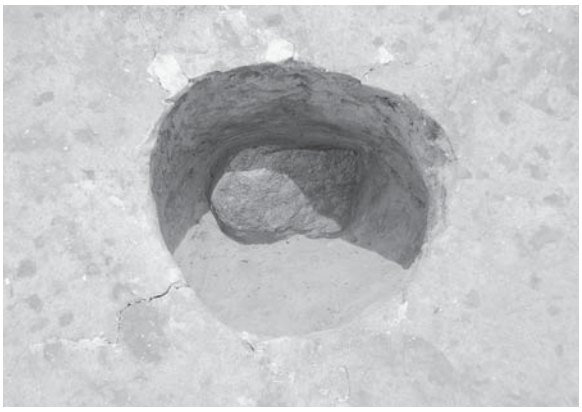
P13完掘・N→



P14完掘・N→



P15完掘・N→

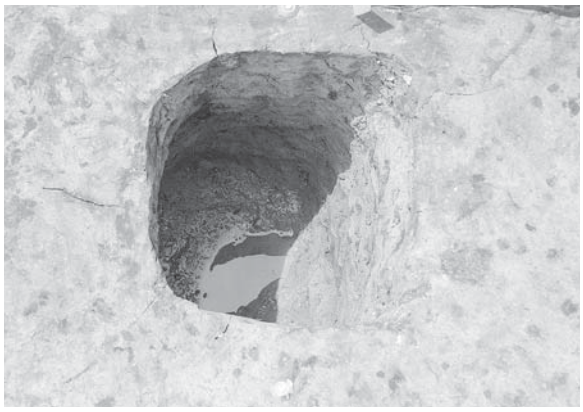


P16完掘・N→

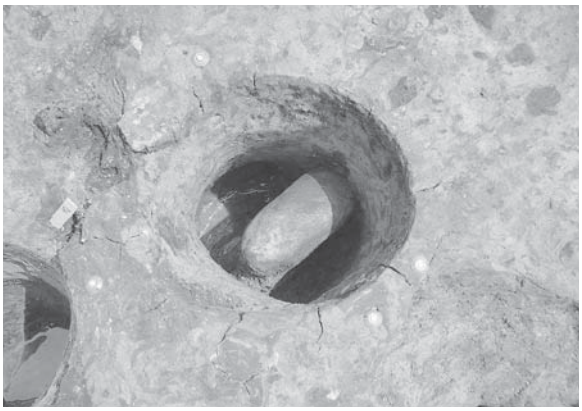
P17完掘・E→

写真図版５　柱穴状土坑（２）

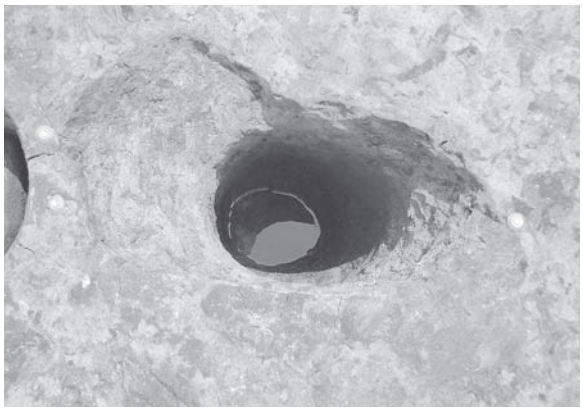
P 18完掘・E→



P 19完掘・E→

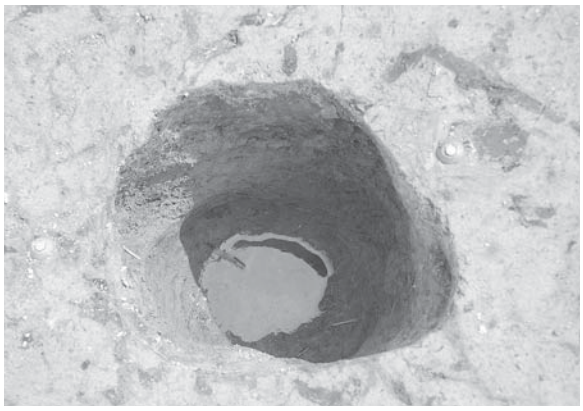


P 20完掘・W→

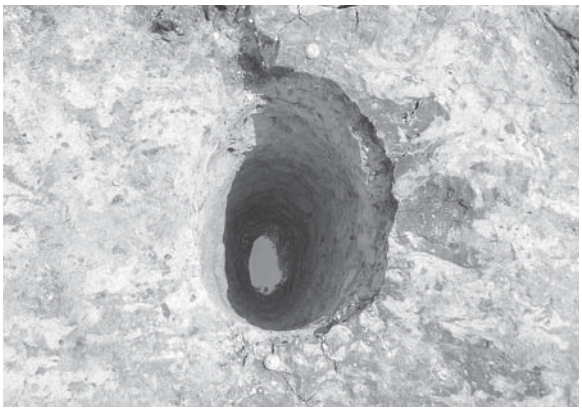


P 21完掘・N→

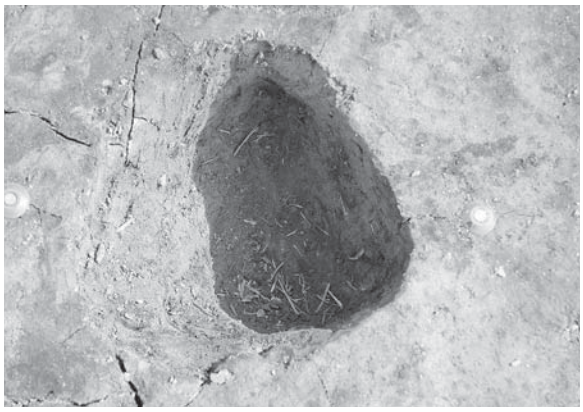
P 22完掘・S→



P 23完掘・N→



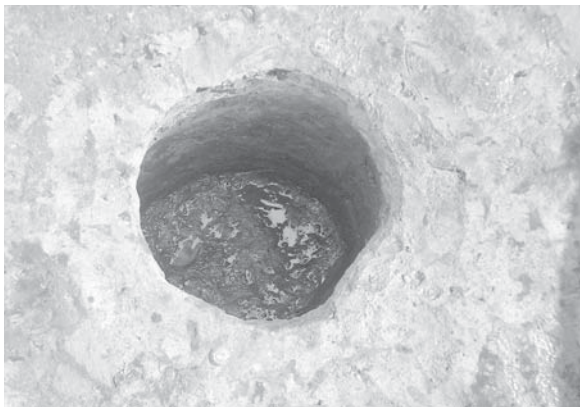
P 24完掘・N→



P 25完掘・N→

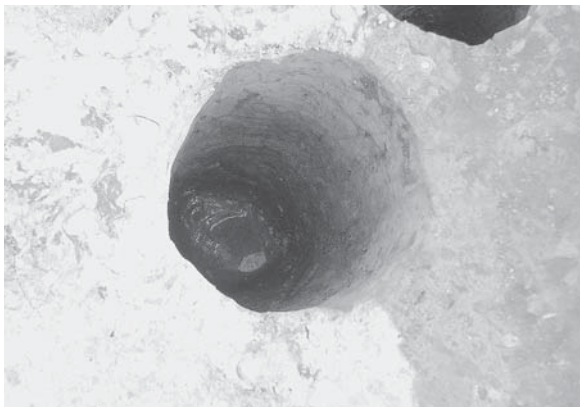
写真図版６　柱穴状土坑（３）

P 26完掘・N→

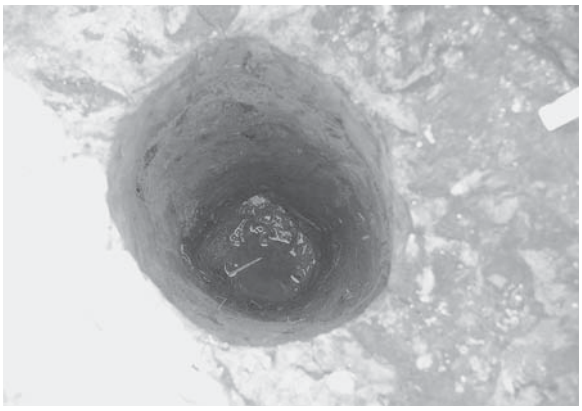


P 27完掘・N→

P 28完掘・N→



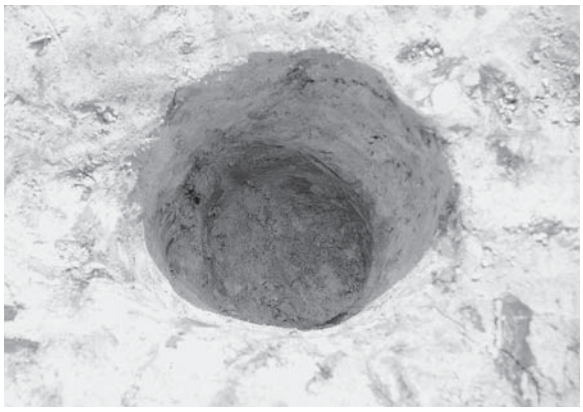
P 29完掘・N→



P 30完掘・N→

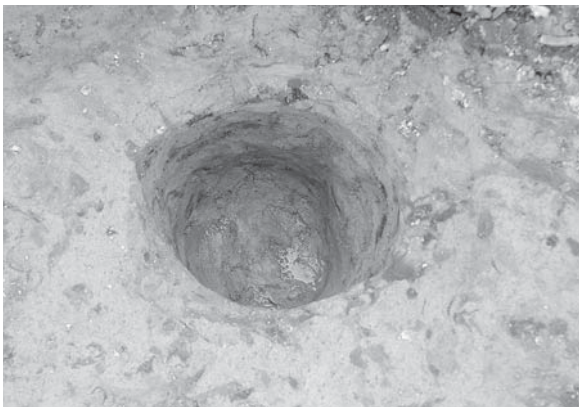
P 31・37完掘・N E→

P 32完掘・E→



P 33完掘・E→

写真図版７　柱穴状土坑（４）



P34完掘・E→

P35完掘・E→

1号性格不明遺構平面・S→

1号性格不明遺構断面・SE→

A区作業風景・S→

1

2

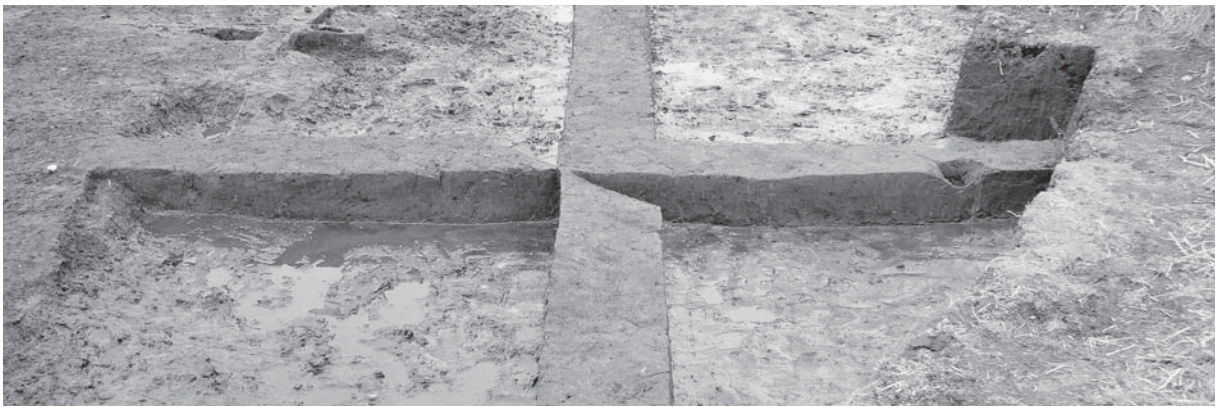
写真図版８　柱穴状土坑（５）、１号性格不明遺構、出土遺物

遺跡遠景・S→

調査区全景（上が東）

写真図版９　航空写真

全景・S→



ＮＥ－ＳＷベルト断面・ＮＷ→

ＳＥ－ＮＷベルト断面・ＮＥ→

写真図版10　１号住居跡（１）

カマド・ＳＷ→

カマドＥ－Ｗベルト断面・ＮＷ→

カマドＮＷ－ＳＥベルト断面・ＳＷ→

カマド燃焼部断面・ＮＷ→

カマド燃焼部断面・ＳＷ→

写真図版11　１号住居跡（２）

１号住居跡カマド煙出部断面・ＮＷ→

１号住居跡－カマド全景・ＳＷ→

１号住居跡－Pit １断面・ＳＷ→

１号住居跡完掘・Ｗ→

２号住居跡検出・Ｓ→

写真図版12　１号住居跡（３）、２号住居跡（１）

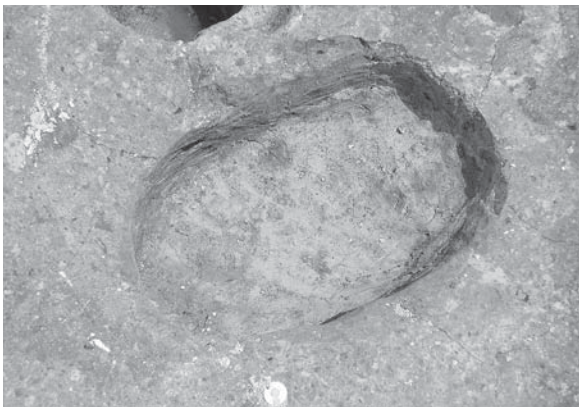
完掘・W→

S－Nベルト断面・E→

写真図版13　２号住居跡（２）

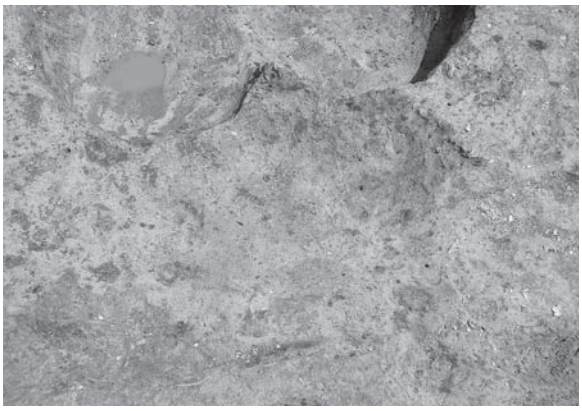
Pit １平面・ＳＥ→

Pit １断面・ＮＷ→

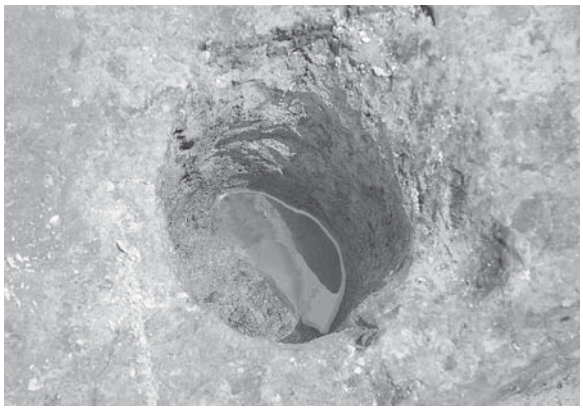


Pit ２完掘・ＳＥ→

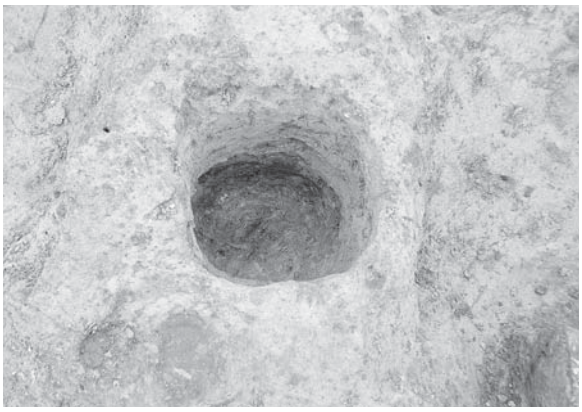
Pit ２断面・ＮＷ→



Pit ３完掘・ＳＷ→



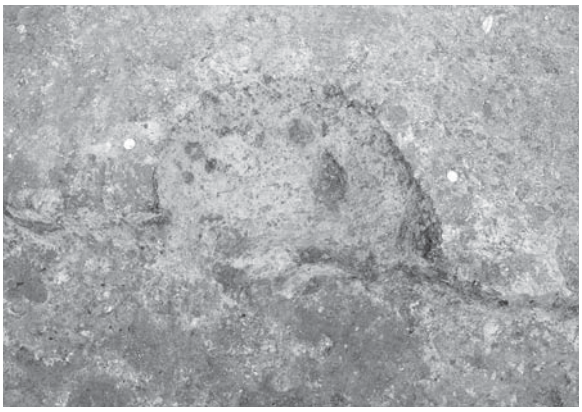
Pit ５完掘１・ＳＷ→



Pit ５完掘２・ＳＷ→

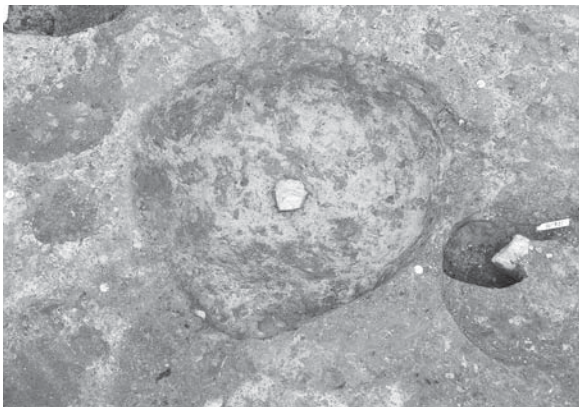
Pit ５断面・ＮＷ→

写真図版14　２号住居跡（３）



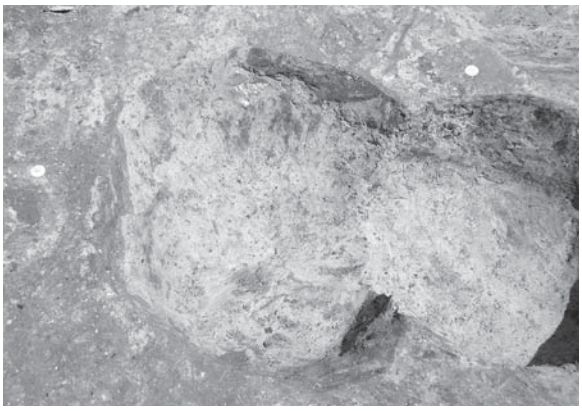
Pit ４完掘・ＮＷ→

Pit ４断面・ＮＷ→



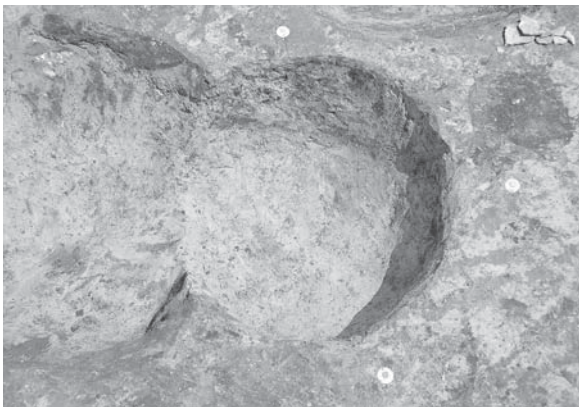
Pit ６平面・Ｅ→

Pit ６断面・ＳＷ→



Pit ７完掘・ＳＷ→

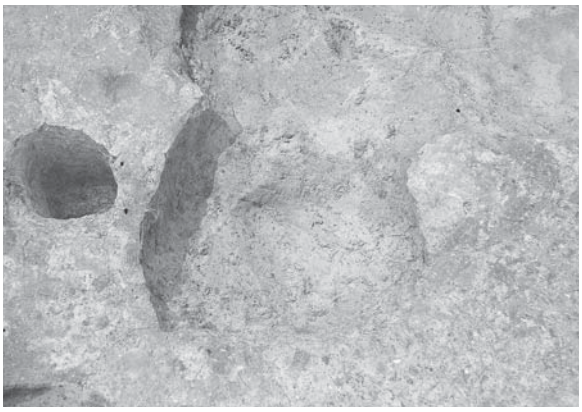
Pit ７断面・ＳＷ→



Pit ８完掘・ＳＷ→

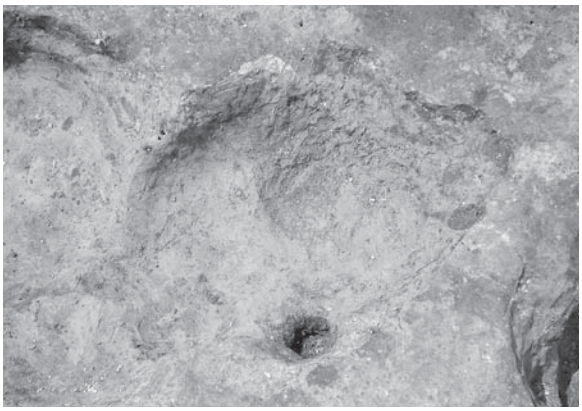
Pit ８断面・ＳＥ→

写真図版15　２号住居跡（４）



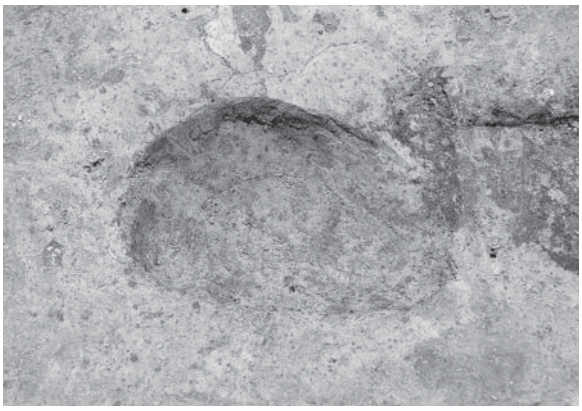
Pit ９完掘・ＳＥ→

Pit ９断面・ＮＷ→



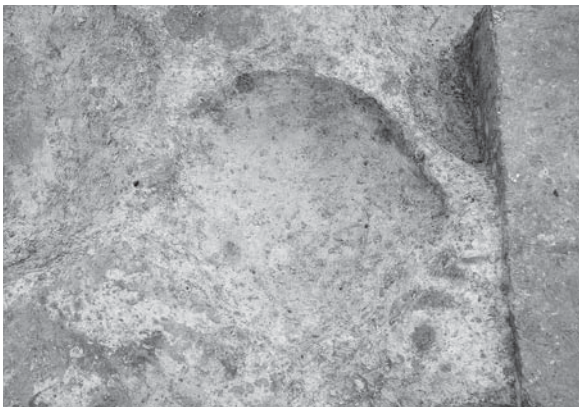
Pit10完掘・ＳＥ→

Pit10断面・ＳＷ→



Pit11完掘・ＮＥ→

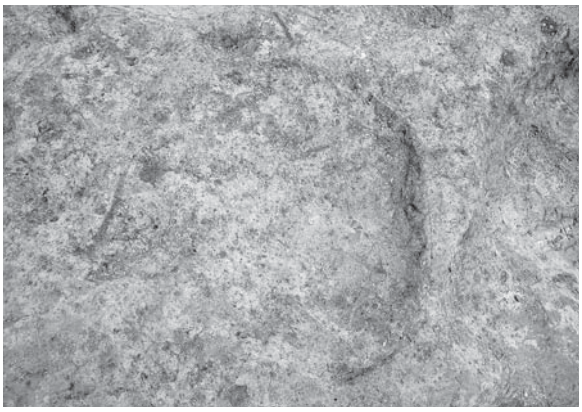
Pit11断面・ＳＷ→



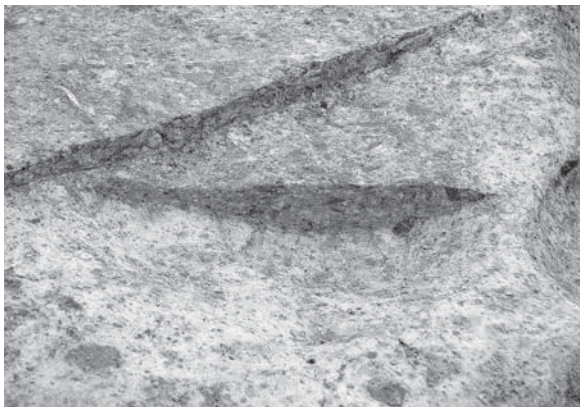
Pit13完掘・Ｗ→

Pit13断面・ＮＷ→

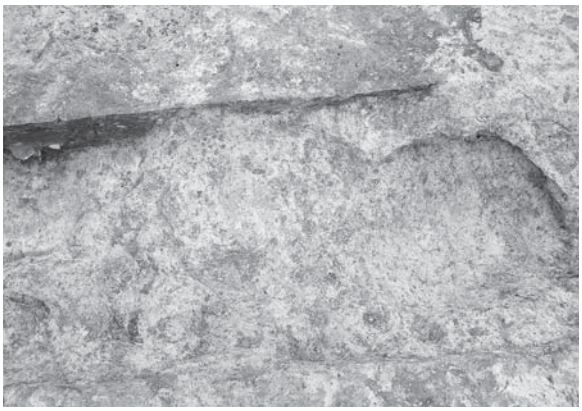
写真図版16　２号住居跡（５）



Pit14完掘・ＮＷ→

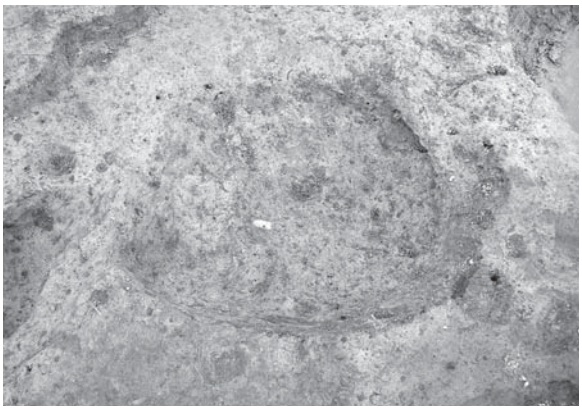


Pit14断面・ＮＷ→



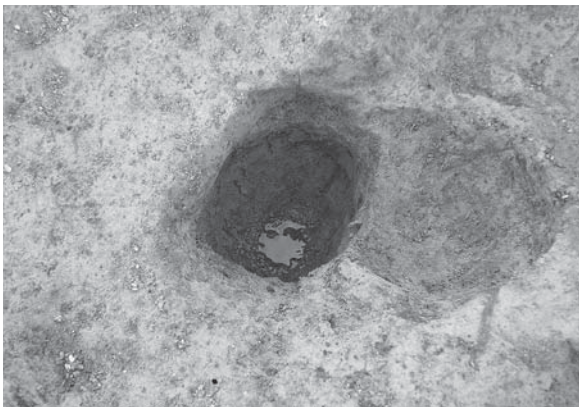
Pit15・16平面・ＳＷ→

Pit15・16断面・ＳＷ→

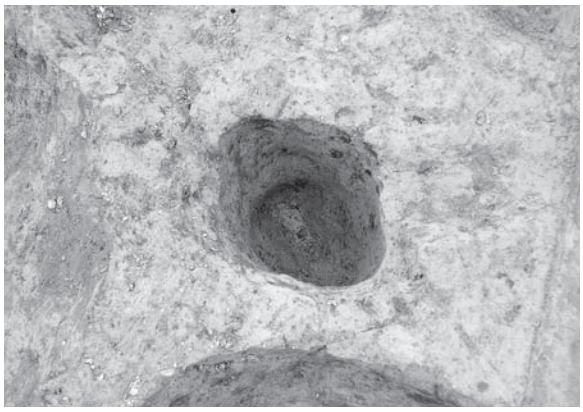


Pit17完掘・ＮＷ→

Pit17断面・ＮＷ→

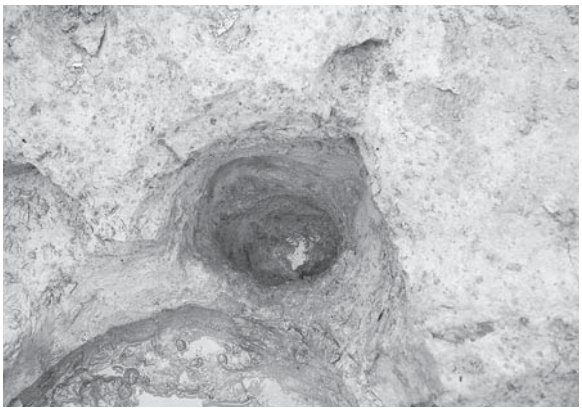


Pit18完掘・ＳＷ→



Pit19完掘・ＳＷ→

写真図版17　２号住居跡（６）



２号住居跡Pit20完掘・ＮＷ→

２号住居跡Pit12断面・Ｓ→

２号住居跡貼床断面ＮＥ－ＳＷベルト・ＮＷ→

２号住居跡貼床断面ＮＷ－ＳＥベルト・ＳＷ→

３号住居跡平面・ＮＷ→

写真図版18　２号住居跡（７）、３号住居跡（１）

遺物出土状況・Ｓ→

Ｗ－Ｅベルト断面・Ｓ→

カマド断面・ＮＥ→

カマド煙道部断面・ＮＥ→

カマド燃焼部断面・ＮＥ→

写真図版19　３号住居跡（２）

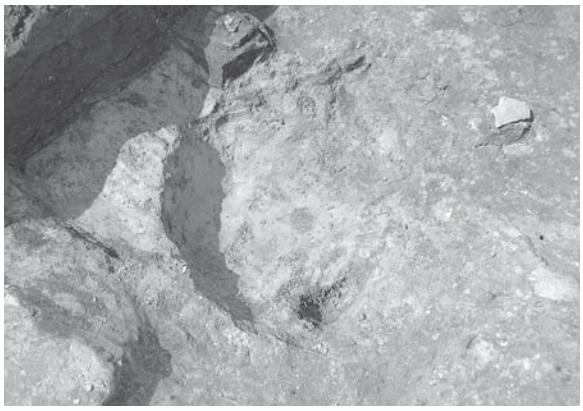
カマド燃焼部ＮＥ－ＳＷベルト断面・ＮＷ→

カマド燃焼部断ち割りＳＥ－ＮＷベルト断面・ＮＥ→

カマド燃焼部断ち割りＮＥ－ＳＷベルト断面・ＮＷ→

Pit １断面・ＳＷ→

Pit ２断面・ＳＥ→



Pit ３完掘・Ｓ→

Pit ５断面・ＳＷ→

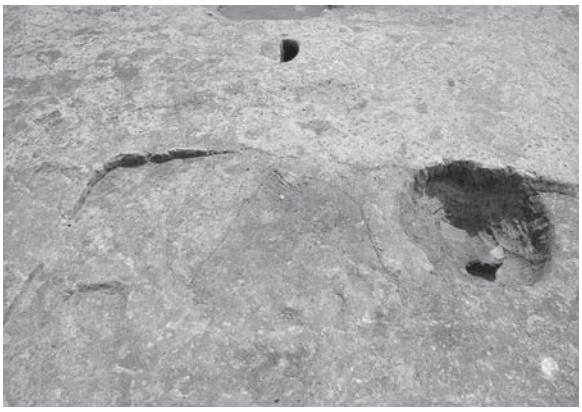
貼床土内遺物出土状況・Ｗ→

写真図版20　３号住居跡（３）

完掘・ＮＷ→

Ｗ－Ｅベルト断面・Ｓ→

写真図版21　４号住居跡（１）



カマド検出・W→

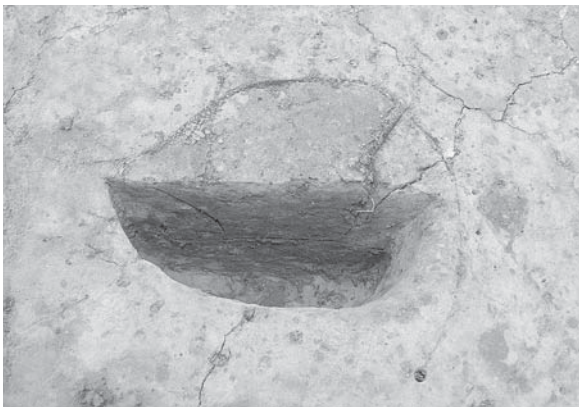
カマド全景・W→

カマド燃焼部ＮＥ－ＳＷベルト断面・ＮＷ→

カマド燃焼部ＮＷ－ＳＥベルト断面・ＳＷ→

カマド燃焼部断ち割りＮＥ－ＳＷベルト・ＮＷ→

カマド燃焼部断ち割りＮＷ－ＳＥベルト・ＳＷ→



カマド煙出部断面・ＳＷ→

Pit 1 断面・Ｓ→

写真図版22　４号住居跡（２）

完掘・ＮＷ→

検出・ＳＥ→

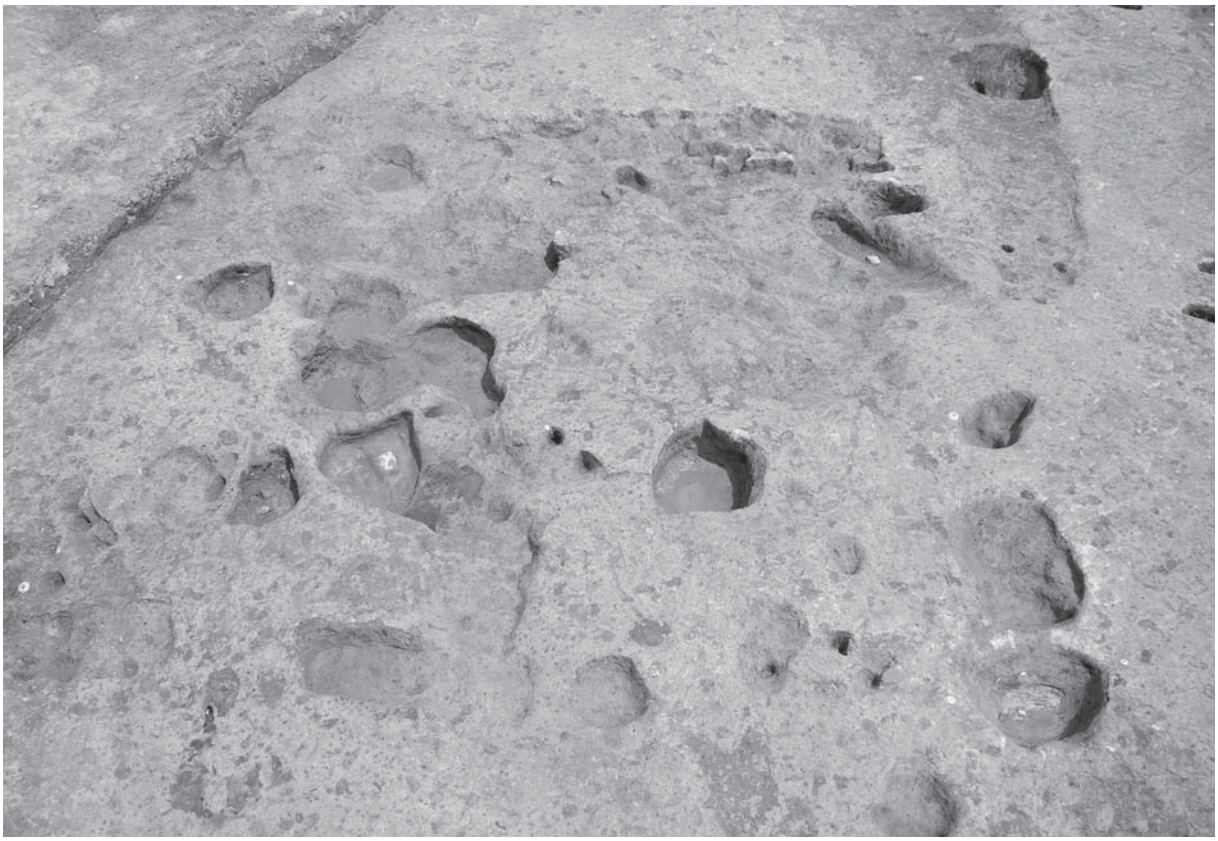
北側ベルト断面・ＳＷ→

西側ベルト断面・ＳＥ→

南側ベルト断面・ＳＷ→

写真図版23　１号住居状遺構

遺物出土状況・S→

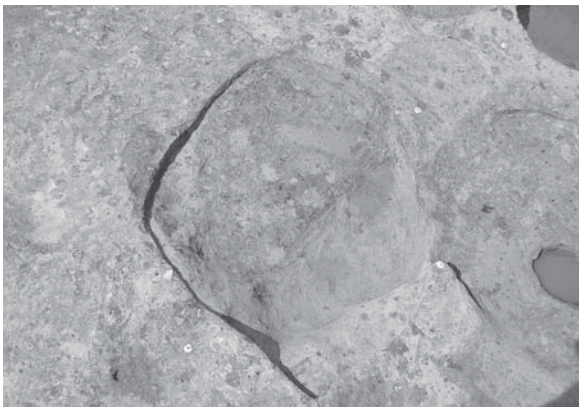


完掘・S→

写真図版24　２号住居状遺構

完掘・ＳＷ→

貼床ＮＷ－ＳＥベルト断面・ＳＷ→

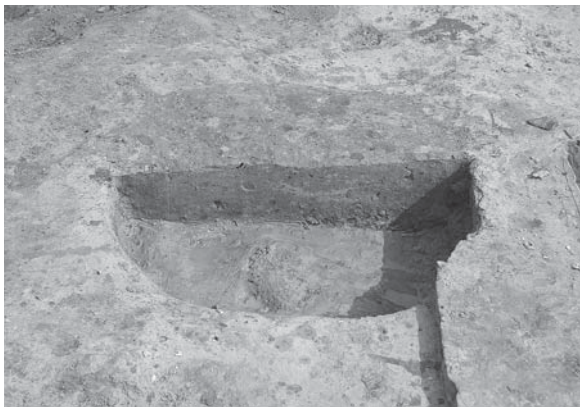


Pit １完掘・Ｓ→

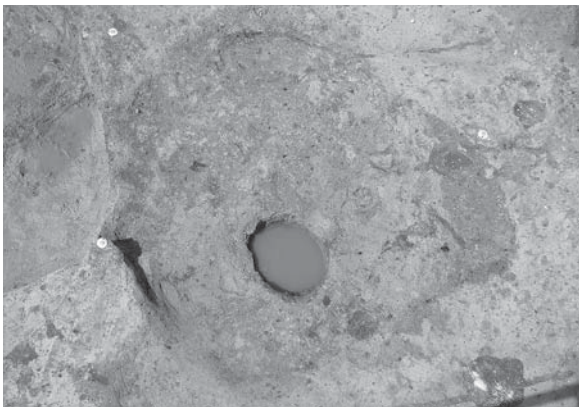
Pit １断面・ＳＥ→

写真図版25　３号住居状遺構（１）

３号住居状遺構Pit ４完掘・ＮＷ→

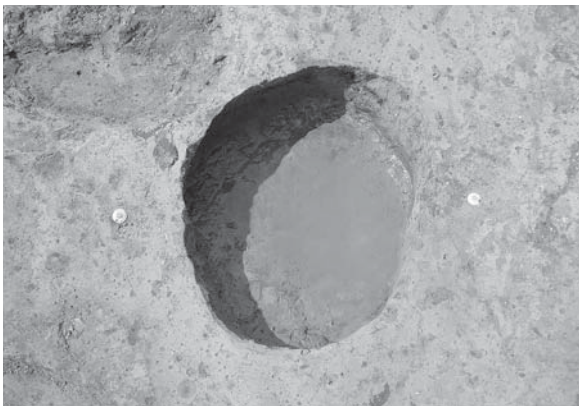


３号住居状遺構Pit ４断面・ＮＷ→



３号住居状遺構Pit ２完掘・Ｓ→

３号住居状遺構Pit ２断面・Ｓ→



３号住居状遺構Pit ３完掘・ＳＥ→

３号住居状遺構Pit ３断面・ＳＥ→

１号土坑完掘・Ｅ→

１号土坑断面・Ｅ→

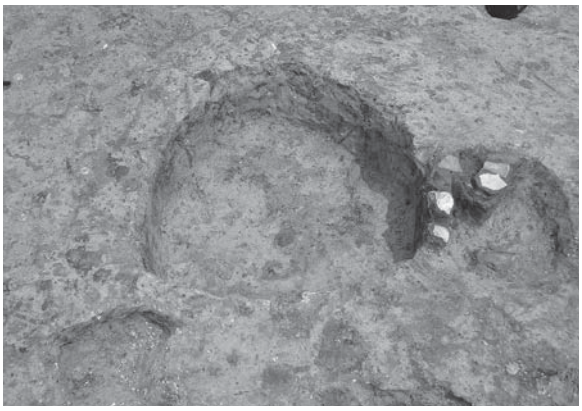
写真図版26　３号住居状遺構（２）、１号土坑

２号土坑完掘・ＳＥ→

２号土坑断面・ＳＥ→

３号土坑遺物出土状況・ＳＥ→

３号土坑断面・ＳＥ→



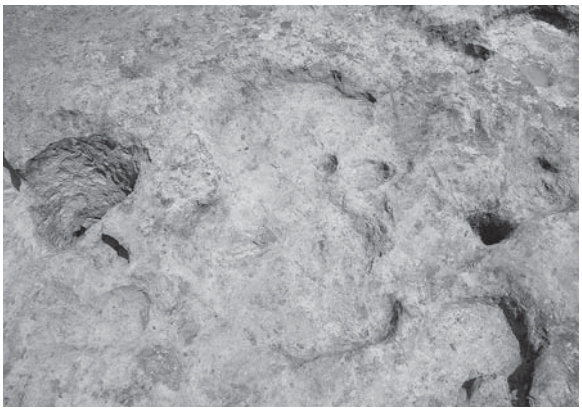
４号土坑完掘・ＳＷ→

４号土坑断面・ＳＷ→

５号土坑完掘・ＳＷ→

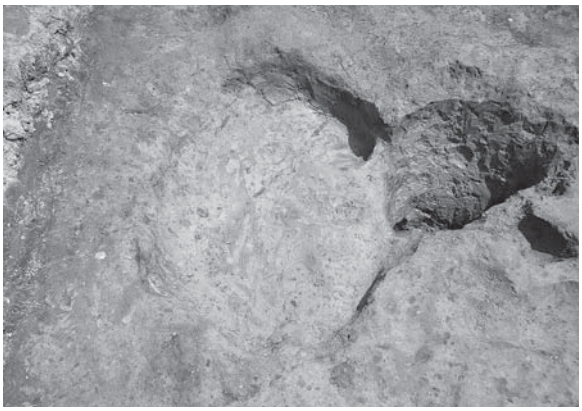
５号土坑断面・ＳＷ→

写真図版27　２～５号土坑



６号土坑完掘・ＳＷ→

６号土坑断面・ＳＷ→

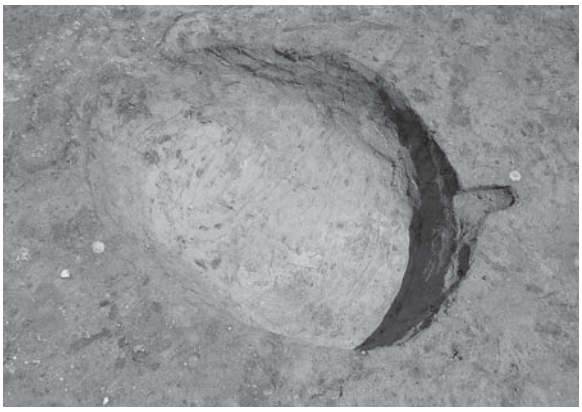


７号土坑完掘・ＳＷ→

７号土坑断面・ＳＷ→

８号土坑完掘・ＳＷ→

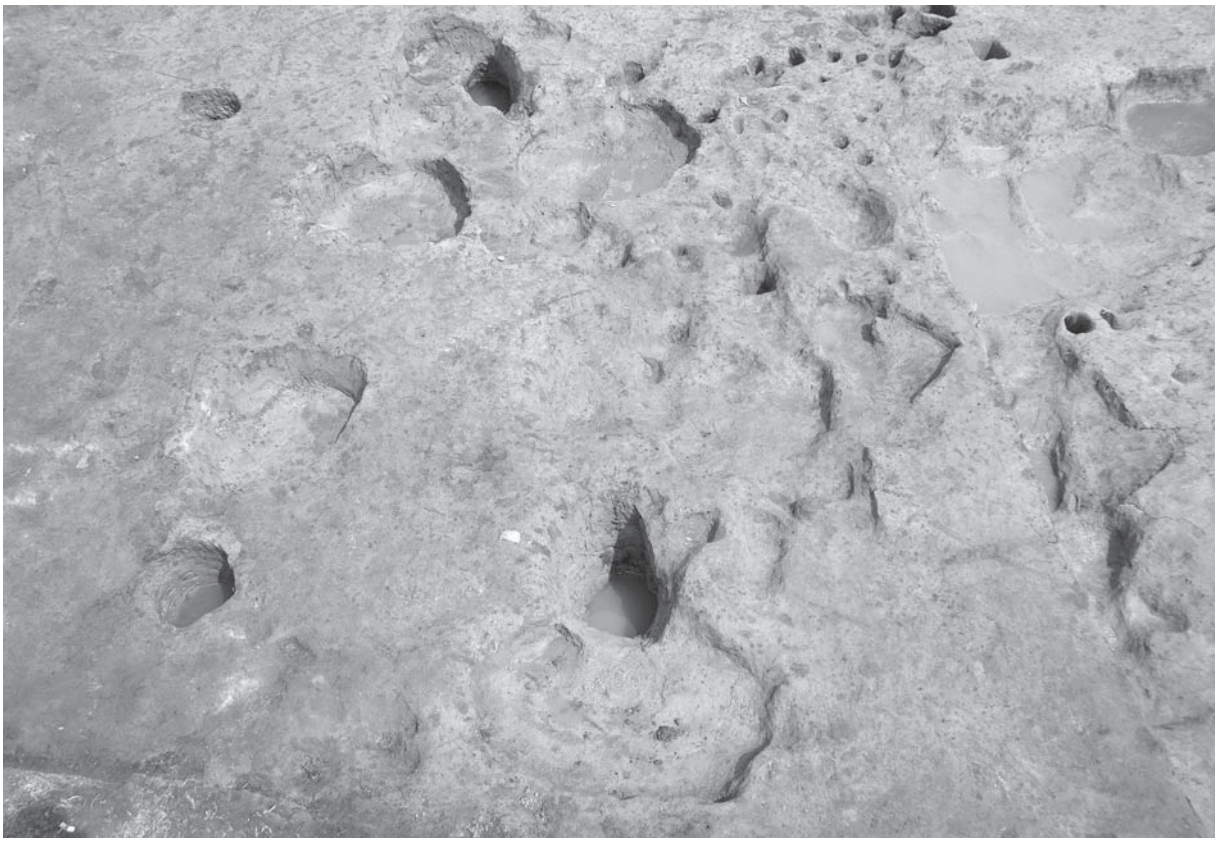
８号土坑断面・ＮＥ→



９号土坑完掘・ＳＷ→

９号土坑断面・ＳＷ→

写真図版28　６～９号土坑



4～9号土坑完掘・W→

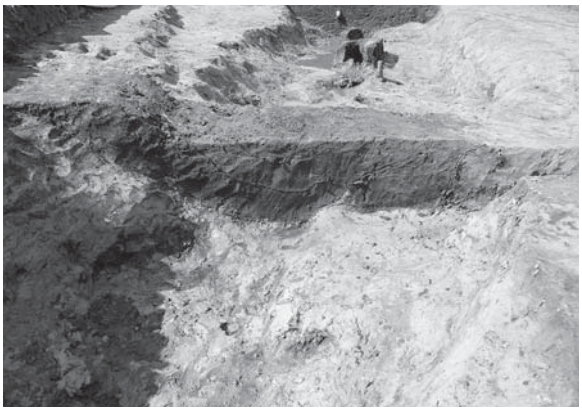
4～9号土坑遺物出土状況・S→

写真図版29　4～9号土坑

完掘・Ｓ→

北側断面・Ｓ→

中央部断面・ＳＷ→

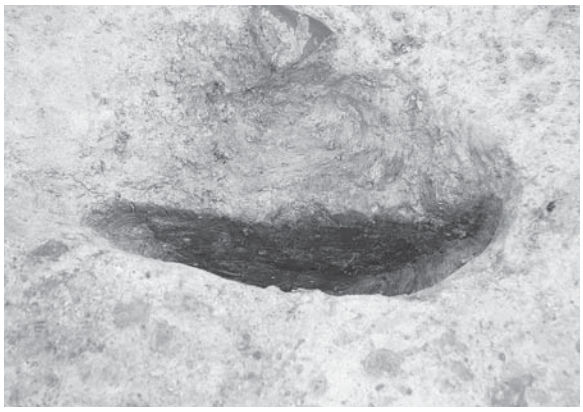


南側断面・Ｓ→

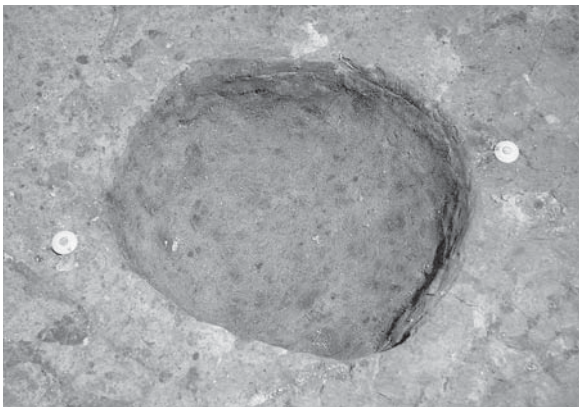
遺物出土状況・Ｓ→

写真図版30　１号溝跡

Ｐ１完掘・ＳＥ→

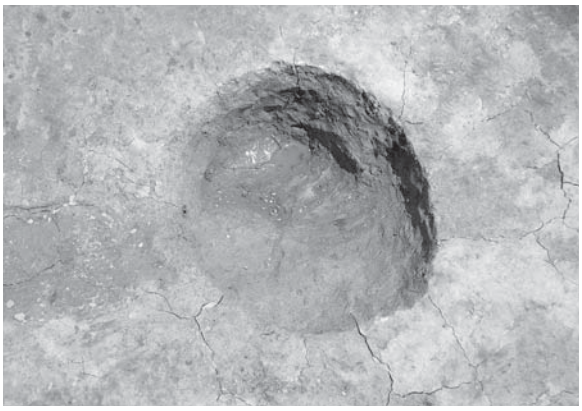


Ｐ１断面・ＳＥ→



Ｐ２完掘・ＳＷ→

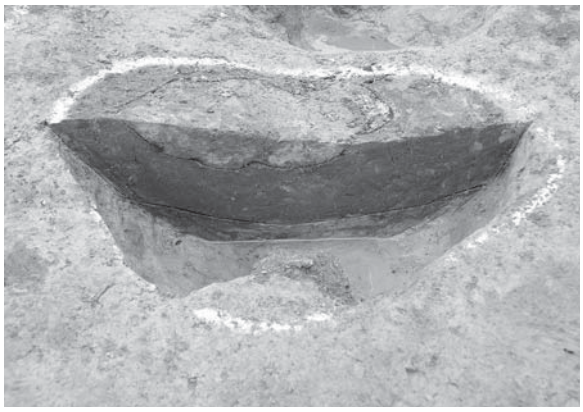
Ｐ２断面・ＳＷ→



Ｐ３完掘・Ｗ→

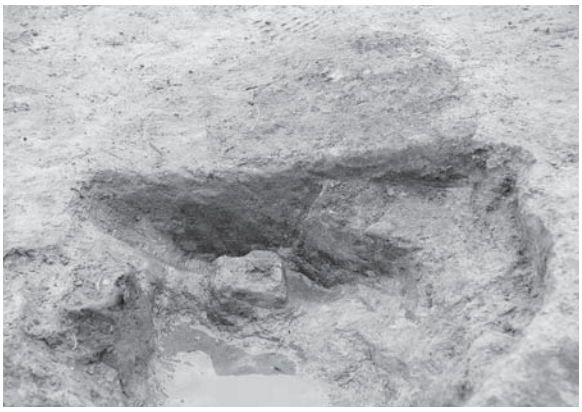
Ｐ４断面・ＳＥ→

Ｐ５土器出土状況・Ｓ→



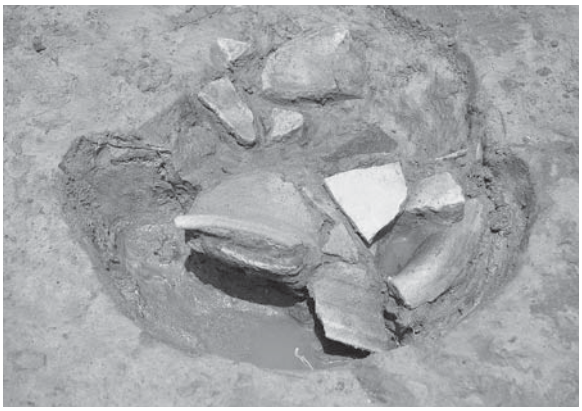
Ｐ５断面・Ｓ→

写真図版31　Ｐ１～５



Ｐ６断面・ＳＷ→

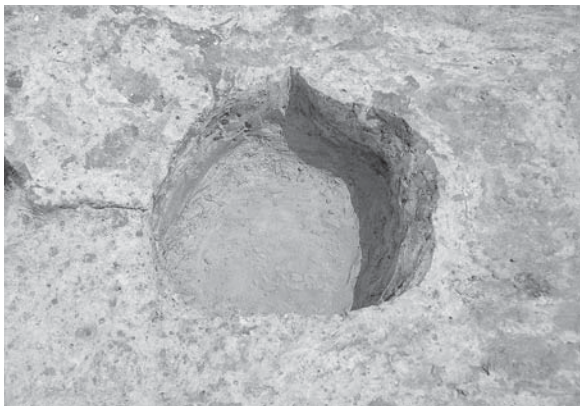
Ｐ７断面・Ｓ→



Ｐ８遺物出土状況・Ｓ→

Ｐ８断面・Ｓ→

Ｐ９遺物出土状況・Ｓ→

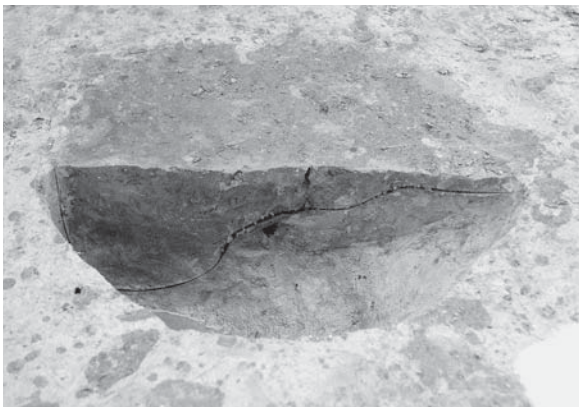


Ｐ９完掘・Ｓ→

Ｐ10遺物出土状況・ＳＥ→

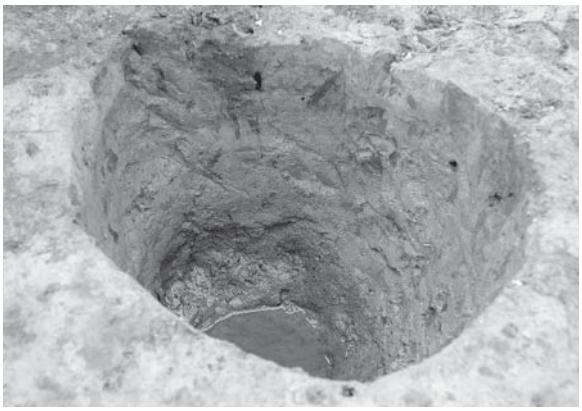
Ｐ10断面・ＳＷ→

写真図版32　Ｐ６～10

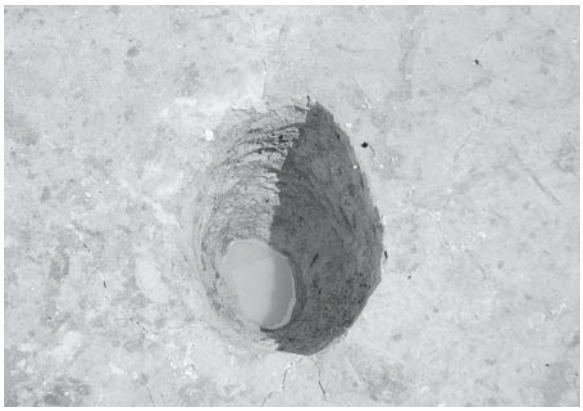


P11断面・SW→

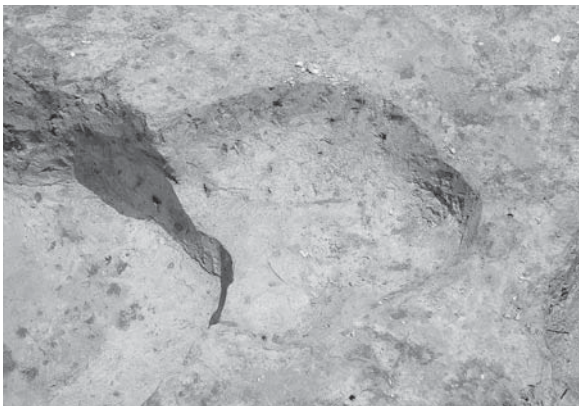
P12断面・SW→



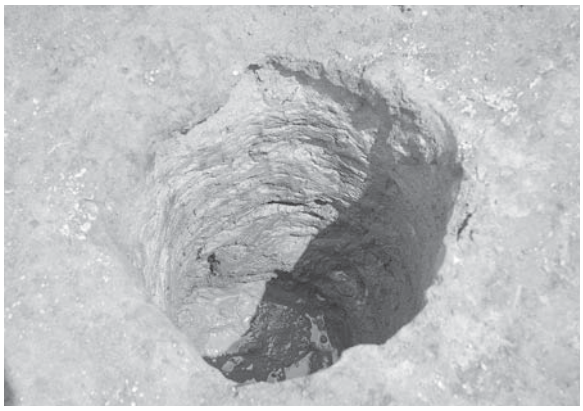
P13完掘・SW→



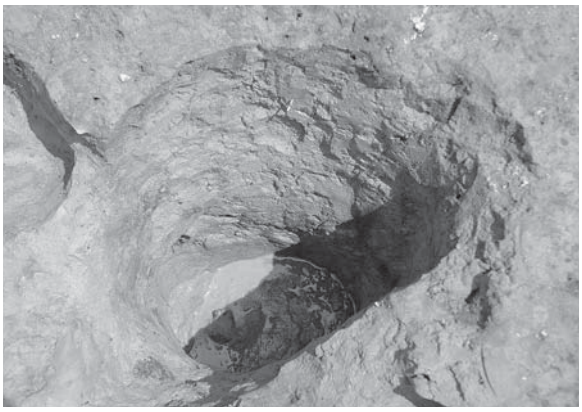
P14完掘・SW→



P15完掘・SW→



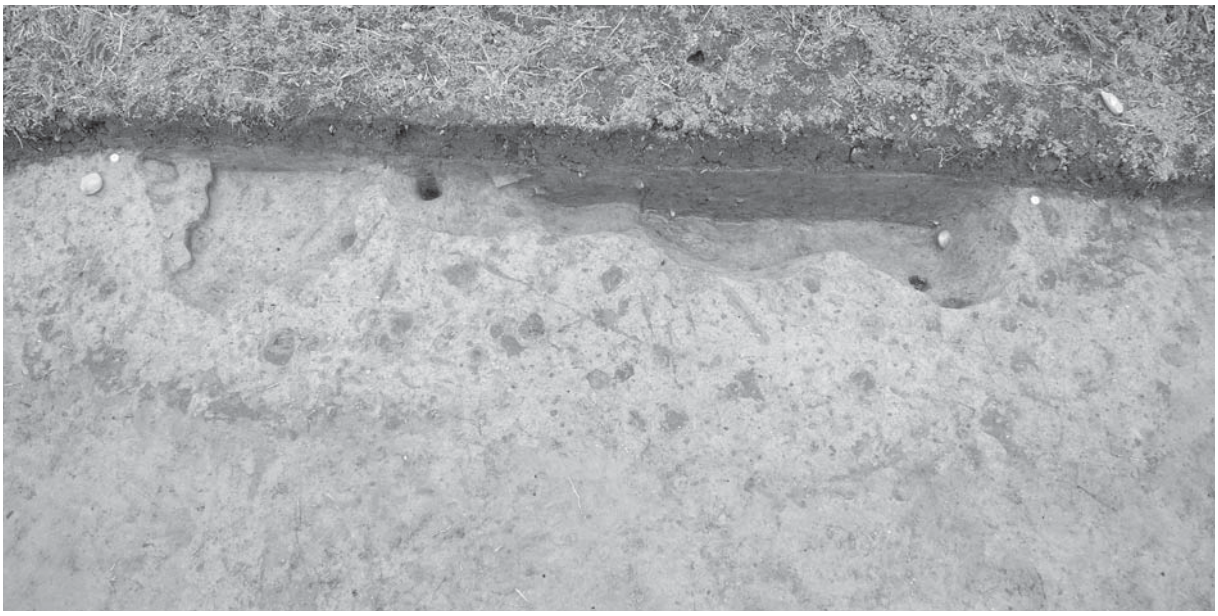
P16完掘・S→



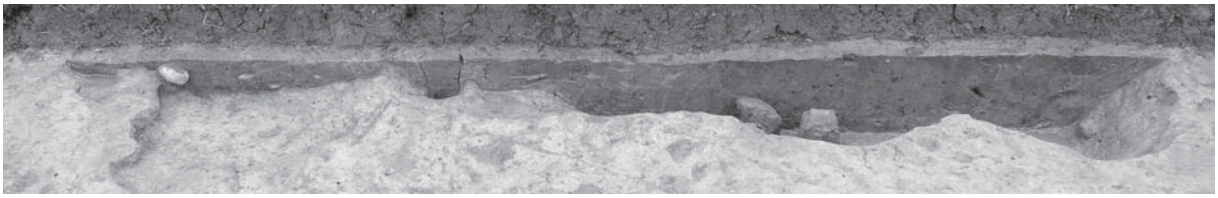
P17完掘・SW→

P5～8全景・S→

写真図版33　P5～8・11～17



1号性格不明遺構完掘・E→



1号性格不明遺構断面・E→

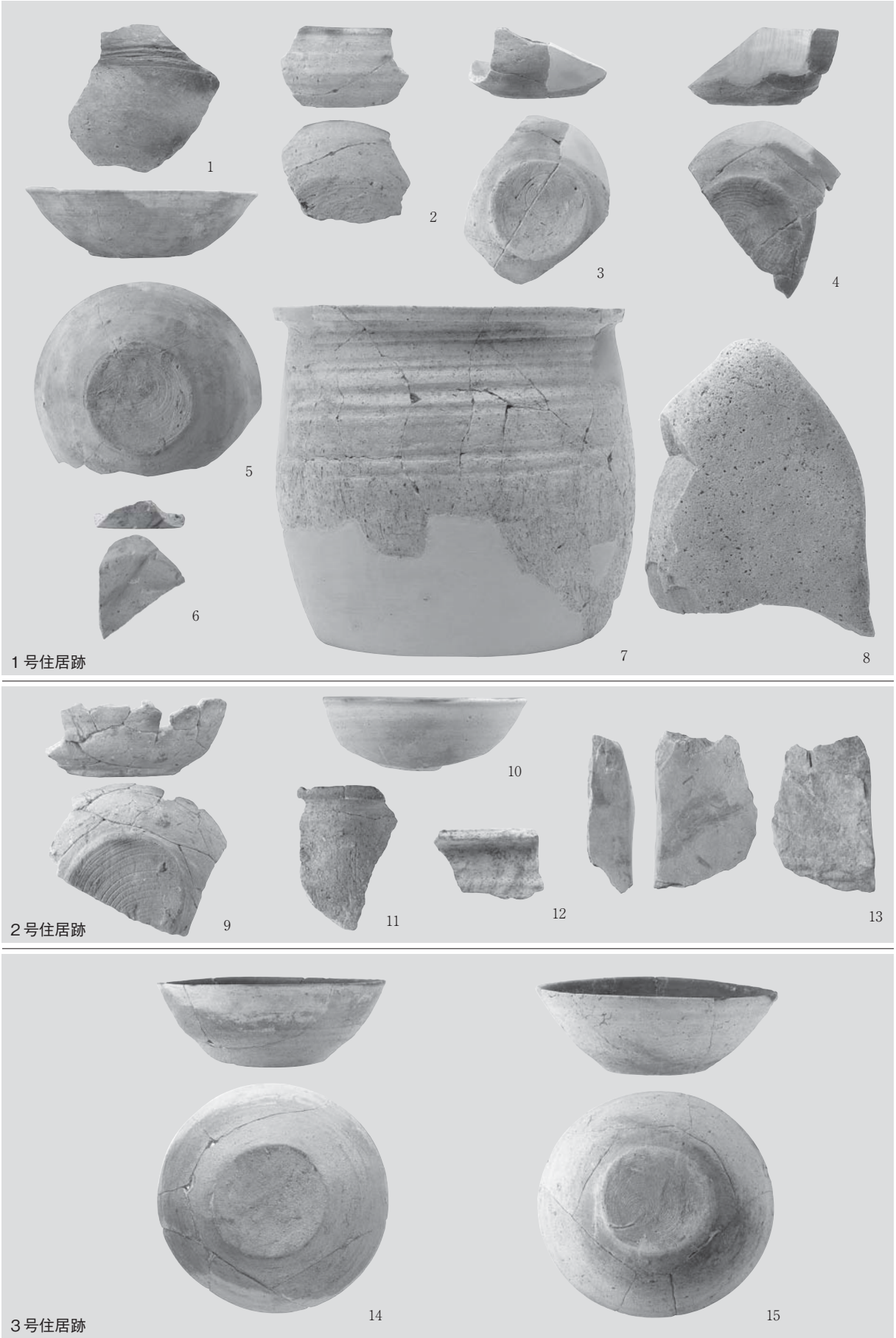
調査区東端部・S→

調査区南端部・E→

調査区南～東側・N→

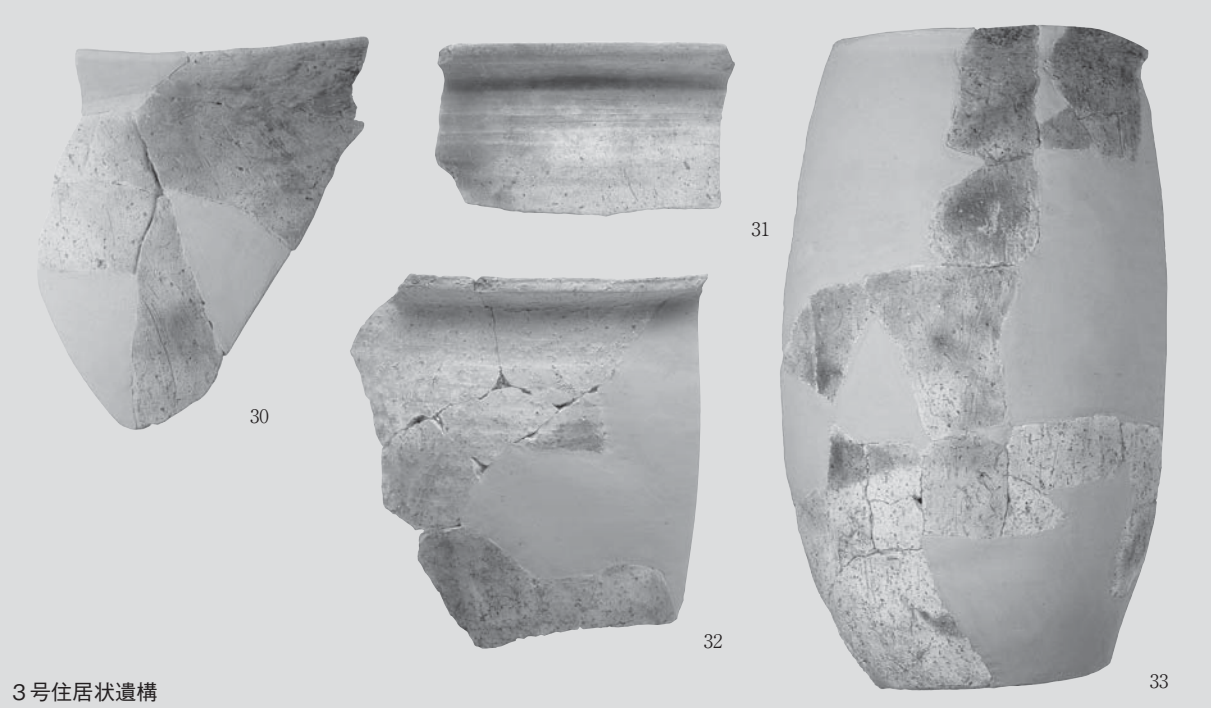
調査区南端部作業風景・E→

写真図版34　1号性格不明遺構、調査区

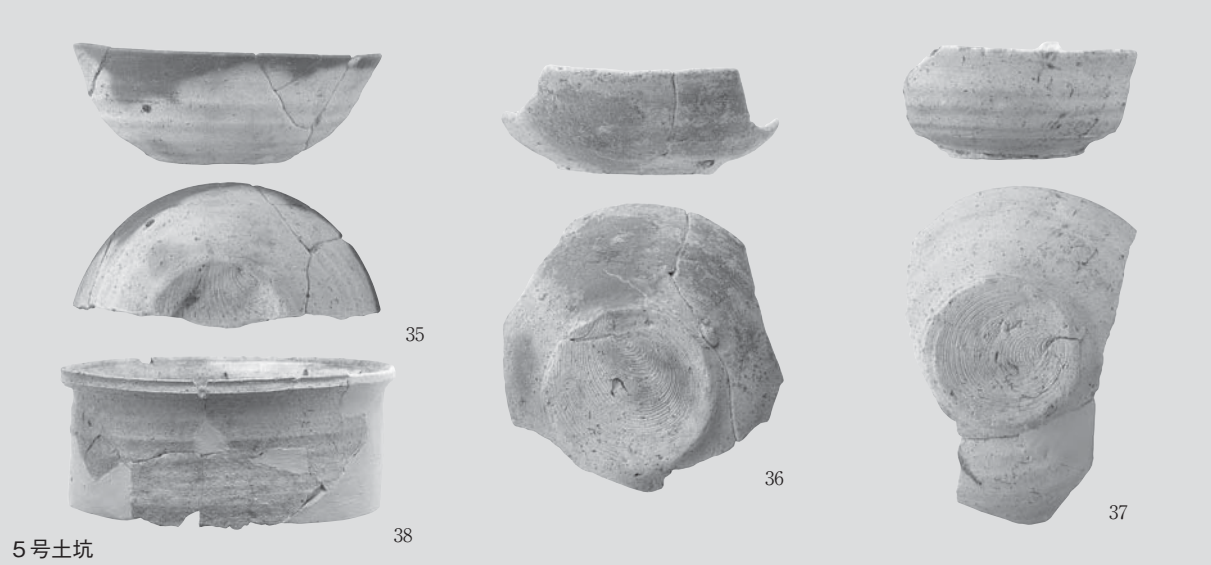


写真図版35　遺構内出土遺物１

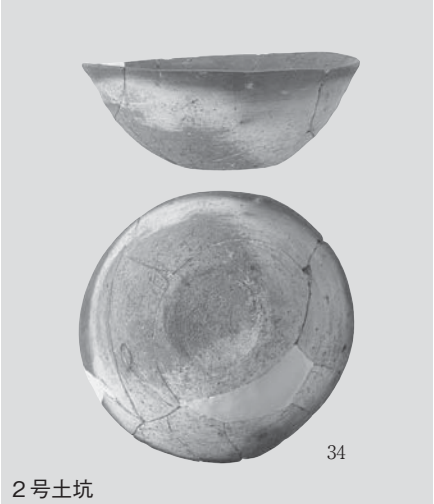
写真図版36　遺構内出土遺物２



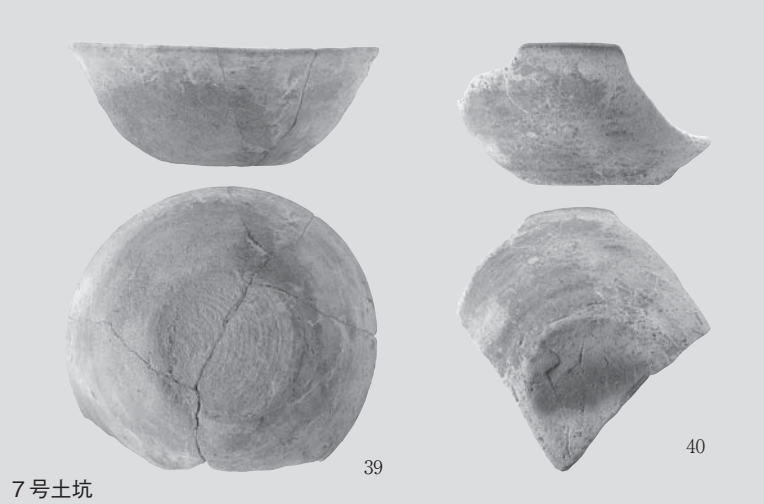
３号住居状遺構



５号土坑



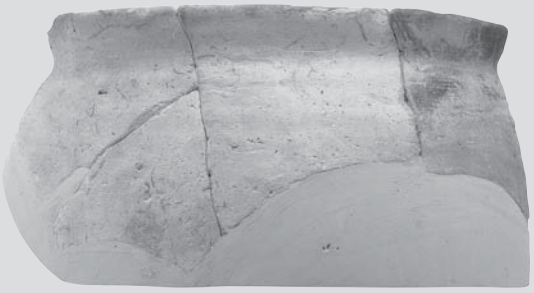
２号土坑



７号土坑

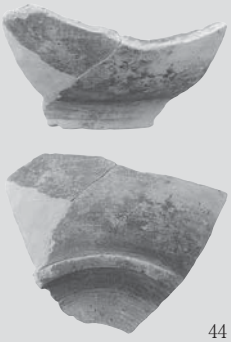
写真図版37　遺構内出土遺物３

41


42

7号土坑

43


44

45

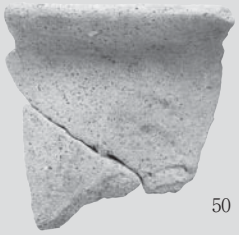
46

47

48

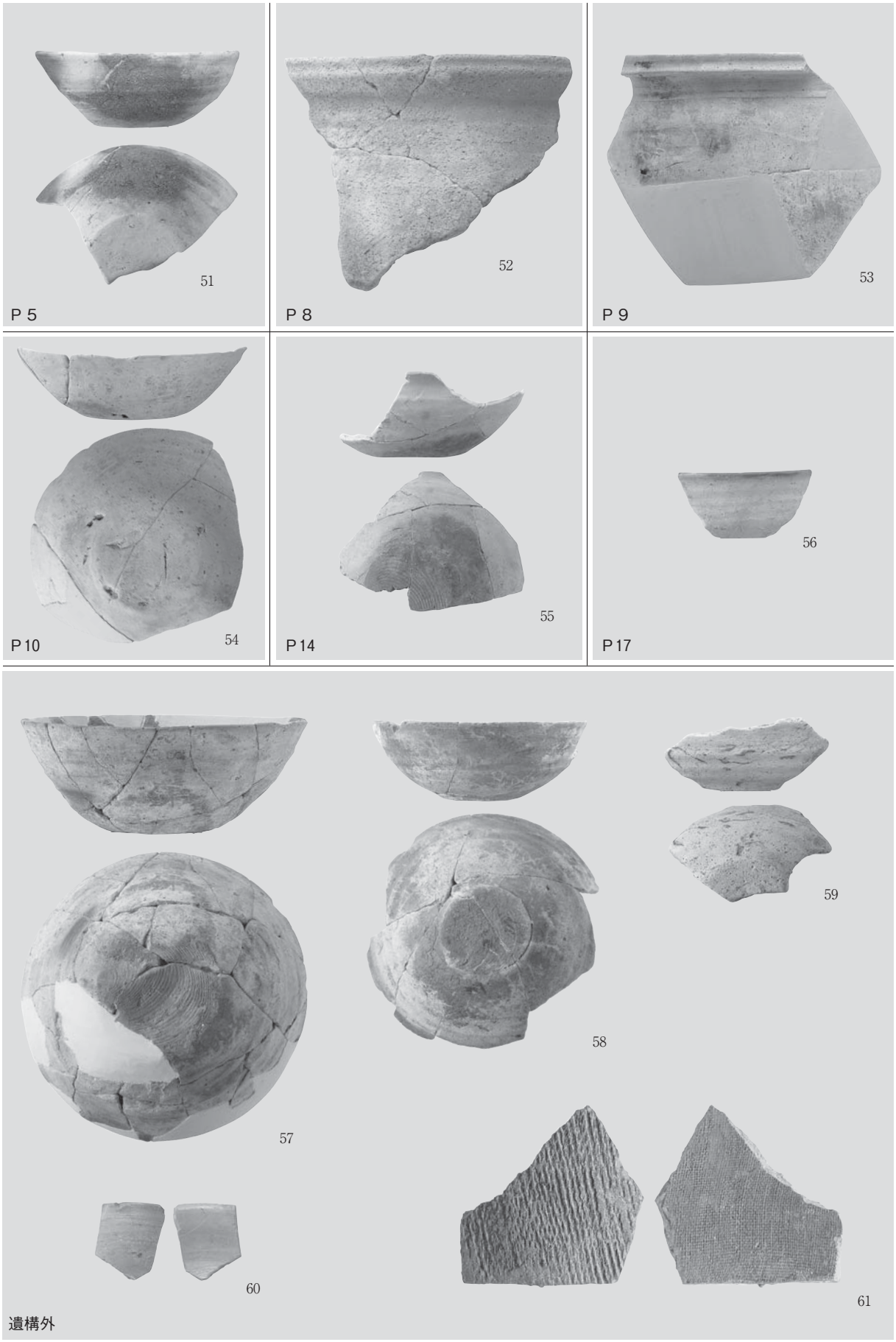
49

1号溝跡


50

P 2

写真図版38　遺構内出土遺物４



写真図版39　遺構内出土遺物５、遺構外出土遺物

報告書抄録

ふりがな	ぜにくらいせき・ようがいいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	銭倉遺跡・要害遺跡発掘調査報告書
副書名	経営体育成基盤整備事業南下幅北部地区関連遺跡発掘調査
巻次	
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第614集
編著者名	溜 浩二郎
編集機関	(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
所在地	〒020－0853　岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地　　TEL（019）638－9001
発行年月日	2013年3月21日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
ぜにくら 銭倉遺跡	いわてけんおうしゅう 岩手県奥州 しいさわくな 市胆沢区南 ったあざぜにくら 都田字銭倉 24-2ほか	03215	NE15-2215	39度 08分 52秒	141度 05分 15秒	2011.04.26 ～ 2011.05.31	1,167㎡	経営体育成基盤整備事業南下幅北部地区に伴う緊急発掘調査
ようがい 要害遺跡	いわてけんおうしゅう 岩手県奥州 しいさわくな 市胆沢区南 ったあざもとき 都田字本木 ちない 地内	03215	NE15-2256	39度 08分 33秒	141度 05分 24秒	2011.05.12 ～ 2011.06.22	1,500㎡	経営体育成基盤整備事業南下幅北部地区に伴う緊急発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
銭倉遺跡	集落跡	近世	土坑1基 溝跡3条 柱穴状土坑37個	近世陶器2点	
要害遺跡	集落跡	古代	竪穴住居跡4棟 住居状遺構3基 土坑9基 溝跡1条 柱穴状土坑17個	土師器・須恵器、灰釉陶器、瓦	9世紀代の瓦出土。

要約	今回調査を行った銭倉遺跡では東端の調査区で近世の柱穴群が見つかったが、中央～西側からは遺構・遺物がほとんど見つかっておらず、遺跡の主体部から外れた場所である可能性が高いことが明らかになった。要害遺跡は過去に今回と隣接する箇所の調査が行われ、奈良～平安時代の遺構・遺物が見つかっているが、今回の調査では奈良時代の遺構・遺物はなく、全て平安時代のもので集落跡であった。

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第614集
銭倉遺跡・要害遺跡発掘調査報告書
経営体育成基盤整備事業南下幅北部地区関連遺跡発掘調査

印　刷　平成25年3月18日
発　行　平成25年3月21日

編　集　（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020－0853　岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地
電話（019）638－9001
発　行　岩手県県南広域振興局農政部農村整備室
〒023－1111　岩手県奥州市江刺区大通り７番13号
電話（0197）35－8447
（公財）岩手県文化振興事業団
〒020－0023　岩手県盛岡市内丸13番１号
電話（019）654－2235
印　刷　株式会社モノグラム社
〒024－0034　岩手県北上市諏訪町一丁目３－21
電話（0197）65－3315

©（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　2013